
魔界大戦

八雲 蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔界大戦

【Nコード】

N1764P

【作者名】

八雲 蒼

【あらすじ】

普通の一般人である主人公は予期せず勇者と魔王の封印を解く。自分のやった事の重大さを知り勇者と一緒に魔王討伐の旅へ――

これ以上はネタバレになるので本編でよろしくお願いします。

主人公最強物です。苦手な人は戻るを押してください。

続きが気になった人や今後の展開に期待と期待していただけたらお気に入り登録をお願いします。

未熟者なので誤字脱字等、ご指南等よろしく願います。

感想もできればもらいたいです。※作者名、変更しました。(旧名 K I N U K A Z U)

はじまり（前書き）

僕が初めて書いた小説です。

まだまだダメなところもあると思いますが、最後まで見てくださいますか？
お願いします！！

はじまり

「いいから俺ごと封印しろ！」

誰かが何か言っている・・・何だ？・・・

目もあけられないくらいの光が世界を包む・・・

そして目の前がまっしろになった。・・・

? ? ? ?

流れていく風景を蒼空はボーっと眺めていた。

今から彼、氷堂蒼空ひょうどうそうを乗せた車はじいちゃんの住む田舎に向かって進んでいる。

だが、俺はじいちゃん家には行きたくない。

その理由は昔してしまった約束のせいで俺は毎回夏休みには神社をやっているじいちゃん家の掃除とかをされているからだ。

「それにしても今日見た、『いいから俺ごと封印しろ!』とか言っていたあの夢なんだったんだろ？」

そしてどんな内容だったか必死に思い出して、

「うーん。确实今の日本ではないよな・・・鎧とか着てたっぽかったし・・・」

そこでまたうーんと唸る。

「もしかして俺、今高校二年生なのに中二病とかにかかってきてるんじゃない……うわぁー」

「いや。やっぱ違う。違うと思いたい。だって妙にリアルだったし……」

ガタン

そこで車が揺れる。

そして窓の外を見る。

「もうこんなとこまで来たのか……」

そこで溜息をついてから、

「何か嫌な予感しかしねえよな。なんか最悪なことが起こりそう」

そう言っても車は蒼空のじいちゃんの家を目指し走って行った。

はじまり（後書き）

最後まで見てくださりありがとうございます。

そして3／15に改良しました。

お気に入り登録してくれたらとても嬉しいし励みになります。

到着（前書き）

どうも K I N U K A Z U です。

魔界大戦第2話到着です。

ちよっと内容カスイかもありますが、温かい目で見守ってください。
では2話到着です。よろしくお願いします。

到着

「つ、ついに来てしまった・・・。」

蒼空の声は絶望に震えていた。

そう蒼空は田舎で神社をやっている、じいちゃん家に来てしまったのである。

「ここを登るの〜？」

蒼空の目の前には1000段は有にあると思われる階段があった。

「ここは田舎なんだし、もうお年寄りばかりなんだからこんな事してたら参拝客いないよ!？」

「大丈夫だ蒼空。お前も知っているはずだ。ここの老人はありえないくらい元気だから。」

父はそう冷静に言う。

父さん分かっているのか……? いまから俺らはこの重い荷物を持つて登るというのに……

「じゃあ蒼空、荷物よろしく。」

「ハアツ？」

「だから荷物持ってさあ登れ!!」

だめだ・・・この親、子供をなんだと思っている。
もういい口論はむだだ。　しょうがない持つか。

（30分後）

「ハアハア。やっと着いた。」

蒼空はすぐ荷物を下に降ろして地面に寝転がった。

「おつかれ蒼空。ちょっと休んだら手伝ってくれ。」

神社の方から優しそうな顔をした老人が蒼空に話しかけた。

「じっ、じいちゃん。手伝うって何を？」

「もちろん掃除だよ。」

「1日目からー？てか父さんたちは？」

「部屋で休んでいるよ。元気そうだから荷物を置いてじいちゃんの部屋においで。」

蒼空は溜息を吐き、荷物を持って歩き出した。

そして慣れた様子で迷うことなく部屋にたどり着き、荷物を置いた。

「1日目からこれって・・・はあ」

そしてトボトボ歩いて自分の祖父を探す。

数分歩くと祖父を見つけたので話しかける。

「で、どこを掃除したらいいの？」

「じゃあ、廊下を全部拭いていって。終わったら壁とかてきとーに拭いて。」

「え？ここ神社だよ？部屋も多いし広いよ？廊下も全部合わせたら長いのに？」

「あたりまえじゃないか。けど、倉はやらなくていいし入るなよ。」

「倉？毎年入してくれないし、鍵もかかってるけどなんかあるの？」

「まあ、とりあえず入るなよ？鍵もつぶれてしまったから。」

「へえーそっか、まあ掃除してくるわ。」

やった。鍵がつぶれたって。これで倉がみれる。掃除終わったらいいか・・・

（3時間後）

「やっと終わった・・・本気でやったから疲れたな。まあいっか。倉に行くか。」

もう辺りはすっかり暗くなっていた・・・だが夏にしては暗くなるには早い時間だった。

そこを蒼空は疑問に思いながらも倉に向かって歩き出した。

このあと起こる事に蒼空は気づかずに・・・

到着（後書き）

ありがとうございました。

これからも頑張るので、応援よろしくお願いします。

第3話は復活!!!です。1週間以内に出します。
頑張ります!!!

復活（前書き）

K I N U K A Z Uです。

第3話復活です。

よろしくお願いします。

復活

蒼空はわくわくしながら、倉の中に入っていった。

蒼空は事前に用意しておいた、懐中電灯を取り出し、倉の中を照らした。

「うわっ。埃だらけじゃねーか！んっ？すげえ！刀だ！！」

蒼空が照らした先には鞘に入った日本刀らしきものだった。

試しに持ってみると、ずっしりと重みがあった。

刀身を抜くとシューンというような音がして、いかにも切れ味の良さそうな感じだった。

見る限り刃こぼれ1つしていなかった。

それに何か、冷たい冷気みたいのを感じる。氷みたいな・・・

蒼空は他のものを探すために刀をしまい、そばにあった机に置いた。

「へえ、思ったよりスゲエ物があるんだな。てっきりじいちゃんの恥ずかしい物だろうと思っていただけだな。」

周りを見わたした。すると、刀を置いた隣にあった黒い表紙の本に目を惹かれた。

「なんだ？この本。何て書いてあるのか、何語かもわかんねえ。」
そういつて、パラパラとめくった。

「これ、日本語？だよな・・・」

俺の目の前には昔の日本語みたいなのが書いてあった。

「えーっと・・・」

俺は書いてあった言葉を解読してから言ってみた。
すると、懐中電灯の光ではない、もっと目の眩むような光、まるで夢に見た時とそっくりの光が倉の中に満ちた。俺はとっさに目を閉じた・・・

「*&%\$#\$%」

意味の分からない言葉を発した。

なぜなら、目の前に鎧っぽい物を着た18歳くらいの男と、黒い服を着た男が居たからだ。

「ハハハハ、ついに復活した。やったぞ！やった！！」
と黒い服の男が言った。

「なぜ？封印が解けた??」
鎧を着た男が言った。

すると後ろから青い光が飛んできた。

「蒼空！！入るなと言ったじゃろ。お前が封印を解いたのか？」
そしてじいちゃんが俺の持っていた本を見る。
俺は声も出ない。

「そうか小僧お前が解いてくれたのか。ありがとよ。」
そのあと、俺は魔界へ行く。じゃあな勇者と言って黒い服の男は消えた。

「君は何て事をしてくれたんだ。このままでは魔界と人間界が滅びてしまう。」

「はぁ？」

俺はまったく訳が分からず突っ立っていた。

その後・・・

場所…じいちゃんの家

人…俺、じいちゃん、鎧を着た勇者

時間…午前2時

「蒼空何で倉に入った？」

最初に口を開いたのはじいちゃんだった。

「それよりなんなんだよ。俺が読めた言葉を言ったら光って2人出てきて1人は鎧を着ていて1人は消える。魔界と人間界が滅ぶ？何言ってるんだ？」

「それは俺が話す。」

鎧を着た男が言った。

「まず、俺の名前は・・・」

この話を聞いた後俺、氷堂蒼空は大変な事をしてしまったと知る事になる。

復活（後書き）

第4話はほとんどできてるので、水曜ぐらいまでに出します。
また見てください。

お気に入り登録などしていただけたらとっても、とっても嬉しいです。

決意（前書き）

K I N U K A Z U です。

ちよつと説明みたいなながいかも知れないですけど、がんばって読んでください。

決意

「まず、俺の名前は神城光牙（しんじょう こうが）だ。あの時魔界では、戦争が起こっていた。

これは、”魔界大戦”と呼ばれる戦いだ。俺の主、王軍VS魔王軍。あの戦いでは、最初王軍がかっていたが、戦争が終わる、俺と魔王が封印される1ヶ月前から魔王軍におされていった。王に勇者つまり俺に魔王と直接戦って勝ってきてくれと頼まれ、戦いに行った。そのとき人間界からきた人間、氷堂真地（ひょうどう しんじ）に出会い一緒に戦ってくれた。魔王と戦う前、真地は「隙を作ってくれ、そうしたら隙を見て俺がふういんする。」とだが相手は魔王、むりだった。このままじゃ負けれると思った俺は真地に俺ごと封印するよう頼み封印してもらった。それをお前が封印を解いたって訳だ。」

「俺はそんな大変な事をしてしまったのか・・・」

「氷堂真地と言うのは、わしの父さんじゃ。蒼空お前のひいじいちゃんじゃ。」

「て事は光牙とひいじいちゃんが魔王を封印して光牙はそのぎせいになった。ってことだな。」

そして光牙を見る。

沈黙が続く・・・

「そーいやお前の名前ちゃんと聞いてなかったな。」

「氷堂蒼空（ひょうどう そうら）だ。」

「それよりひいちゃん、青いビームみたいなのは、ひいじいちゃんから教わったの？」

「ああ。父さんは封印がどれぐらい持つか分からなかったらしく、復活しても大丈夫のようにしたんじゃない。けど、死ぬ前もう大丈夫これからは教えなくて良いと言われたんじゃない。」

「それと倉にあった、冷たい感じのする刀、氷の様な・・・あれもひいじいちゃんが使っていた物なのか？」

「!!」 「!!」

2人同時に驚いた顔をした。

「お前、氷の様な冷たい感じを本当に感じたのか？」

「ああ。」

「あれは真地が使っていたものだ。真地は術を使えたが、接近戦の時に使っていた刀だ。氷を自在に操り戦っていた。とても頼りになった。」

そして光牙は昔を懐かしく感じているようだった。

「蒼空その刀は選ばれた者にしかその能力を発揮しない。普通の者が使えばただの刀であるのじゃ。つまり蒼空は選ばれただから氷を感じた。わしはムリじゃったがな。」

「じゃあ、おれは刀の力が使えるということか・・・」

「俺はこれから魔界へ行く。魔王を封印するか倒すために・・・」

「え!?! お前ひいじいちゃんと一緒にでも負けそうだったんだろ? 無謀だ!!!」

「それでも俺は魔界と人間界の平和のために行く!!!」

「わかった。なら俺も連れて行ってくれ。俺にはあの刀が使えるんだろ? お前の役に立てるようにする。俺がிரない事して魔王が復活したんだから俺は・・・責任をとる!!!」

光牙はびっくりしたような顔をした。そして俺の目を見てからこう言った。

「死ぬかもしれないぞ? それでもいいんなら連れて行ってやる。」

「ハハッ。魔王が人間界に来たらどうせ死ぬだろ? ならお前と協力したほうがいいに決まってるだろ。」

「わかった。じゃあ行く用意しろ。」

「じいちゃん、あの刀借りるぞ。」

「蒼空、本当に行くのか?」

「ああ。もう決めた。」

「じゃあ持っていけ。ちなみにあの刀の名は雪景^{ゆきけい}じゃ。あの刀は使っているうちに使い方が分かってくるはずじゃ。」

〓 10分後〓

「光牙行こう！！魔界と人間界のために！！」

蒼空の目には硬い決意の色が浮かんでいた。

「蒼空最後に1つ言うぞ。死なずに帰って来い。」

「いざ！魔界へ！！」

蒼空と光牙は同時にそう言った。

決意（後書き）

ども。

次回は蒼空と光牙が魔界へ行く話です。
1週間以内に頑張ります。

魔界へ（前書き）

魔界大戦5話です。
頑張って書きました。
ぜひ読んでいってください。

魔界へ

魔界へ入るのには何個かのルートがある。

そう光牙は言った。

だから俺たちはそこに向かっている。

「光牙、入るルートっていうのはどこにあるんだ？もう2日もある
いてるんだけど。」

「もうすぐだ。人間がそう簡単に入れない所や気づかない所、それ
か分からないように魔法をかけてあるところだからちよつと遠いん
だよ。」

「あとどれぐらい？」

「1時間くらいかな？」

「着いたぞ」

「ここか意外と普通だな・・・」

俺は人間のいけない所と聞いてもっとやばいところかと思ってたん
だよね・・・

そこは山の間ぐらいの所で穴が3つ並んでいた。

「じゃあ行くぞ！」

「そこ？真ん中じゃなく？」

光牙が入っていったのは真ん中の1番大きくて人が歩いて入れそうな所ではなく、右の小さな穴だった。
赤ちゃんくらいしかは入れないような。

「だから言っただろ？簡単にいける所じゃないって。」

「けど入れないじゃん。どうするんだよ。硬くて崩せそうにもないし……」

「まず俺みたいに足をいれる。そして”行け”って言うだけ。」

そして、じゃあ俺から行くね。といい消えた。

「き、消えた？まじで？」

そして俺は光牙の言ったようにして”行け”と言った……

「うわぁー落ちるー」

そこは空だった。地面に向けて猛スピードで落ちていった。

「光牙ー助けてー」

地面に落ちる10メートル前、刀から青白い光が出た。
そして数秒後落ちた。だが蒼空は死んでいなかった。
高く詰まれた雪の上に落ちなんとか助かった……

「助かった……刀が光ったけど何だったんだ？もしかして……」

この刀が・・・」

だが俺は助かったと思うには早かった・・・
ライオンみたいなのがライオンではない猛獣が10匹寄ってきた。

「くそ。やばいな・・・けどこんな所で死ぬために来たんじゃない
！」

素晴らしい雪景を抜いた。

そして俺は雪景を振ったそうするとでかいつららみたいなのが5本
飛んでいった。

それが1匹にあたり血を流し倒れた。

「すげえこれが雪景の力・・・」

「ほらもう1回」

またつららが飛ぶ。今度は3匹にあたり死んで行った。

「慣れてきた。今度はこうだっ」

すると1匹の上に雪がたくさん落ちた。動けないのかまったく動か
ない。

でも死んだわけでもないようだ。

すると蒼空は近くまで行き刺した。

刀に血がつく。

「はあはあ。あと5匹。」

「いけ」

そう言って刀を振ると氷のビームが飛ぶ。

1匹にあたり氷付けにされた。

「があああ」

そう言う声が聞こえ後ろを見ると1匹が襲ってきた。

「やばい」

鋭い爪があたる寸前光が飛んできた。

そして猛獣にあたるとそいつが倒れた。

「蒼空大丈夫か？」

「光牙！ありがとう。」

「それは後だ。行くぞ。」

そう言った後10分後2人で残り4匹を倒した。

「あいつら何なんだ？」

「ライオンだよ。人間界のライオンとは少し違うけど・・・」

「ってか。光牙、空から落ちるなら言っといてくれよ。」

「ゴメンゴメン。なんせ封印されていたんだから、忘れてて。まあ封印されてるときは時間は止まってたんだけど、それに前より腕が鈍ってるな・・・」

「そうなんだ・・・それよりこれからどうするんだ？魔王のところ

か？」

「いや。まず王の所へ、つまり城を目指す。」

「OK じゃあ行くか。」

そして彼らは王の城へ向かって歩き出した・・・

魔界へ（後書き）

どうでしたか？

これから読んでくださいね。

王の城（前書き）

どもども、K I N U K A Z Uです。
いままでよりは長いです。
6話です。どうぞ。

王の城

「光牙さあ。いま思った事なんだけど魔界には人間界とは違う生き物が住んでんだよな・・・」

「ああ。魔界には天使族、竜族、とかいろいろな種類の生き物がいる。例えばさっきのライオン、あれは魔獣族、魔獣族はさらに分けることができる。それに猛獣ばかりじゃなくて人型の魔獣族もいる。その人型は王に仕えたりする。トラ族の人型は強くて勇敢だとか言われたりする。」

「へえー。じゃあ光牙は何だ？」

「俺は人型でもない。人間だ。俺の祖先達が魔界にたまたままぎれこんでしまって俺はその子孫。」

「じゃあ何で王に仕えてるんだ？別に王に従わないといけない理由はないだろ？」

「それは・・・僕は5歳の時、親に捨てられさ迷っていた所を拾われ育てられた。王は親みたいなものだから王のために尽くすことにした。」

「そうか・・・そんな事聞いてすまん。」

「いいよ。それよりもうちよつとで着くぞ。」

大きな城が見えてきた。

少し歩くと大きな門の前に着いた。

「あ、あなたは勇者様？勇者様ですか？」
門番が言った。

「ああ。いますぐ王様と会いたい。いまいらっしゃるか？」

「はい。いま幹部達と会議をしています。魔王が魔界に帰ってきて軍を集結させ始めたのです。」

「門を開けてくれ。そのことについて王様に話がある。」

「はい。いま謁見の間にいらっしゃいます。ところで後ろの方は？」

「氷堂蒼空と言います。魔王と勇者が帰ってきたことについて関係があり付いて来ました。私も入ってよろしいか？」

蒼空はこう言った。

「どうぞ。勇者様と一緒に来られたのであやしい人ではなさそうですから。」

「王、勇者神城光牙ただいま戻りました。」

「光牙、よく帰った。さっそくだが魔王が帰ってきた事について報告があるとのことだが？」

「はい。まず私と魔王と一緒に封印されていた事について知っているでしょうか？」

「ああ。その事は氷堂真地という者が教えてくれた。魔界が平和になったのはそなたのおかげだと。」

「あの日、私は王の命令で魔王と戦いに行了きました。旅の途中でその氷堂真地に会い、一緒に魔王と戦いました。（以下省略）・・・

というわけで僕と魔王が復活して魔王は帰ってきたのです。」

「光牙の後ろにいる者のせいで復活したと・・・？」

「はい・・・。」

「ならさっそくこの者を殺せ、勇者。」

王は光牙と呼ばず勇者と言った。

「それはできません。王。この蒼空は何も知らなかったのですし、俺も封印から解いてくれた。魔王と一緒にですが・・・」

「だがこの者のせいで魔界と人間界が危険にさらされたのだぞ。」

「ならこうしてはどうでしょう。蒼空と私で魔王を封印または殺せねば蒼空を殺す。しかし封印、または殺せた場合は生かしておくというのは・・・」

なに勝手に俺を殺す殺さないと言う話をしてるんだ？

「勝てる見込みはあるのか？」

「はい。蒼空は雪景を使えるのもう少し強くなり僕と協力すればあるいは……」

「わかった。光牙がそう言うなら待とう。だが勝てなかった場合は責任を取ってもらうぞ。」

「はい……」

そして失礼しますと言って俺たちは部屋を出た。

そして俺たちは与えられた部屋の中にいた。

「蒼空、明日出発する。時は一刻を争う。魔王の城まで最高1週間を着く。だが魔王が軍を集結させ始めたと言っていただろ？だから自分を封印した俺と雪景を使うものつまりお前を狙ってくる可能性が高い、だから3週間以上かかると思っていた方がいい。」

「分かった。それに頼みがある俺は死にたくないから俺を強くしてくれ。」

「そのつもりだ。旅の途中で鍛えていく。だがあのライオンと戦った時初めてだろ？なのにそうは見えなかった。なぜだ？」

「分かんねえけど考えられるのはじいちゃん家のあの長い階段と理不尽な掃除をさせられたことで体力がついたのと8歳のときマンガで読んで剣にはまってじいちゃんにもらった木刀を持って山で1人でやってたんだよ、そしたら我流の剣術ができてたって感じかな」

「へえ。それでも1人でやるのと猛獣10匹とは全然違うぞ？」

「それは・・・この刀雪景が教えてくれたような気がするんだけど・・・分かんねえ」

「そうか・・・」

これはすごい剣士になるかも知れないそう光牙は思った・・・

「行くぞ、蒼空魔王を倒しに!!」

「ああ。やってやる!!」

そして2人は魔王の城目指し出発した・・・

王の城（後書き）

続き頑張って書きます。

できれば感想もよろしくお願いします。

ダメなところもバンバン言っちゃってください。

魔王の側近ルーク

王の城を出発して早3日が過ぎた。

「うおおおお。」

俺は光牙の胸の辺りに向かって雪景を突く。
それを光牙は剣をぶつけてはね返した。

キィィィン

音が響く……………

そして俺は次に足元を狙う。
それをジャンプしてかわす。
光牙が頭に向かって剣を振り落とした。

「はい、今日は終わり。」

剣は頭の上1cmで止まって光牙は剣を納めた。
俺も同じように雪景を納めた。

「光牙は強えなあ。でもこんな訓練で俺は魔王と戦えるのか？瞬殺
されそうな気がするr……」

喋っている最中なのに突然光牙が蒼空の口を押えた。

「何すん……」

「だまれ。何人か・・・たぶん3人に囲まれた。刀を抜け実戦だ。」

素晴らしい剣を抜いた。

「まじで??」

そう言いながら俺も刀を抜いた。

「蒼空、あの茂みの近くに1人いる。あとお前の裏の木の裏に1人。もう1人は・・・1回殺気を見せすぐに気配を消した。間違いない。そいつが1番強い。そいつがどこにいるか割り出すためおまえは氷を茂みに撃ってくれそしてそいつを相手してくれ。俺はもう1人を相手にする。気配をけして隠れてたのが出てきてもそいつは相手にするなよ。わかったか？」

「ああ。じゃあやるぞ。」

「はあああ!」

素晴らしい雪景を振り落とした氷のでかいのが出るのを見た瞬間茂みに向かって俺は走り出した。

敵は氷をよけると敵は剣を構えた。

俺はそいつに向かって雪景を振り下ろす、

キーン

止められた・・・

だが俺は力を込め、雪景からがった氷を作りそいつの頭の上に叩き込んだ。

血がとぶ・・・

俺は雪景についた血を刀を振ってとった。

光牙は蒼空が茂みに氷を放ったのを見て光の様に素早く移動し敵が隠れていたと思われる木を切った。

「ちっはずしたな。」

敵はギリギリでかわし、光牙に切りかかってきた。

光牙はそれをかわし敵の手を剣の柄でたたき、剣を相手の手から叩き落した。

それから剣を振った。

すると胴体から首が離れた。

「蒼空、お前の上に敵がいるぞ!!」

蒼空は1人敵を倒し敵を光牙の方を見た瞬間を狙われた。

蒼空は雪景を上振ったすると氷の壁ができた。

ガシャアアアン

剣と壁があたり音がした。

後ろから光牙が走ってきて敵に向かって剣を振った。

敵は後ろに避けた。

「なかなかやるようですね。次の雪景の使い手は。じゃあは私は帰

ります。ああ、1つ言っておきますが勇者魔王様は以前より強くなるうとしていらっしゃる、2対1でやられたとはいえこんなことがないようにしないといけないとな。まあせいぜい頑張ってください」

そう言い残すと男は消えた・・・

普通ありえないが消えたとししか表現できない。

「おいあいつのこと知ってるのか？」

「ああ。あいつは魔王の側近の1人ルークだ。かなり強い奴だ。」

「へえそんなに強いのかぁー」

「そんなこといつてる場合じゃないぞ。あいつはかなり強いぞ。今のお前じゃまあ勝てないだろうな」

「まあ強くなればいいんだろ。誰にも負けないくらいに。」

「ははっそのとおりだ。魔王が強くなるって言うなら俺もこれ以上の力を手に入れてやる。」

俺は決意した魔王が強くなる？そんな事知るか俺は自分を、魔界、人間界の人を傷つけようとするやつは俺がこの手でぶっ殺してやる！！

魔王の側近ルーク（後書き）

この話いつもより書くの時間がかかりました。
とくに”ルーク”名前をけっこう考えました。

いくつか候補はあったんですが・・・どれにしようか迷って結局これにしました。

ルークはこれからも出てくる結構重要な立ち位置になってくるはず
です。

村で（前書き）

ぐだぐだな感じ
です。
すみません。

村で

「ふあああ」

俺らはルークとの1戦のあとここにテントをはって1夜を過ごすことにした。

見張りを交代してやることになっていま俺の番………だが………とにかく眠い！！！！！！

Z Z Z Z Z

「蒼空く見張り交代だゆっくり休め……」

「おい何寝てんだよ」

「起きろ蒼空」

光牙は蒼空をゆすった。

「光牙……」

俺は半分目ぼけていたがそう言った。

「おい寝てたら見張りの意味ねえだろ」

「寝ていない。ということで見張り交代よろしく。俺は寝る！」

「永遠におやすみ!!」

「ぐはあっ」

俺は光牙に蹴りを入れられた。

数時間後俺と光牙は何回か見張りを交代しながら朝になった。

「ああー眠いー」

「はあ？お前自分の見張りの時も寝てたくせに。俺の方が寝てねえよ。」

「けどあれじゃん？お前は慣れていても俺はさっきまで一般人だったんだから」

「死ぬのと寝れないのとどっちがいやだ？」

「んゝ両方」

ああそうですか・・・光牙はため息をついた。

「あと5km先に小さな村がある。今日はそこに行くぞ。」

「なんで？村とか行ったらやばいんじゃない？もしさっきのルークとかが来たら村人が・・・」

「大丈夫だ。まだ魔王の領地に入っていないから王が村とかには兵を配備しているはずだ」

「でもルークっていう奴は強いんだろ？兵が少しくらいいても関係ないと思うしあいつも兵をつれてきていたら？」

「それも大丈夫。ルークとか幹部系の強い奴だったらばれずに入れるけど、兵も連れていたら必ずわかるから」

「なんでそんなこと言えるんだ？」

「ああ。それは王の領域と魔王の領地の間に大きい壁があるんだよ。そこに軍が配備されてる。だから兵が来たらばれる。」

「じゃあ壁のこっちにいたら戦争しなくてもいいんじゃない？」

「バカか。魔王はこっちの領地を侵略しようとしてるし、幹部とか強いのがいたら越えられる。」

「そうか・・・でも光牙ってさあ。さっきまでほんの数日前まで封印されてたのになんでそんなに知ってるの？」

「教えてもらった」

「誰に？」

「王に」

「いつ？」

「お前が寝てるとき王に呼ばれて現状を教えてもらった。」

「へえーそうなんだ」

「まあ俺が封印される前とあまりかわってなかったがな」

「そんなことより行くぞ」

蒼空と光牙は歩き出した。

「おい蒼空やばいぞ。もうすぐ雨が降る」

4km歩いた所で光牙は突然言った。

「まじ？」

「ああ。走るぞ」

そう言ったあと光牙はなにかつぶやいたような気がする。
それからすごいスピードで走り出した・・・

「速っ」

蒼空も走った。

「はあはあ。おい光牙速すぎだろついていけるわけねえ」

「すまん。おまえはまだついてこれないんだったな」

「一生むりだよ」

「そうか？」

「そうだよ」

「分かんねえぞ」

「それより宿とおいたからそこに行こう」

ザアアア

雨は蒼空たちが宿に着いたくらいに降ってきた。

「光牙俺達ラッキーだな。ギリギリ濡れずにすんだ」

「そうだな」

「で今日はどうする？雨降ってきたけど」

「うーん」

光牙は少し考えこう言った。

「今日はやめよう」

「へ？」

「だから、や・め・よ・う」

「てことは今日はのんびりするってこと？」

「ああ」

「よっしゃ〜」

そういう蒼空はベットのの上に倒れこんだ。

はあくやつと休める。

本当に意味分かんねえ。

俺今めんどいことに巻き込まれてるよね？なあみんな？
って誰にしゃべってんだろ俺。

ああ〜くそ。なんで勇者と魔王復活するかなあ〜

いままで普通の高校生だったのに・・・

もういいさくつと魔王倒して俺は帰る。

よし寝よう！

「蒼空起きろ」

んっ？光牙か？

今日はもう休むことにしたんだろ？

俺はこれからの分も寝るんだ

と言う訳でもう無視無視。

「蒼空起きろ」

それでも返事しない。

「起きろや」

そういう光牙は何かを落としてきた。

ゴォォン

鈍い音がした。

「痛ったーい」

「なにしやがる」

落ちてきたのは何だろうと思い見るとそれは・・・
何kgあるだろうか分からない鉄球だった。

「こ、光牙くん？」

「なんだ？」

「これ落としたの？」

「ああお前が起きないから」

「おいしいい、もし当たり所が悪かったらやばかったって絶対」

「大丈夫だって」

「何でそう言いきれなの？勇者だよね！？勇者だよね！？勇者がやることじゃないって。いや人がやることじゃないって」

「ああ俺は勇者だ。でもやる」

「これからはやめよ！？」

「そんなことより蒼空」

「そんなこと！！？」

「ちょっと黙れ。いま夜中だぞ」

「うるさくさせたのおまえだろ？」

「だからうるさい。落ちっこ」

「ふう。でなんだ？」

「出発するぞ。」

「なんで？」

「魔王軍が動き出した」

「まじ？」

「さっき連絡があった。もうすぐこの村の皆にしれわたって大騒ぎになる。そうしたら村をでにくくなる」

「そういうことか。ならしょうがない」

蒼空と光牙は荷物をまとめ村を後にした・・・

村で（後書き）

もうすぐお正月なんで、小説をすぐには更新できません。
1月6日までには出します。

エクスカリバー（前書き）

魔界大戦9話です。どうぞ。

エクスカリバー

案の定俺達が村を出た後、絶望のこもった声が聞こえてきた。
軽いパニックが起こっているようだ。

「光牙次どうする？」

「そうだな・・・」

光牙は少し考え込んだ後こう言った。

「とりあえず次ぎの町に行こう」

「それどれくらいの距離ある？」

「30 km先くらいかな」

「そうか・・・」

「じゃあ行きますか。」

「ああ」

「光牙・・・」

「なんだ？」

「あの村行く時かなり速いスピードで走っていったよな・・・？」

「それがどうかしたか？」

「どうやったらできるんだ？」

「それは日々の訓練と剣の能力ちからってとこかな」

「剣の能力？」

「優れた剣はそれぞれ固有の能力がある。お前の雪景だったら氷とかなら？」

「へえーじゃあ光牙の剣の能力は？」

「俺の剣の名前はエクスカリバー。光の能力だ」

「エクスカリバー！？ってあの？」

「俺はエクスカリバーの能力を使っている時は自分の力以上の力を手に入れることができる」

「例えば？」

「お前も見たいように速く走ったりとか。他にもあるけど後で使わないといけない時はくるから楽しみに待ってな」

「お前がエクスカリバーを使っていると聞いて初めてお前を勇者なんだと実感したよ・・・」

「ハハハッ。そんなことよりこれから少し大きな街に行ってそのあと魔王軍との戦いに加わるぞ」

「え？戦いとかいったら危ないし、俺らの目的は魔王を倒すことだろ？ならできるだけ速く行って魔王と戦うべきだろ？」

「そのとおりだがそのまえに王軍が負けてしまったら元も子もないからな」

「そんなに強いのか？」

「どれぐらいの軍を引き連れてくるかによるし魔王軍が来るって事は幹部は絶対1人は来るからまあ強いだろう」

「けどそれは王様も知ってるだろ？勝てる軍勢を送るはずだろ？」

「まあな。けれど長引いたらそれだけたくさんの人が死ぬ。だから速く終わらせるため力を貸したほうがいいしお前の訓練もする。実戦のな」

「分かったよ」

それから2日俺達は歩いた。

すると街が見えてきた。そして俺たちは街に入った。

「人多っ!!」

蒼空たちの目の前には道いっぱいの人がいた。

「光牙、どこ行くんだ？」

「とりあえずお前は魔王軍とかの情報を集めて来い。俺は必要な物を買ってくる。1時間後あそこに見える図書館の前で」

そう言うとき光牙は人ごみの中に消えていった。

「さあ〜てどうすっかな〜」

「まあいっか。とりあえず図書館に向かいながら情報集めていくか」

蒼空も人ごみの中に入っていた。

5分もしたらかなり蒼空はいらいらしていた。

全然進まねえじゃんこれ。しかも息苦しくなってきた・・・

しかし突然人が道の横に行き始めた。

蒼空は訳も分からずほとんど人がいなくなった道の真ん中を見た。

「なんだ？ あれ。軍隊？」

蒼空は人がほとんど横にいつていまって気まづくなったし軍が来たからよけた方が良くないと思ひ自分も横にいつた。

そして横によけた蒼空の前を兵隊たちが通り過ぎていつた。

あれはなんだろうと思ひ隣にいつた17歳か18歳くらいの赤い髪の人

女性に話しかけた。

「すみません。あれは何ですか？」

すると女性はこっちを向いてこう言った。

「あなた知らないの？あれは王軍の軍隊。これから王軍と魔王軍の戦いがあるのよ」

「え？この近くで戦いがあるんですか？」

「ええ。ここを攻めに魔王軍は来るらしいわ。ちなみに今日人がこんなに多いのは避難しようとしてる人や、避難する前に食料を確保する人達なのよ」

「そうですか・・・ありがとうございます」

そう言って俺は道の端を歩いて図書館の方に向かった。

図書館までたどりつくまで有に1時間かった。

魔王とかの情報を集めていたからな・・・早く着いてのんびりしたかったのだが。

そんなことより思ったより図書館はでかった。

聞いたところによると魔界にある図書館でも規模は1位のでかさらしい。

セキュリティもかなり高いとか・・・だから魔王のこととか国家レベルの重要文書があると俺は推測する。

実際、王様とかが預けに来たこともあったとか・・・まあそんなことどうでもいいっか。

「おーい蒼空待たせたな」

お、やっと来たな。そう言うのと光牙はちよつと遅れた悪いと言った。

「でどうだ？首尾は」

「まずまずかな」

そういつて俺は集めた情報を話した。

「そうかこれは急がないといけないな」

俺の話の聞き終わると光牙はそう言った。

「そうだな。急いだほうがいいな。」

「けれどちよつとこの図書館によるぞ」

「なんで？行くんじゃないのか？」

「城を出発する前王にここによれと言われた。王が何か預けたらしい」

「何かって？」

「これからの俺達、いやお前に重要なものらしい」

「俺に重要なものか・・・」

「ああ。だから行くぞ」

そして俺達は図書館に向かった。

エクスカリバー（後書き）

はあく。僕名前考えるセンスないと実感しました。

エクスカリバーしか思いつきませんでした。そんなありきたりの名前さけたかったんですけど・・・。

まあこれからも頑張ります。次の更新は2日か3日後くらいですかね。では。

畏（前書き）

魔界大戦10話です。

買

図書館の中もかなり広がった。受付の人も何人もいたし、ぱっとみでもかなりの量の本があると分かる。

「すみません。これを・・・」

そういつて何か手紙？を受付のひとに渡した。

「はい。少々お待ちを・・・」

受付の女性は言葉を失ったかのように俺には見えたような気がした。その手紙をとり後ろをみた瞬間に・・・

「これはわたしには・・・今から館長の方に連絡するので少々お待ちを・・・」

見間違いではなかったようだ。少し声が震えている。何か恐ろしいものでも見たか・・・

「今から館長室にご案内いたします。付いてきてください」

そう言つてその女性は俺達の前を歩き出した。

館長室までの道のりは長かった。廊下は異様に広く図書館のかなり奥深くまで歩いた。

エレベーターにも乗り何階か上にいった。

そしてようやく着いた。

「この奥が館長室でございます。わたしが案内できるのはここまででございます」

「へ？何で？奥って言われてもよく分かんないし案内して貰わないと」

「館長にそう言われておりますし、あと部屋はあと1つしかないの
で分かりますよ」

「では気おつけてください」

そう言い女性は踵を返し帰っていった。

「気おつけて？」

「まあいい行くぞ蒼空」

そして光牙が足を出して1歩目進んだ瞬間――

矢が飛んできた……

「あ、危ねえ！！」

光牙はぎりぎりでよけた。

「おい大丈夫か？」

「ああ。けど……」

「セキュリティーみたいなのが切られてないな」

光牙が途中まで言ったところで蒼空が引き継いだ。

「帰るか？ 光牙」

「いや。王が大事なものと言ったんだから大事なものなんだろうから危険を冒してでも行くべきだな」

「けどあの受付の人は話を通してるはずだろ、てかお前あの手に手紙みたいなの渡してたよな。あれ何だ？」

「あれは王にここについたら受付の人に渡すように言われていた王からの手紙だったんだが・・・王からもこれを渡せばすぐに通るって話だったんだがな」

「ならなおさら意味わかんねえぞ。俺達が狙われる理由がない。それか王がそうするように命・・・」

そこまで言ったところで俺は途中で話をきられた。

「そんなことはない！！」

光牙は叫んだ。

そうだ王は光牙の親みたいなもの光牙は王を信頼している。
その王が自分たちを危険な目に自らさせると思いたくないのだ。

「まあいい行けば分かるさ」

「そうだな・・・」

「じゃあ行くぞ光牙」

そう言うのと蒼空は雪景を構えた。

それに続き光牙もエクスカリバーを構えた。

そして俺達は前に一歩ずつ進みだした。

まず最初の罨やぶは矢や剣がいろんな所から飛んでくるという物だった。最初の方は多くて五本くらいの矢や剣が飛んでくるだけだったから一つずつ打ち落としていった。

だが進むに連れその本数は増えていって一つずつ対処するのは難しくなっていた。

二人は襲い来る矢や剣に対処しながらこう話していた。

「光牙、これどうする？ここまでではどうにかなったが、本格的にやばえぞ」

「ああ。それでも進むしか・・・」

うっ。という呻き声と共に光牙が腹を押さえた。

その腹には矢が刺さっていた。

「光牙、大丈夫か？」

「大丈夫だ。それより自分の心配しろ、後ろ来るぞ」

うおっ、そう言って後ろを振り返り剣を打ち落とした。

すると突然、矢や剣が飛んでこなくなった。

「何だ？終わった？」

だがまだまだ廊下は続いているし部屋もない。

大丈夫か？——　　そう言い俺は光牙に近づいていった。

「大丈夫だ」

そう言い光牙は、ははっと俺に笑いかけた。

「光牙、その矢抜かなくていいのか？」

「抜いたら出血が酷くなるから・・・な・・・」

「けどお前、顔色悪くなってんぞ。休んでるか？今攻撃は止んでるからここは大丈夫だと思うぞ」

「いや。いい進むぞ」

「けど・・・」

そこまで言ったところで遮られた。

「大丈夫だって」

「でも・・・よし!!」

「何がよし!!なんだ？」

「もしかしたら失敗するかもだけど・・・今からこの矢、抜くぞ！」

「だめだって、言ったら？ 抜くと出血が酷くなるって」

「ああ聞いた。けど考えがある」

「考え？」

「ああ」

すると光牙は俺の目を見てこう言った。

「分かった。信じてみようかな。で、どうするんだ？」

「抜いた後、氷で一旦止血する」

「OK」

「じゃあ光牙、悪いけど自分で抜いてくんねえ？」

「いいけど、何で？」

「集中しないとできそうにないから」

「分かった」

そう言うと光牙は矢に手をおいた。

それを見て俺も雪景を構え集中した。

すると蒼空の周りに冷気が漂い始めた。

「準備はいいか？ 蒼空」

俺は少し頷くと光牙は矢を引き抜いた。

うっ、という呻き声が聞こえたが気にせず光牙の傷を狙って氷を出した。

その氷は狙い通りあたりピキピキという音と共に光牙の傷を覆った。

「ふう。よかった成功して」

「すげえ。ありがとう蒼空」

「どういたしまして」

「けど、どうしてそんな事思いついたんだ？」

「マンガで読んでな。できるか分かんなかったけどやる価値はある
と思ったんだ」

「マンガ？ マンガって何だ？」

「人間界の物なんだけど・・・説明しにくいな・・・よしじゃ全部
終わったら一緒に人間界に行こう。そしたら見せてあげるよ」

「それは楽しみだな」

「じゃあ行きますか」

そう言い二人は剣を構え前を見据えた。

罨（後書き）

次の更新は1週間以内に頑張って出します。
応援よろしくお願いします。

雪景（前書き）

すみません。更新遅れました。

試験週間だったんですよ。

今日、テストがありました。明日もテストです。

現実逃避・・・

では魔界大戦11話です。

雪景

俺たちは剣を構え前を見る。

この先は何があるか分からない・・・

何がどうくるか分かれば対処のしようもあるのだが・・・

そして一歩ずつ歩き出した。

しかし何も起こらない。

「おい光牙何も起こんねえぞ」

「ああ。気になるな。何も起こらないのが一番いいが、そんな事もないだ・・・」

そこまで言ったところで、うっと呻いた。

「どうした光牙痛むのか？」

光牙は傷を負ったところを押さえていた。

「少しな・・・気にするな」

「でも、じゃあちよつと休もうか」

「ありがとう」

そう言うのと光牙は座った。

それに続いて俺も座った。

そして十分も経ったところだっただろうか、光牙は

「よし、蒼空行こうか」

そう言って立ち上がった。

「分かった。けど大丈夫か？」

そして俺も立ち上がった。

ガゴッ

「ガゴッ？って何？」

蒼空は音のした方を見る。

そこは自分が手を壁に付いた所から音はしていた。

そこの壁は凹んでいる。

ゴゴゴゴゴ・・・

「ゴゴゴって何？」

蒼空の顔は真っ青だった。

「ねえー光牙くーん。これどう思う？こういう場合マンガとかでは・
・・・」

「どう思ってたって・・・？はははっ。逃げろーーーー」

後ろから大量の水が流れてきた。

「だよねえ☆」

二人は全力で走った。

「蒼空やばいぞ。このままじゃあ追いつかれるぞ」

「やばいな。水は液体だから斬れな……。い……。液体？ そうだ！」

そして蒼空は突然立ち止まった。

「おい！ 蒼空。止まるな！ 走れ！」

蒼空はくるっと回って、水が来る方向を見て雪景を構えた。

「蒼空。何をする気だ!？」

「光牙ちよつとさがってる。いい事思いついた。てかこうしないと水に巻き込まれる」

「どうする気だ？ もうそこまで来てるぞ」

「大丈夫だって」

水はもう目の前まで来ている。
だが蒼空はふっ、っと笑い雪景を思いっきり振り下ろした。

「行っけええええ」

雪景から飛び出した氷のビームみたいなものは水とぶつかりそのあとピキピキと言う音と共に水を凍らした。

「おお。蒼空考えたな」

「まあな。けど何でもっと速く思いつかなかったんだろ？」

「さあ？」

光牙は少し首を傾げた。

そしてその後こう言った。

「そんなことより罨が少しの間なかったのはこのせいだろうな。けどこれからはまたあるぞ」

「じゃあ行くか」

二人は肩をならべ、走り出した。

次の罨は――――

「うわああああ」

蒼空の悲鳴が響いた・・・

蒼空は落とし穴に落ちた。

「やばいってこれ洒落になんねえ」

蒼空は必死に考えた。

こんなばかでかい落とし穴を誰がどうやって掘ったのか……

って違うか☆

そんな事やってる場合じゃねええええ。

と一人でやってる内になんろ落ちていた。

ふう。とため息をついて蒼空は雪景を構えた。

ここで今から蒼空がやろうとしていることを少し説明しよう。

まず下に大きい氷の塊を作る。

次にそれを踏んで飛び上がる。

また氷の塊を作ったの繰り返しをして上まで行こうというのだ。

だがこんな事できるのかという疑問が湧き上がったが考えてる内に下に落ちていつている。

もう上までかなりの距離があった。

だから蒼空は決意した。

そしてすぐに決行する。

氷の塊を作ることに成功。

踏んで飛び上がる事にも成功。

それを繰り返し続けた。

「もう少し」

蒼空は呟く。

そしてもう少しで手が届くという距離まで来た時……

足を踏み外し、落ちた。

「くそっ。くそおおお」

蒼空は思った。翼があったらと……そしたらこんなところ一っ飛びだったのに……

蒼空は雪景を硬く握り、目をつぶった。

すると雪景が青白い光を放つ。

刀が光に包まれた。

『主よ……』

頭に直接たたきつけられるような声が降ってきた。

『主よ。イメージするのだ。欲しい力を……』

欲しい力……翼が欲しいなあ。

蒼空がそう思った瞬間——

背中に冷気を感じた。それにもう落ちてはいなかった。

背中に翼があった。氷の翼が——

しかも前からあったかのような、それぐらい違和感がなかった。

そして飛んだ。

上まで行き穴をだうやってか渡った光牙の隣に降り立つ。

光牙は啞然としていた。

「蒼空。それどうやったんだ？少なくとも真地はできなかった」

『前の主は他の方法で飛ぶことができた』

また頭に直接たたきつけるような声。

『我は雪景。主の刀だ』

「雪景？」

そして雪景を見る。

雪景は光ったままだ。

『そうだ。ひさしぶりだな勇者』

光牙は黙ってこっちを見ている。

「光牙は知ってるのか？まあいっか。じゃあお前が力を借してくれて翼をくれたのか」

『そうだ。だが我は主の力だ。だからこれは主の力だ。我をどう使うかは主の自由だ』

「ありがとう。助けられた」

『だからこれは主の力だと言ったであらう?』

「けど・・・まあいい。じゃあ俺はどうやってお前の力を使う?」

『今やったとおりだ』

「けどよく分かんねえぞ」

『いずれ分かる。いやすぐにな』

「はあ。けどこれからも頼むぞ」

『主の仰せのままに』

そして雪景の光が消えた。

翼も消えた。

「光牙。今聞いたとおりだ。俺は雪景の力を借りて飛んできたってとこだな」

「そうか。真地も雪景の力は借りていろんなことしてたな。雪景とは何回かしやべったことがある」

「へえー。まあ進むか。あと何個罠あるんだ?あの落とし穴は反則だろよけられないぞ」

「蒼空もう罠はないようだぞ」

「何で？」

「あれを見ろ。扉だ――」

雪景（後書き）

蒼空に翼つけたくてやってしまいましたw
w
空中戦とかやりたくて。まあやるか分かりませんが。
話は変わりますが明日もテスト頑張ります。

明日で終わるので次の更新は早くできそうです。
では。

本（前書き）

魔界大戦12話です。

本

「あれを見ろ。扉だ————」

二人の視線はその扉に注がれていた。

そして扉に向かって歩き出した。

扉の前に来た蒼空と光牙は互いに顔を見合わせた。

「おい光牙。この扉だよな？」

「たぶん……あの受付の女はあと一つしか扉はないと言っていたからな」

「じゃあここが目的地って訳だ」

「そうだな。行くぞ」

そう言って光牙は扉の取っ手に手をかけた。

ガチャ

という音と共に扉が徐々に開いていった。

部屋の中には60歳くらいのおじさんが座っていただけだった。他に目につく物は机とその上に置かれている書類の山、本棚くらいの物だった。

「よく来たね。氷堂蒼空くん？」

なぜかその人は俺の名前を知っていた。

「なぜ俺の名前を知っている？」

「君は雪景の新たな使い手だからね」

「説明になっていない」

「いやこれで充分な説明をしたと思うんだけど」

蒼空が分からないという顔をしていたらその人は、にこっと笑いかけこう言った。

「その前に自己紹介しておこう。僕の名前はミラー・ルード。よろしく。よし、じゃあ説明してあげよう。君は史上二人目の雪景の使い手だからだ」

「この刀がなんで関係してくる？」

「その刀は名刀中の名刀だ。その刀に並ぶ刀なんて片手で数えるくらいしか存在しない。具体的に言う五本だけ。そのくらいの名刀は選ばれた者しか使えない。魔王を倒すために必要不可欠な力だ。それを使う者を知らないなんて事はない」

「魔王を倒すために必要不可欠？」

「そうだよ。そのくらいの刀じゃないと魔王には届かない。生半可

な刀じゃ届く前に砕け散る。それに魔王を封印するのはどうすればいいか知ってる？」

「知らない」

「それはね……」

「それは……」

そこで光牙が話に入ってきたそしてそのまま続ける。

「そういう術がある。そのために十分は足止めしないといけない。それでも誰か他に人がいたら封印できるがその人も一緒に封印される。そいつが離れる間は剣の能力で止めるんだ」

「そう。そしてそれができる剣はさっき言ったように五本だけその内三本は王の方にあり残りの二本は魔王の方にある。だから実質三本いや二本だけ、一本は王の剣だからね。ということは……」

「俺の立場は重要だっていうことか……」

「そんなことより今重要なのは、二つだ。一つ目はなぜ俺達が行くことは分かっているはずなのにセキュリティーが切られていないのか。二つ目は王はなぜここにくるように言ったのかだ。さあ説明してもらおうか」

光牙はそう言ったあと軽く睨んだ。

「まあまあそんな熱くならないで、勇者、神城光牙くん？」

「速く説明しろ」

命令口調で光牙は言った。

「セキュリティを切っていないかったのは本当に君が雪景を使えるのかを見極めたかっただけです」

そして蒼空は見た後こう続けた。

「もちろん合格だった。けど確かめないといけなかったんだよ。けどあれはセキュリティの一部だけだったよ。確かめるだけだったし。そして二つ目の質問だけどそれは僕が今預かっている、前雪景の使い手の本を渡すために王は君たちを呼んだんだ」

「本・・・だど？」

光牙はちよつとびっくりしたような顔になった。

「そう。この本だ」

そして、ミラーは古い本をこっちに見せた。

「蒼空くん。これを返そう」

ミラーは蒼空に渡した。

そして蒼空は受け取った本をまじまじと見つめた。

「その本は真地くんが人間界に帰る前に王に託した本だ。そして中身は雪景の使い手しか見れないように呪文がかけてある」

「王に託した本なのになんであなたが持っているんですか？」

蒼空は素直に疑問を言った。

「ここはセキュリティーがかなり高いから僕のところにはいろんな禁書が預けられるんだよ。特にその本を狙う輩が魔王がいなくなつてからもいたんだよ。魔王の側近だった奴とか。魔王を復活させるやり方とか書いてあると思ったのかな？」

「じゃあこれが王が俺達がここに行くように言った理由か？」

「そうだよ。光牙くん」

「そうか。ここは礼を言っておく。ありがとう。じゃあ帰るか蒼空」

「おう帰るか」

そして俺達は部屋を出ようとした。

「ちょっと待って！」

呼び止められた・・・

「なんですか？」

蒼空が聞くとミラーは、

「光牙くんは怪我をしているんだったね。治してあげよう」

そしてミラーは立ってこっちに来た。

光牙の前で止まって怪我のところに手を当て何かつぶやいた。
すると怪我がなかったようにきれいに傷がふさがっていた。

光牙は驚いたような顔一つせず、ありがとうと言った。
そして俺達は部屋を後にした。

俺達は図書館を出た。

「蒼空、真地の残した本には何を書いてある？」

「うーんと」

そう言って蒼空は本を見た。
そしてこう言った。

「すごいぞ！雪景の使い方が記されてる。ひいじいちゃんはこんな
技使ってたのか」

「使い方の本か・・・蒼空、今からその本を読みながら進めるか？」

「余裕だね」

「よし。じゃあ魔王軍との戦いに加わりに行くからな。明日には着
く。それまでにできるだけ読んでおけ」

「分かった」

そう言って蒼空は少し顔を暗くした。

そして考える。

人を殺すのは嫌だなあと。

だが蒼空はこう言った。

「行こうか。光牙」

「行くか」

俺達は街を出た。

そして王軍VS魔王軍の戦争が起こる場所を目指し歩き出した。

蒼空は決意した。

人を殺すのは嫌だ。それは光牙も一緒のはずだ。

光牙はそれでも進む。それはなぜか自分が魔王を倒さないと死ぬ人
が増えるからだ。

なら自分もやらないと死ぬ人が増える。殺すのは嫌だ。だがこれか
ら魔王に殺される人、苦しめられる人を失くすため戦おうと――

そして蒼空と光牙は戦争の場に着いた――

本（後書き）

12話書き終わりました。

読んで下さっているみなさまには感謝、感謝です。

13話はいっつ出せるか分かりません。

戦争（前書き）

魔界対戦13話です。どうぞ。

戦争

戦場についた蒼空達はまず味方の王の陣地に行った。

「グラン元帥！」

光牙は王軍の指揮を執っている元帥を見つけ呼びかけた。

「あんたは勇者か？」

答えたのはグラン・エルガー。王軍の元帥だ。ちなみにトラの人型だ。

「はい。俺達もこの戦いに参加させてください」

「戦力が増えるのは大歓迎だが、とくに強い君のような人は……だが君たちは魔王を倒すという任務があつたはずでは？」

「はい。ですが倒すためにまずこの蒼空を戦闘に慣らせるために必要な事なのです」

「ならいいでしょう。頼みます」

「で俺達は何をしたらいいでしょう」

「開戦までゆっくりしていてくれ、始まったら普通に攻めていって、敵将の首を取ってきてくれ。それだけだ」

テキトーだなと蒼空は言いそうだったから慌ててこう言った。

「敵将は誰ですか？」

「監視所から送られてきた情報によるとルークだそうだが・・・」

「あいつか・・・」

「知っているのか？」

「はい。一度出会いました」

「気おつけろよ。あいつは強いぞ」

そこまでグランが言ったところで伝令役の人が来てこう言った。

「元帥。敵が行動を開始しました」

「そうか・・・」

そしてグランは大きく息を吸い、こう言った。

「全軍に伝えろ。出陣すぞと」

「はい！」

伝令役の人は急いで伝えに行った。

「もう出陣だ。休む暇もなかったな。頼むぞ勇者」

そして大きく息を吸いこう言った。

「全軍！！進め！」

グランも馬に乗り走り出した。

「俺たちも行くぞ！蒼空！」

「OK。光牙」

二人も後を追って走り出した。

王軍と魔王軍はもうすぐぶつかりそうだ。

「光牙。俺たちはどうする？」

「戦闘をしながら魔王軍の敵将のルークの所まで行って倒す！これだけ」

「はは。単純でいいな。それ」

「そうだな」

そうこうしている内に戦闘は始まっていた。

ガアアアアン

かなりでかい音がして多くの人が宙を舞った。

「おい光牙。あれ王軍じゃないよな？」

蒼空は宙を舞っている人達を指差して言った。

「あれは魔王軍だ。黒い戦闘服だろ？ しかもあれをやったのはたぶんグランだ」

「え？ あの人？ てか強すぎない？」

「あんまり変わってないようだな。さすが」

「そんな強いのか？ あの人」

「ああ。伊達に元帥を名乗ってない。普通に戦ったら俺も負けてしまうな」

「じゃああの人魔王を倒しに行った方がいいんじゃない？」

「お前あの館長の話聞いてた？」

「えーっと・・・」

「はあ。まあいい。魔王を倒すには五本の名刀の内どれか持っていないと魔王には攻撃があたらない」

「けど封印はできるんじゃない？」

「ばか。その間の時間を誰が稼ぐ？ 時間を稼ぐには魔王に攻撃があたらないと意味ない。ってか封印するだけならあいつじゃなくてもいいだろ」

「そっか」

「そうだ。それにエクスカリバーの能力を使わずあいつも能力使わず戦った時だけだ。負けるのは」

「そうだ。後気になるのは五本の名刀って誰が持ってるの？」

「まず俺、お前、それに王、魔王。あと一本は主がいないかそんなところだ」

「へえー」

「おいもうすぐ着くぞ。覚悟はいいか？」

「大丈夫だ」

「行くぞ」

そして二人は戦闘に加わった。

「あまり離れるなよ。蒼空」

「分かった」

光牙は剣を構え相手に向けた。

その後蒼空には光牙が一瞬ぶれ消えたように見えた。すると相手が数人、ぐわあとか叫んで倒れた。

「蒼空。後ろだ」

後ろから敵が斬りかかってきた。

「気づいてますよ光牙」

そしてははっと笑った。

敵の剣が蒼空にあたったと思った瞬間――

剣を弾いた。そしてくるっと回ってそいつを斬った。

「おお。やるな。蒼空」

「これ、あの本に書いてあった技の一つで、試してみたからわざとそいつに背を向けたんだよ」

「へえー」

「これは鎧の一種らしい。それに普通の氷より硬いらしいから防御にできるらしい」

「それは便利だ、な」

そう言いながら光牙は敵を斬った。

蒼空の所にも敵が十人くらいが蒼空を取り囲むようにして襲いかかってきた。

それを蒼空も片づけた。

「蒼空、強くなってるじゃん」

「ははっ。まあ使い方とかも分かってきたからな」

「よし。蒼空突き進むぞ！」

「OK」

そして二人が走り出した。

敵を倒しながら前に進んだ。

だが少し進んだ所で強い風が横を通った。

すると次の瞬間・・・近くにあった王軍の兵士がぐはぁっと叫んで宙を舞いそして落ちた。

「あなたが勇者と雪景の使い手ね？魔王様の命令で首を取りに来た！」

蒼空達の目の前には黒髪の小刀みたいなのを構えた女がいた。

戦争（後書き）

やばいです・・・

テストの点数が思ったより悪くてお母さんに怒られました。

そしてテスト前も小説書いてるから・・・（以下省略）
と言われました。

そして禁止・・・と・・・

ですがやります！お母さんのいない時に・・・

けどいつもより遅れるかもしれません。

すみません・・・

疾風（前書き）

K I N U K A Z U です。

がんばって書きました。

ちよつと勉強ががんばってやってたんでお母さんから小説書いていても何も言われなくなりました。よかった。なのでこれからもがんばっていきます。

疾風

俺達を首を取りに来たと言った女は小刀を構えこっちを睨んでいる。

その顔を蒼空はどこかで見たような気がしていた。

「お、お前は・・・」

その女は少し驚いた顔をしていた。

「お前は誰だ!？」

今度は光牙が言った。

「・・・・・・・・」

女は黙ったままだ。

「無視か・・・」

光牙はそう言って少し溜息をついた。

「おい。光牙、お前も誰か知らないのか？」

「ああ。初めて見る顔だ」

「それはそうだろうな」

そこで女は口を開いた。

「私はお前と魔王様が封印されている間に生まれたのだから」

「そりゃ知らねえわな」

「それであの時のお前が雪景の使い手だな？」

今度は蒼空の方を見て言った。

「あの時？お前一回俺と会ってる？」

「ふふふ。会ったこと？あるよ。この姿でなら・・・」

そして一瞬でその女の姿が変わった。

変わった後の姿は蒼空が会った事のある人の姿だ・・・

さっき行った街で蒼空が王軍の軍隊の事を聞いた赤い髪の女だった。

「ふふっ。思い出した？」

「ああ。けどあの時のお前は何をしてたんだ？」

「うーん。まあいつか隠すようなことじゃないし、どうせこいつら死ぬんだから・・・えっとね。あの時は王の軍勢がどれくらい来るとかを調べてたんだよ」

「つまりスパイってどこか・・・」

「そう。私、変装とか得意だし、もう一つ理由はあるけど・・・まあスパイとかそういうのやらされてるってわけ」

「じゃあ生かして帰すわけにはいかないな」

そこで光牙が口を挟んできた。

「殺すって・・・まあそっか。スパイとかやってたんなら機密情報とか知られてるかも知れないし」

「私もあなた達を殺すように言われてるし・・・」

そう言って女はこっちに攻撃を仕掛けてきた。

けれど普通に前から斬りかかってきたただだったから蒼空は簡単に防いだ。

「いきなりかよ・・・」

「へえーなかなかじゃない。じゃあこれはどう？」

女は後ろに大きくジャンプして距離を取りながらこう言った。

「火遁」

すると大きな火の玉が女の前にできてそれを放ってきた。

「ふん。そんなぐらいの火なら・・・」

そう言って蒼空は雪景を振った。

すると刀から図書館の罨の大量の水を凍らした時と同じ氷のビームが飛び出した。

そして火の玉とぶつかり凍らした。

「え？火まで凍らすって・・・」

「これだけで終わりじゃねえぞ」

そう言って蒼空は手を突き出して拳を作った。

すると凍った火の玉が割れた。

そして蒼空が手を開き女の方に手を振った。

すると割れた氷のかけらが女の方に飛んで行った。

だが女はにやっと笑った。

そして氷のかけらは女にあたる一メートルくらい手前で吹き飛んだ・
・

「何をした？」

と蒼空が問いかけると、

「この小刀、何か解る？答えは五本の名刀の内の一本の疾風さ」

「五本の名刀の疾風？光牙、何の刀だ？」

「疾風は風の刀だ・・・言ったら？名刀を持っているのは俺、お前、王、魔王あと一人は主がいなかった」

「ああ。言ってたな。ってことはあいつがお前のいない間に主になったって事か」

「分かった？そういう事よ」

そして女は薄く笑みを浮かべた。

疾風（後書き）

誤字脱字等ありましたら言ってください。
他にもこうしたほうがいいなど・・・
感想もできたらお願いします。

V S 疾風（前書き）

魔界大戦15話です。

VS 疾風

「ここまで教えてあげたんだから余計に殺すしかなかったわね」

そしてふふふと笑った。

「じゃあ行くよ？」

そして女から殺気があふれ姿が消えた。

その後すぐに蒼空の後ろに現れ、斬りかかった。

だが蒼空は反応し、女の刀があたるであろうその場所を氷を張って守った。

そして光牙が女に斬りかかろうとした時にはすでに女はいなかった。

「分かった？ あなた達は反応して守るのが精一杯。それじゃあ勝てないわ」

「それはどうかな・・・？」

そう光牙が言った瞬間、光牙は女の所に行き斬りかかっていた。

「俺の剣は光だ。速さで風に負ける訳がないだろう？」

だがそう言った光牙は宙を見上げていた。

「そうね。速さじゃ負けるわね。だけど・・・」

光牙の見ていた方に女は姿を現した。

女は宙に浮いていた。

「え？何で？今光牙が斬ったはずじゃ？」

「あれは変わり身の術。まあ勇者さんは気づいていたみたいだけど・・・」

そして女はパチンと指を鳴らした。

すると女の姿をした物が現れた。

それはただの木だった。

「あれは木に私の格好をさせたって訳。私変装得意だから、木とかも一瞬でそっくりにできるのよ」

「変わり身の術とか・・・忍者かよ・・・」

「そうよ。私は人間。先祖が魔界に来て、魔界に住むようになったんだよ。その勇者さんと同じパターンだね。そして先祖は忍者をやってたの。それを引き継いでるって訳」

「じゃあ何で魔王の手下なんてやってるの？」

そこで女の顔が険しくなった。

だがそこで光牙がこう言った。

「五本の名刀の一つ疾風に選ばれ使えるってんなら誘われて当然だろ？」

「そうだよな・・・なあお前魔王裏切って俺達の仲間になんねえ？」

「はぁ？ お前に何が分かる！」

なぜか女は怒っていた。

「そうか・・・じゃあお前を倒さなきゃいけないって事だ」

そして雪景を構えた。

「光牙。行くぞ」

「ああ」

蒼空は自分の背にあの時の氷の翼が生やした。

そして飛び女の方へ行き斬りかかった。

だが女は消え後ろに行き逆に斬りかかれた。

そして蒼空の背中に直撃する。

だが氷の鎧を先に作っていたから弾いた。

「これで終わりだ・・・」

そう蒼空が呟いた。

すると女の刀が凍りつき、女の手も徐々に凍りつき始めた。

そして蒼空は振り向き斬りかかった。

血が飛んだ。

女は後ろ向きに落ちて行った。

そして女は地面にぶつかった。

「ちっ。一旦退かないと・・・」

女は煙幕を張った。

煙が消えた頃にはそこにはもう姿はなかった。

蒼空も光牙の所に降り立った。

そして、氷の翼を消した。

「光牙」

「何だ？」

「あいつを探さないと・・・まだ近くにいますはずだ」

「分かっている。だけど蒼空お前の攻撃なら風の小刀を持っている
あいつなら避けられたはずなのに攻撃をあてる事ができたんだ？」

「それは相手が油断して攻撃してくれたおかげで能力を一瞬使えなくする氷があたったから」

「ああ、あの時の・・・それもあの本に載っていたのか？」

「ああ。光牙のには一瞬能力を使えなくするのなの？」

「あるけどお前のとは違うからよく分からなかった」

「へえー。よし探すぞ」

「おう。たぶん行くとしたら魔王軍の本部だろうからそこに行くぞ」

そして蒼空は雪景の能力を引出し氷の翼を生やした。

「行こうか」

「ちょっと待て俺も能力を使わないと追いつけないな・・・」

そう言うのと光牙から強い光が放たれた。

次、光牙を見た時には天使のような、白くきれいな薄い光を放つ翼が生えていた。

「行くぞ」

「OK」

そして二人は飛んだ。

だが光牙は光速、いや神速と例えるのがいいか・・・
まあとりあえず消えた。

「おい光牙早すぎんだろ・・・」

次の瞬間蒼空の目の前に光牙は現れていた。

「やっぱ無理か」

「そういやお前の剣の能力、光だったな。ついていけるわけねえ」

「じゃあ先に行って探してくる。お前は途中探しながら来てくれ」

「分かった」

そう言った光牙はすごい速さで飛んで行った。
当然俺はついていけず、だが後を追って飛んだ・・・

V S 疾風（後書き）

僕、キャラクター設定書くの忘れてました。

他の作家さんの見ていたら書いている人いっぱいいるのに・・・

書いた方がいいですかね・・・？

そこを質問したいです。感想の制限はなくなったのでみなさん教えてください。キャラクター設定いりますかね？

勝利（前書き）

魔界大戦16話です。

勝利

「うーん。やっぱいねえな。もう能力は使えるようになってるからなあ。もう遠くに行ったかな？」

蒼空は飛びながらそんな事を言っていた。

「けど怪我してるはずだからあんま遠くに行っていないと思うんだが・
・」

そう言っつて蒼空は地面の方を見た。

「!!!!!!」

あるものが蒼空の目に入った。
それは蒼空のちょうど下にあった。

?
?
?
?

時と場所は移り光牙はもう魔王軍の上空に来ていた。

「うーんいねえな」

光牙は上空からざっと見渡してそう言った。

「まあ俺の方が早かったただけかも知れないしこんなんじゃないつか俺が見つかりそうだ・・・降りるか」

そう言っただけで光牙は急降下して降り立った。

敵が何人かこっちを見たがその数秒後には彼等の目の前から消えていたから誰も気にも留めなかった。

「じゃあ探すか・・・」

そう言っただけで魔王軍の司令部の方に向かった。

? ? ?

蒼空が見つけたのは血だった。

蒼空は地面に降り、血をみた。

「これが地面についてからあんまり時間経ってなさそうだな・・・」

そう言っただけでじっくり考えた。

これってあの女の血か・・・?

けど時間があんまり経っていないからってそう決めつけるのはな・・・

・
このあたりで戦闘があっただけかも知れないし・・・
手がかりもないし、しゃあない。これを追ってみるか・・・!

そして一人うんと頷き、血の跡が向かっている方向に歩き出した。

そしてずっと歩いて行った。

するとはあはあという荒い息ずかいが聞こえてきた。

蒼空はパツと臨戦態勢に入った。

そして状況確認のため声のした方を草陰から見てみた。

「くそ・・・やられた。油断しすぎたかも・・・」

そこには蒼空と光牙と戦ったあの女の姿があった。

蒼空が女の傷があった所をみるともう血は出ていなかった。
おそらく止血をしていたんだろう。

「ふう。止血も終わったし血の跡の始末に行かないと・・・手がかりを残すと見つかってしまう・・・」

「もう遅かったな」

蒼空は草陰から出て雪景を構えこう言った。

「ちっ。見つかった・・・」

そう言い女も刀、疾風を構えた。

「降参しろ。お前は一回負けたし怪我をしているから勝ち目はないぞ」

「はっ。あの時は勇者を警戒していてお前は取るに足らないやつだ

と思って油断しただけだ。お前は今一人だ。おおよそ二手にでも分かれて私を探していたのだろうか？怪我をしても勝つ自信はあるぞ？」

「・・・・・・はあ」

「ははっ。凶星だったのだろうか？分かっているのだろうか？一人では勝てないって・・・・」

「いいから降参しろって・・・・そうじゃないとお前を殺さないという自信はない」

「強がるな・・・・よ」

そう言い女は攻撃してきた。

もちろん風を纏っているので蒼空は躲せない。

だが蒼空は氷でガードしているので当たらない。

「はあ。あん時は光牙がいたから使えなかったんだよなあ。けど今は違う・・・・行くぞ！」

蒼空は女から少し距離を置いた。

「はあああああ」

その瞬間、女の上に先の尖った氷の塊が出来た。

「えっ!？」

女はそっちを見た。

だが氷があたる瞬間、女は後ろに一瞬で移動していた。

「どうやったの？刀から氷を出せるのは知ってるけど何もないところから氷を生み出すなんて・・・」

「・・・・・・・・」

それに蒼空は黙ったままで刀を構え女に突っ込んでいった。

「そんな普通の攻撃じゃあ当たらないわよ」

それに蒼空は軽く笑う。

今、蒼空が攻撃を仕掛けているのはフェイクだ。

本当の狙いは――――

「!!!!」

女はびっくりしていた。

上にさっきの氷の尖ったのが上にさっきより多い二十本くらい落ちてきているのだ。

「でもそのくらいでは・・・」

女は能力を使おうとした。

そして後ろに飛ぼうとしたのをためらった。

なぜなら自分の後ろの地面から自分の方に向かって氷の棘が伸びてきているのだ。

それは横も同様だ。

前からは蒼空が来ている。

どうしようか・・・

後ろの氷の棘を壊して後ろに行くか。

だがそれには少しでも遅れてはやられる。

そして女はすぐに考えをまとめた。

まず女は上の氷を風で吹き飛ばした。

だが蒼空は目の前に来ているので攻撃を迎え撃つ事にした。

「後ろに気負つけて」

そう蒼空は余裕な様子で言った。

すると女の後ろの氷が伸びてきて女の腹に刺さった。

女は痛みで顔を歪めちらっと後ろを見た。

「いいのか？ 敵が攻撃してきているのに目をそらして・・・」

そして蒼空は雪景を突き出した。

女はとっさに刀で蒼空の攻撃を受け止めた。

それに蒼空はふふっと笑った。

「終わりだ・・・」

そう言い蒼空は女の上に先の尖った氷の塊を作る。
そしてその塊はすぐに女の右の肩に深く刺さった。

女はうっと小さく呻き倒れそうになった。

すると地面から伸びた自分に刺さっている氷の棘が壊れ女は地面に倒れた。

そして女は意識を失った。

それを蒼空は無言で悲しげな眼で見つめた・・・

勝利（後書き）

今回の話はほとんど蒼空視点だったと思います。今までもそうですが・・・

今度の話も蒼空視点です。

蒼空視点が終わったら光牙視点に入ります。

おそらく・・・

ではまた。感想待ってます。

理由（前書き）

K I N U K A Z Uです。

蒼空強すぎですかねえ。

まあ今回は女の名前とかそういういたものがあきらかになります。
では。

理由

暗い————

ここはどこだ？

そうか私は負けた。

あれだけ出血したんだから死んだのだろう。

じゃあ目を開けたらそこは天国？

いや私は魔王のいいなりだったのだから地獄か——

私は生きて妹を助けないといけないのに、死んでしまった。

？
？
？
？

私は目を開けた——

そして起き上がろうとした。

だが激痛がして起き上がれなかった。

それでも我慢して体だけ起こし周りを見渡した。

そこは地獄ではなく、あの蒼空と呼ばれていた少年と戦っていたところだった。

それに怪我をしていたはずの所からも血はでていない。

「あれ？私、生きているの・・・？」

「ああ」

横から声がした。

そこには私と戦っていた少年が石に腰かけている。

私はとっさに刀を取ろうとしたがどこにもない・・・

「私の刀、疾風はどうした・・・？」

「あれは預かっている。敵の武器を取らない訳ないだろう？」

「それはそうだが・・・じゃあなぜ殺さなかった？」

「俺は人を殺すのは嫌だから・・・」

「敵でも？」

「悪い奴は・・・しょうがない時もあるけど、てかお前も見殺しにしようとしたけど悪い奴な感じがしなかったから・・・それにうなされて魔王のいいなりだったとか、妹を・・・とか言ってたから事情があつたんじゃないかと思つてな」

「それを言うんでも？」

「いや。言わせる。お前は敵だ。今のところはな。だから拷問もできる。それにお前を殺すか生かすか俺の気分次第だ」

「何で？ 疾風はそちらでもちょっとした能力なら持つていなくても使えるのは知っているだろう？」

「それは知っている。けどお前の止血をしたのは氷だ。俺が氷を解いたら出血をして死ぬぞ？」

「…………分かった。今死ぬわけには……。何から話せばいい？」

「とりあえず名前を聞こうか？」

「…………望月忍（むつき しのぶ）」

「望月忍か……。いかにも忍者って感じだな」

「……………」

「じゃあ俺も名乗っておく、氷堂蒼空だ」

「そんなことより要件は？」

そして望月忍は睨んできた。

「じゃあ望月、なんで魔王の手下にいるのか教えてもらおうか」

「それは魔王様の意思に共感してだな」

「それは嘘だ。魔王のいいなりとか言っていたからな」

「嘘じゃない」

「こんなところで死んでいいのか？今死ぬわけには……。とか言っていたけど」

「っ！…………分かった」

そして一呼吸おいて望月は続けた。

「私のご先祖様が魔界に紛れ込んだ時、そこは魔王の領地だった・・・しかしそれを知らなかったご先祖様はそこに住み始めたんだ・・・」

「ちょっと待った。俺はなんで魔王の手下なのか聞いたんだぞ？何の関係が・・・？」

「これは私が魔王の下にいるのかに関係する話だ」

蒼空は望月が魔王様と今まで言っていたのにさっきの話じゃ魔王と言っていたのを疑問に思いながらこう言った。

「そうか・・・なら続けてくれ」

「そこに住み始めてから何年か経ったとき、魔界を二つに大きく分ける二百年にも及ぶ長い長い戦い、これは後に『魔界大戦』と呼ばれる戦いが始まった」

「魔界大戦？」

「王軍と魔王軍の戦いだ。この戦いが始まったきっかけは魔王が魔界をすべて自分の手中に収めようとしたことが原因だ」

「じゃあやっぱり魔王が悪いのか・・・」

「まあそうだな。続けていいか？」

「ああ」

「お先祖様は魔王に見つからないように隠れ住んだ。その途中この疾風に出会い、選ばれた。その後、数年は見つからなかったが魔王に存在がバレ強い力を持っていることが知れた、そして戦争に駆り出された。その後も疾風の使い手が出て戦争に駆り出されていった」

「その力を見込まれお前も魔王の手下になったって事か・・・」

「大きく言えばその通りだが・・・他にも理由がある」

「理由？」

「その後、魔界大戦の終了間際勇者が現れた。そいつは仲間と果敢にも魔王に挑み自分と一緒に封印した。そして我等一族は戦争からは解放された・・・また魔王が帰ってくるまでは・・・」

「！！じゃあ俺のせいでお前は魔王の手下に・・・？」

「それも一つの理由だ。けど言ったら？戦争からはと・・・」

「どういう事だ？」

「戦争が終わってもルークや他の幹部にスパイとして使われていた。魔王が帰ってきた時万全の状態であるように・・・ルークたちは魔王の領地を取られないように必死に戦っていたが・・・」

「魔王の手下はかなり忠誠心が強いな・・・」

「そうだな・・・そして十六年前私が生まれ、六歳の時疾風に選ばれた。そしてそのころからでスパイになるため訓練させられ一年前

からスパイとして働くようになったんだ・・・」

「ん？それが魔王の手下になった理由か？力を見込まれたってことじゃん」

「大きく言えばそうだと言ったはずだしそれが一番の理由ではない」

「じゃあそれは何だ？」

そしてそれは本当に嫌なことらしく少しの間口を開かなかった。

そして決心したのか大きく息を吸いこう言った。

「ルークに、魔王に妹を人質に取られたんだ・・・・・・・・・・」

「!!!!!!」

「魔王が帰ってきた時、絶対裏切らないように、言う事を必ず聞かせるために妹を・・・」

「あいつら・・・・!!許せねえ」

蒼空は怒りを押えられずそう言った。

「だから私はこんなところで死ぬわけにはいけない!妹を助けるために!!」

バシユッ

「!!」

そういう音がして望月の近くに刀が刺さった。

「これは・・・疾風! ということだ・・・?」

「行け・・・!」

「いいのか・・・?」

「ああ。だが一つ条件がある。三十分間ここを動くな。もし動けば氷で止血していたものを解く」

「それだけで見逃してくれるのか?」

「とりあえずは・・・な」

「ありがとう・・・」

それを聞くと蒼空は望月に背を向け、翼を生やし飛び去った。

目的地はルークの所、魔王軍の司令部だ。

理由（後書き）

これで次回は勇者、光牙視点で話が始まります。
これからどうなるのでしょうか・・・
では次回で会いましょう。

魔王のために（前書き）

駄文だと思われませんが御一読お願いします。

魔王のために

「とりあえずこの指揮を執っているルークのいる所に行ってみるか・・・女が行くならそこだろうし・・・」

光牙は敵の本拠地にいた。

「おい。あいつもしかして！」

その光牙の後ろで魔界軍の兵士が言っていた。

「絶対そうだ！あいつ勇者だ」

「そうっばいな。けど俺達じゃどうにもできねえ。ルーク様に報告だ」

そしてその兵士は走り去った。

そんな事を言っていることを知らずスタスタと光牙は歩いて行った。

? ? ? ?

「勇者が来ている？」

ルークはさっき来た部下の報告を聞いていた。

「はい。あれはおそらく・・・」

「一人でか？あの人間の雪景を使うのが勇者と行動しているというのをあの女から報告があったのだから？」

「はい。確かに一人でした。今は別行動でもしているのでしょうか」

「てかあの女にそいつら殺すように命じたはずなんだから・・・」

「負けたのでしょうか。それになんで勇者は敵の陣地に一人で来たのでしょうか・・・？」

「そうだな・・・たぶん・・・」

「心あたりがあるのです？」

「そんなことはどうでもいい。今からここに百人集めろ。その後、俺が合図したら勇者を殺しにかかるぞ」

「分かりました。しかしここに百人も戦力を割いてよろしいのでしょうか？戦争中なのに」

「大丈夫だ。我が軍の方が王軍より戦力が多い。それにここで勇者をつぶしておく方が得策だ。魔王様も分かって下さるさ」

そう言うとはハハハハと笑った。

バカな奴だ。

一人で乗り込むとは無謀だな。

勇者は死ぬと相場が決まっていると思っていたが・・・

「勇者。ここがお前の墓場になるだろう・・・」

そうルークはつぶやいた。

? ? ? ?

光牙はルークなどこの軍の指揮を執っている奴がいるところを目指し歩いていた。

「どこだ？蒼空があの女を見つけたかな？」

独り言を言いながら周りを見渡しながら蒼空は歩いていた。

「少し拓けた所だな・・・」

ピュン

「!!」

矢が飛んできた。

光牙はそれに余裕で反応し、上半身を少し反らしただけでそれを交わした。

「さすがは勇者。見事な反応だ。封印されていたとはいえ腕は鈍ってないようですね・・・」

「ルークか……。まあそこは時間というものが存在していなかったからな」

「だから腕は鈍りようがないと……。？けれどそれで魔王様に勝てるだけでも？魔王様もあなたと同じでしょうから鈍っておられないでしょうし、あの少年は前あなたと一緒に来たあの真地よりも弱いようですしね」

「ああそうだな」

「分かっているのにまだ挑むのですか？」

「ああ。だってあいつは、蒼空は真地よりも強くなる！」

「そうですか……。考え直してはどうです？今なら命だけは助けてあげてもいいですよ？」

そう言ったルークの体から信じられないほどの殺気が溢れた。

それは普通の兵士程度ならビビッて動けなくなるほどのものだった。

それに対して光牙はひるみもせず、ルークを睨んでこう言った。

「遠慮して置く」

「じゃあ……。死ね！！」

そう言い信じられないスピードで攻撃してきた。

カァアアアン

剣と剣がぶつかり大きな音がした。

「お前じゃ俺に勝てない」

「それはどうですかね？」

ルークの影が盛り上がり黒い獣が五匹生まれた。

その影の獣の形は狼のような形をしていた。

その獣の内三匹が光牙に襲いかかった。

「くっ！」

光牙の姿が消え一瞬で数メートル後ろに移動した。

「何だ！？その犬は」

「私はあなたと違い時間は止まっていないのですよ・・・魔王様がいつか帰ってくるのを信じ、何年も何年も領地を守ってきた。絶対に奪われないように新たな力を求めそして影を操れる力を入れた」

「・・・お前の忠誠心もすごいな・・・」

「この力でお前に勝つ！！」

「やばいな・・・強くなってやがる」

「命乞いはもうおそいですよ」

「ふっ。命乞いなんてしねえよ。俺の力は光だ。だからお前一人じや攻撃はあたらない」

「それもそうですね。攻撃があたらないのでは話になりませんから」

そう言った後ルークは右手を挙げ、

「勇者を殺せ！！」

そう言い指をパチンと鳴らした。

そうすると百人の魔界軍兵士が出てきた。

しかも光牙を囲むように・・・

「私の攻撃を避けながら、百人の兵士の攻撃を避けながら私を倒すことがはたしてできるのでしょうか？」

「正直やべえな・・・」

光牙の顔には焦りの色が浮かんでいた。

魔王のために（後書き）

僕は今、悩んでいます。

魔界大戦のタイトルの事です・・・

一人で考えてもどうにもならん！！！！！！

という事で活動報告でアンケートを実施します。
活動報告の方でご協力をよろしくお願いします。

敗北!! (前書き)

魔法が初登場です。

最近タグに魔法があるのを思い出して、魔法出すの忘れてたあああ
あ。

って感じでいつだそうかタイミングを見計らっていました。

これからは魔法が結構重要になる予定ですが……

では魔界大戦19話です。

敗北!!

「勇者を殺せ!! とどめを刺した者には望むままの報酬をくれてやる!」

ルークが叫んだ。

それに応えるようにウオオオオオという声を上げ敵が一斉に光牙に襲いかかった。

十本もの刃が一斉に振り下ろされる。

カアアアアン

それを光牙は一気に受け止めた。

「ちょっとやばいけどこれなら・・・」

光牙は力を使おうとした。

「甘いですね・・・」

すると光牙の影がムクムクと膨れ上がり影の獣になった。

光牙は十本の刀を両手で受け止めている。だから足が無防備だ。

そこに影の獣は喰らいついた。

「くっ」

光牙は膝をついた。

右足からは血が出ている。

だがなんとか立ち、十本の刀を振り払った。

「くそ・・・お前が操れるのは自分の影だけじゃなかったのか・・・」

「ええ。そうですよ。私は一言も自分のとは言っていない。影を操るとは言いましたが」

「やっかいだな・・・」

「それよりいきなり手傷を負いましたね・・・？だが私の手駒は一人も減っていない。こんな事では勝てませんよ？」

「なめんなよ・・・お前の能力は影だろ？なら空中で戦えばいいことだ」

「それもそうだ。空中に影はできませんから・・・それに私の手駒も空を飛べる者はいないですしね」

「そうだ。お前の影も空中では使えないだろうから俺は空中から光の光線でも放って敵を倒したらいいだけ、後はお前の相手をすればいいだけだ」

「そう言い翼を生やし、飛んだ。」

「勘違いしないでください・・・たしかに影がなければ操れません

し、あなたが空中に行ったことであなたの影を操り足元からの攻撃はできなくなったが、地面での戦闘しかできないという事ではない・・・」

そう言ったルークの足元に影が集まっていく。

そして軽く上に手を振った。

すると膨大な量の影がルークの足元から浮き上がり徐々に形を創っていく。

「まじかよ・・・」

光牙はうんざりするような声音で言った。

影はどんどん形を創り、黒い、巨大な漆黒の龍になった。

「くそ・・・あの狼みたいなのだけじゃないのか・・・」

「と言っても状況はあなたの方にもちよつとだけ有利に働きましたよ？だって私の手駒は飛べないんですから」

そう言ったルークの背にはいつのまにか漆黒の翼が生えていた。

まるで悪魔のような・・・

といってもルークは悪魔族だが・・・

「ではあなたの翼をもぎ取りましょうかね・・・？」

ルークも飛び光牙の前まで来ていた。

「ほんとやばいな・・・」

「ギルダ！あなた達は下から私の邪魔をしないように魔法で援護しなさい！」

ギルダと呼ばれた男がハイ。了解しました。と言いそして兵にテキパキと指示を出し何グループかに分けた。

「魔法とはやっかいなことを指示するな・・・それにあいつは結構優秀そうだ・・・」

「あれは私の副官です。まああなたは死ぬんですからなんにも気にしないでいいですよ」

そしてルークは地面の影を操り影の剣を創った。

「そんなこともできるのか・・・」

「ええ」

そしてルークは影の龍に何か司令を出したようだ・・・

突然、咆哮を上げ突っ込んできた。

「そんな直線的な攻撃きくか」

そう言い悠々と躲した。

だが・・・

「あまいな・・・」

光牙の横を龍が通り過ぎる時、突然影の一部が自分の方へと向きを変え襲ってきた。

「くっ!!」

光牙はとっさに躲した。だが頬を少しかすり通り過ぎた。

「今だ。Aグループ。放て!!」

ギルダが命令を出した。

すると全員が一斉に光牙に向けて手をかざし、全員が一斉に同じ呪文を唱えた。

『光の精霊の力を借り、我それを放つ。>>>光刃^{こうじん}』

唱えた兵士全員の手から光の刃が放たれる。

バアアアアン

光牙の居た所に煙ができた。

「コホコホ。やべえ直撃するところだった」

煙の中から光牙は飛び出しそう言った。

「ナイスだ。ギルダ。おかげで勇者に少し隙ができた・・・」

ルークは光牙のすぐ前まで来てにやりと笑った。

その手に影で創った剣を握り、それを勇者の驚いた顔に振り下ろした。

「し、しまった・・・」

光牙の体に大きな一本の刀傷ができた。

そしてその傷からは血が噴き出していた。

敗北!! (後書き)

勇者がちよつとやばいですね……。勇者なのに……
まあいっか♪

それより僕、新連載始めました。

題名は『やる気のない勇者の物語』です。

まあ魔界大戦優先で合間を見つけてコツコツやっていきたいです。
できれば見てください。お願いします。

話題を戻し、魔法が初登場です。

ちなみにあれは精霊魔法です。

まあ本格的には近々説明でも書きます。

誰か感想くれえええええ。

登場!! (前書き)

やっと20話到達だぁー。。
なんか20とか区切りっぽいのがなんか好きです。

登場！！

「ぐはぁっ」

光牙は血を口から吐き出した。

「ククク・・・アハハハハハハ・・・」

ルークはさも嬉しそうに笑う。

「くっ！」

「終わりだ・・・！終わり！さあとどめでも刺しましょうかね？」

ルークは影で創った漆黒の剣を持ち光牙の目の前まで迫る。

「死ね！」

剣が振り下ろされる・・・

それを光牙は見る。

ヤバイ・・・

意識が朦朧としてきた。

や、やられる・・・

王のため、みんなのためにここで死ぬわけには・・・

光牙は振り下ろされた剣が当たる。

そう思った瞬間――――

カァァァン

何かがルークの漆黒の剣を受け止めた。

剣を受け止めた人物を見て光牙は驚愕に目を見開いた。

光牙の目に映った者は――――？

？
？
？
？

「ゆるせねえ……」

蒼空は怒りに身を震わせていた。

「とりあえず光牙に合流しないと……光牙はどこだ？」

するとそう遠くない所でたくさんの人がウオオオオオオという声があがった。

「何だ？」

蒼空はそっちを見る。

すると一人の人間が空に浮いていた。

「光牙!?!」

するとすぐに巨大な漆黒の龍が光牙の前にできた。

「あいつ何と戦っているんだ?ともかくすぐに助けに行かないと・・・」

蒼空はそちに方向を変え飛んだ。

光牙が戦っているのを見ていると敵が姿を見せた。

「ルークと戦っているのか・・・」

蒼空が飛んでいると光牙が戦っている方から声が聞こえた。

『光の精霊の力を借り我、それを放つ>>>光刃こうじん』

そして光牙に向かって光が放たれる。

「何だ?あれ・・・ってか大丈夫かな・・・」

そして煙の中から光牙が出てきた。

(よかった。大丈夫そうだ・・・)

だがその光牙の前にルークが漆黒の剣を持ち近づく、そしてそのまま光牙に・・・

「光牙!?!?」

光牙が血を口から吹き出しそしてよろめいた。

それを見た蒼空は今よりスピードを上げ飛ぶ。

「もう少し・・・もう少しだ・・・」

そしてルークは止めを刺そうと思っているのか、もう一回剣を振り下ろそうとした・・・

そこに蒼空は突っ込んだ。

そして光牙とルークの間に割って入りルークの剣を受け止めた。

光牙は驚きながらもこっちを見る。

蒼空はルークの剣を弾き、ルークに向かって雪景を振るう。

それをルークは躲し、大きく後ろに飛んで距離を取った。

そして光牙の方を向き怪我をしている所に手を向け氷で光牙の傷を止血した。

そして

「大丈夫か？」

とそう言った。

登場!! (後書き)

ヤバいことに気が付きました。

あとちよつとでテストだわWWW

提出物とかあるのにやってねええええええ!!

というわけで今から勉強頑張ります。

テストだろうが小説は書き続けますが、ちょっと勉強しないといけないので今より更新スピードが遅くなります。

テスト頑張るぞおーー。

真実（前書き）

今日もテストという地獄がありました。

本当に最悪です。テストが終わった後、僕のテンションはほとんどもなく低かったです。

なんでテストってあるんでしょう。ここまで僕の気分を害するものもそう多くないでしょう。

真実

「すまん……蒼空」

「いいって。それより大丈夫か？」

「ああ。女はどうした……？」

「そのことだが……殺さなかった」

「は？何で？」

「理由は後で……それより戦えるか？」

「止血をしてくれたおかげでなんとか……けどあんまり本気は出せなさそうだ」

そして二人はルークに向かって剣を構えた。

「あなたが来たということは女は死にましたか？」

「いや殺してねえ。ってか俺たちが望月を探していると知ってたのか？」

「いや。知りませんでした。が、女があなた達を殺しそこないスパイということが知られたらあなた達は女を追うと思っていただけです」

「正解。そしてお前を殺す！！」

「その顔は・・・もしやあなたあの女の過去でも聞きました？」

「ああ。お前らのせいであいつはスパイをさせられていたってことをな・・・」

「おい蒼空。悪いがちょっとだけでいいから説明してくれ」

「あいつの名前は望月忍。あいつが魔王の下でスパイをしていたのはルークと魔王に妹を人質にとられてたらしい」

「へえーそういう事か・・・あいつが魔王の手下にいる理由が分かったよ」

「それより二人ともすごいですねえ」

「すごい？」

「はい。敵のために私を殺しに来たようなものじゃないですか。あの女の妹はとくに死んでいるのに・・・」

「「!!!!!!」」

? ? ? ?

「十分だったな。早く戻らないと・・・そして今迄通りにしないと・・・」

望月は刀を握った。

「よし力は使えそう・・・」

そして力を使い、その場を去った。

「ふう。到着」

そして深呼吸した。

「あっ！！あれは・・・」

望月は空を見上げた。

視線の先にはルーク、勇者、蒼空がいた。

「何か喋っているみたい・・・よしこの力を声が聞こえるはず・・・」

そして望月は力を使った。

さっき使った技は『音送り』。

音というものは空気が振動して聞こえている。この技は風を使って自分の所まで届かせる疾風特有の技である。

「聞こえる・・・今力が弱っているから使えるか分かんなかったけど」

そしてその内容を聞いている内にとんでもないことが発覚した。

「い、妹が死んでいる・・・？」

望月は疾風を片手に叫んだ。

「ルークーーーーー！！」

？ ？ ？ ？

「殺した・・・？」

「はい。人質にしてから一週間くらい経った時でしたかね・・・あれは」

「それはやっぱり望月には教えてないよな・・・？」

「そんなのあたりまえじゃないですか。意のままに操るのが目的なのに・・・もしあなたの立場だったら教えますか？」

「・・・・・・・・・・」

「・・・ちっ。少し面倒な事になりました」

そしてルークは下を見る。

そしてすぐにそこからルーク！と叫びながらこっちに来る者がいた。

その女、望月はルークに向かって攻撃を繰り出した。

「ルーク！貴様……」

ルークは剣で攻撃を受け止めると足で望月を蹴って引き離れた。

「はぁ。これは面倒だ……この様子ではさっきの話を聞いていたようですね？」

「くそっ……くそっ」

「どう魔王様に報告しましょうか……蒼空さん？は殺さなかったとはいえ当分立つことができないくらいにはしていると思ったんですが……」

そして望月を見てこう言った。

「空いたスパイの穴をどうしましょう。疾風を使うあなた以上のスパイはそうそういないでしょうから」

望月はもう一度攻撃をした。

風の力を使って十回連続で攻撃した。

だがそれはすべて躲かれてしまった。

「とりあえず始末しましょう。あなたは情報を知りすぎている」

ルークは剣を構え望月を攻撃しようとする。

キィィィィン

という高い音と共にその攻撃は塞がれる。

「こっちを忘れるな・・・」

「勇者・・・あなた達の相手をしている暇はないのです。とりあえず始末しないと・・・ギルダ！」

「はい。総員・・・放て！」

その号令と共に驚く程のスピードで魔方陣が描かれ一斉に呪文を唱える。

『炎の精霊の力を借り我それを放つ>>>炎獄』
えんごく

すると魔方陣の真ん中から炎の塊が生まれそれがここに飛んできた。

「こっちの雑魚は任せろ光牙。それよりそっちを頼む」

「分かった」

蒼空は雪景の力で炎を凍らせた。

そして急降下し敵の群れに飛び込み敵を倒していく。

それを見た光牙はルークと望月の間に割って入る。

「怪我人二人で私に勝とうとでも？勇者、お前はあっちに力を貸し

逃げた方がいいんじゃないのか？」

「大丈夫だ。蒼空は・・・」

「じゃあ二人とも殺してあげましょう」

そう言い戦闘が始まった。

真実（後書き）

ごめんなさい。なんかテンション低い時に書いてしまったまあいっつも駄文ですけど今回はもっとひどい気がしました。

次の話は9割がた完成しているので数時間後・・・遅くても明日中には更新します。

戦い（前書き）

こんにちは。

もう少し早く更新できると思っ
てはいたんですがね。
では22話です。

戦い

「はぁぁぁぁぁ」

蒼空は敵を倒していく。

「やべえ。さすがに敵多いな」

そう言っている間にも敵が群れをなして襲ってくる。

「しょうがない・・・」

そう言うといきなり蒼空から冷氣が溢れた。

「アイスシャワー。・・・うわ中二っぽいな」

そう言うのとピキピキ音を立て水蒸気が凍り、先の尖った巨大な氷柱が出来て雨のように降り注いだ。

「わぁぁぁぁ!?!?!」

声を上げ敵はそれを交わしていく。

だが雨のように降り注ぐ氷を避け続ける事ができる訳もなく刺さっていく。

「ぐぁぁぁぁぁ!?!」

そう声を上げながら血を吹き出し一人ずつ死んでいく。

蒼空は自分の所に来ないように作ったのでそこから哀しげな・・・そんな瞳でその光景を見つめる。

そして蒼空はそれから手を軽く振って氷の雨を消す。

蒼空の周りには死体・・・死体・・・死体が散らばっていた。

残っている敵はギルダ含め二十数人だけだった。

そしてそっちを睨むと数人が、

「ひいっ」

という声を上げ脅えるような眼で蒼空を見てこう言った。

「強すぎる・・・ギルダ様。降参しましょう」

「バカか！こっちにはルーク様がいるかぎり負けない。戦え！」

そしてギルダは剣を抜き蒼空に襲いかかった。

それを蒼空は受け止めこう言った。

「降参してくれ。俺はできる事なら誰も殺したくはない」

「ふっ。戯言を・・・犠牲は必要なんだよ！」

そして二人の攻防が始まった。

「総員。放て！」

「は？この距離だとお前も危ないぞ？自爆するのか？」

「言ったろ？犠牲は必要だと・・・」

そして炎の塊が飛んできた。さっきのより小さい。だが直撃すれば命はないだろう。

蒼空は力を使って凍らそうとした。

だがギルダとの攻防で凍らすことに集中できなかった。

「くそ・・・しょうがないな・・・」

蒼空は動いた。

まずギルダにだけ集中しギルダの足元を凍らせ動けなくし、そして斬る。

すると血が宙を舞う。

だが蒼空はそれを横目で見て、雪景を炎に向かって振りそして凍らす。

「ひい。もうだめだ。ギルダ様もやられた」

そして残りの兵士も蒼空に背を向け逃げ出した。

蒼空はそれを見送り、死体に目を向け悲しげに呟いた。

「ごめん・・・」

そして光牙達が戦っている方に目を向け翼を生やし飛んだ。

戦い（後書き）

最近、蒼空って高校2年生で人殺したりしているのに普通にしていたらもの凄く精神力が高いなと思い今日はこんな感じにしました。後、これから技名とか魔法名で中二病てき表現が今よりもっと出てくると思います。

ご了承ください。m (m

できれば感想ください・・・頼みます。

新技（前書き）

k i n u k a z u です。

魔界大戦23話です。

僕、本気で名前とか考えるセンスないですね。

新技

「大丈夫か？光牙」

俺は光牙の横まで飛んでいき、静止する。

「蒼空・・・なんとか攻撃は喰らっていない。けど助かったそろそろヤバかった」

「そうか・・・」

「それより蒼空。そっちは・・・」

そう言い光牙は下を見る。

「ははは・・・すごいな蒼空。あの数をこの短時間で倒したとは・・・」

「ああ。光牙、ルークを倒すぞ」

そう言いルークの方を見る。

するとルークもこっちに話しかけてくる。

「ギルダまでも倒されましたか・・・蒼空さん程度、あの数いたら倒せると思ったんですが・・・少々あなたの力を見くびっていました・・・けれど」

そう言いルークは影の龍に命令する。

龍は望月を狙って攻撃した。

だが蒼空は望月の前に移動し龍の攻撃を防ぐ。

そして龍を斬り倒した。

「そいつを倒しても無駄ですよ・・・何体でも創れますから・・・」

ルークはまた影で龍を創った。

今度の数は十体、正直ヤバかった。

こっちは望月も光牙も怪我をしているから。

蒼空は後ろの望月を見る。

望月はルークへの復讐に取り憑かれ、心ここに有らずって感じた。

「このままじゃ望月が・・・」

「蒼空！集注しろ！！」

はっと気づくと龍に囲まれていた。

光牙は囲みから外れ、ルークと戦っている。

「ヤバッ・・・どうするかなあ」

蒼空は必死にここを打開する方法を考えた。

後ろには望月、あの技をコントロールできなかったら望月も光牙も巻き込む可能性があるから却下。

ここはアイスシャワーぐらいが妥当かな。

「行けえ。アイスシャワー」

水蒸気が固まり龍に向かって落ちていく。

それは龍にあたり龍は消えると蒼空は思ったがそれは違った。

水蒸気が固まったのを見るとルークはパチンと指を鳴らした。

すると一匹が咆哮を上げ弾けた……

残り九匹の龍に当たる寸前に弾けた影は屋根みたいなのを創りそれを防いだ。

「ヤバッ」

全部消えると思って油断していたところを一気に九匹の龍が襲ってきた。

「しょうがない。できることを信じるしか……『アブソリュート・ゼロ』」

一瞬の出来事だった。

一瞬で九匹の龍が凍りつき、落下した。

それに一気に温度が下がったため、望月はガタガタ震えだした。

「よかった。成功だ」

あれで目が覚めたのか望月がこう呟いていた。

「危ない。このままじゃやられるところだった。冷静になれ私」

そしてルークの方をキツと見据える。

するとルークがこう言った。

「すごい技ですね。ここは退きましよう。あなた達を殺すには力が足りない」

そして地面まで急降下した。

「待て!!」

蒼空も光牙も後を追った。

「光牙。光の技で・・・」

すると光牙はうっと傷を押えて止まった。

「くそ・・・すまん蒼空」

ルークは地面に到着した。

そこまで高いところで戦っていたわけでもないから割と早く到着していた。

「ではみなさん。また殺しに來ます。さようなら」

そして地面の影に吸い込まれるように消えた。

蒼空はそれを見ると光牙の肩を持ち、下まで連れて行つた。

「望月は・・・？」

望月も地面に降りてルークの消えたところで

「くそ・・・逃げられた。けど・・・いずれ」

望月が倒れた。

「大丈夫か？」

蒼空は駆け寄っていった。

望月は氣絶していた。

それに蒼空がやった傷からも血が出ていた。

蒼空は望月を光牙のところまで運ぶと、光牙の横に寝かせた。

「光牙、大丈夫か？」

「ちょっとやばいかな・・・」

「じゃあ寝てろ。傷は塞いでおくから」

「頼んだ。ありがとう」

そして光牙も気絶したように突然寝た。

蒼空は氷で望月と光牙の傷を塞いだ。

「疲れたな。けどここで寝る訳にはいかないな・・・」

そして疲れたように溜息を吐く。

それから光牙達の横に座った。

新技（後書き）

ルーク戦、終了って感じですよ。

ルークはこれから出てくるしまあまあ重要な人になる予定です。

魔界大戦は1日〜2日で1話更新できるように頑張ります。

後、今後の更新について活動報告に書いたのでよかったです。さ。

まあここで書いたようなことしかないですけどww

文才が欲しいよー

感想よろしくお願いします。

新たな〇〇（前書き）

魔界大戦を始めるに至って考えていた事がやっとできたって感じ
です。

ではよろしくお願いします。

新たな○○

「うつ・・・うゝん」

光牙が目を覚まし上半身を起こした。

「おはよう。光牙」

「蒼空・・・俺どれくらい寝てた？」

「ほんの数時間ぐらいかな。まあ朝になったけど」

「そうか・・・けどお前は寝てないんじゃないのか？」

「まあな」

「じゃあ今度は俺が起きてるから寝てろ」

「いや。遠慮しとく」

「いいから寝とけよ」

「大丈夫だって。後で寝るから。それよりこいつどうする？」

そして光牙の横で寝ている望月忍という名の女を指差す。

「そうだな・・・」

「俺、考えたんだけど俺たちの仲間にするってのはどうだろう？」

「は？こいつ敵だぞ？」

「ああ。けどこいつ魔王とルークに恨みができてそれに人質はいない。ということは戻る必要もない。

それにこいつは魔王に攻撃が届く五本の名刀のひとつ疾風を持っているんだぞ？戦力にはなると思うが」

「それもそうだな・・・まあこいつが起きて敵になりそうだったら捕縛、王の所に送って幽閉でいいな？」

「ああ」

そんな話を話していたらタイミングよく望月が目を覚ました。

そして体を起こし、すぐに大粒の涙を流し始めた。

「い、妹が・・・早くあいつ等を殺してやりたい」

「まあ待て。望月、お前が一人で行っても逆に殺されるだけだと思うが・・・」

「それでも！・・・それでも！！」

「今、ちょうどお前の話をしていた」

「え！？」

「お前、仲間にならないか？」

「私はお前らの敵だぞ？スパイもしていたんだぞ？」

「それでもだ・・・お前なら俺たちの戦力になる。魔王も倒しやすくなる。お前は仇討ちができる。俺達両方にメリットがある。どうだ？」

「・・・いいのか？」

「こっちが頼んでんだ」

「頼む。ありがとう」

「よし。これでいいよな光牙」

黙ってこちらのやり取りを見ていた光牙に声をかける。

そうすると無言でうなずいてきた。

それを見て蒼空は望月に声をかけた。

「よろしくな。望月」

「忍でいい。いやそう呼んでくれ」

「わかった。よろしく忍」

「よろしく」

そう言って軽く頭を下げてきた。

すると光牙が口を開いた。

「で、これからどうする？ 蒼空、忍」

「そうだな・・・とりあえずグラン元帥の所に戻ろうか」

「そうだな・・・」

「待ってくれ。私は敵だったんだから元帥の所に行くのはまずい」

「「ああ」」

見事にハモった。

だがその通りだった。

「まあ大丈夫だろ。グランなら分かってくれるだろう」

光牙が言った。

「まあヤバかったら。俺達が守ればいい」

「そうだな。じゃあ行こう。蒼空、忍」

「OK。けど光牙と忍。お前ら怪我してるけど歩けるか？」

「蒼空が止血してくれてるから血は出ないしまあ大丈夫だろ」

「ああ。これは蒼空がやってくれたのかありがとう」

「まあ大丈夫って事だな。けど無理はすんなよ」

「近いし大丈夫だろ」

そう言い光牙も忍も立ち上がった。

そしてグラン元帥が陣を張っている所に向かってゆっくりと歩き出した。

新たな〇〇（後書き）

忍って呼ばせる事にした理由は望月より書きやすい仲間なんだから名前で呼ばせようと思ったからです。

これからもよろしくお願いします。

感想を頂けると嬉しいです。

次の目的（前書き）

みなさん。こんにちは。

今のところ決意を守れているK I N U K A Z Uです。
魔界大戦25話です。

次の目的

「グラン元帥！」

光牙がさっきまで魔王軍がいた所を見ていた王軍元帥に話しかける。

「勇者・・・なにがあったか知っているか？俺たちの方が少し優勢だったのだからいきなり魔王軍が撤退を始めたのだ」

「ああ。それなら・・・ルークが撤退したからでしょう」

「倒したのか？」

「まあ戦って逃げられましたけど・・・」

「そうか。まあよくやった」

「どうも。まあそれを報告しておくべきだと思いました」

「そうか。ところでそちらの方は？」

「こいつは望月忍。色々ありますが今は仲間です」

「色々とは？」

グランが聞いてきたので光牙は事情を説明した。

それを聞いてグランはこう口を開いた。

「どうするべきか・・・この方にも事情があった、だがスパイをしていた。うゝむ」

そう言い腕を組んだ。

「まあとりあえず王に聞いてみることにしよう」

そう言ってグランは懷から何か取り出した。

どうやら鏡みたいな物だ。

すると蒼空が考えている事が分かったのかグランが説明をしてくれた。

「これは魔法がかけられた鏡で、戦闘に行くとき司令官が王から渡される物だ。これで王の指示を仰ぎ行動する。王の所に一つあってその他にも何枚がある」

そう言って鏡に何か呟いた。

すると王の姿が映りこう言った。

「グラン元帥。どうかしたか？」

「はい。とりあえず報告をします。魔王軍は撤退。この戦、我らの勝ちとなりました」

「そうかそうか。よくやったな」

「いえ。これも勇者と蒼空のおかげです」

「そこに光牙もおるのか？」

「はい。戦闘が始まる前にやってきてルークを倒し、撤退させました」

「ちょっと光牙に替わってくれ」

「はい。勇者」

そう言って光牙に鏡を渡した。

「はい。何でしょう？」

「よくやったな。儂は嬉しいぞ」

そう言って光牙を父親のような眼で見つめる。

「ありがとうございます。しかし蒼空の活躍の方が大きいでしょう」

「そうか。蒼空という少年にも礼を言っておいてくれ。これからも頼むぞ」

「はい。それよりお話したいことがあるんですが・・・」

「何だ？言ってみよ」

「はい。実は・・・」

そう言いグランに話したように王にも説明した。

「ふむ・・・その望月とやらにも事情があつたらしいがスパイをしていたのも事実。どうするべきか・・・」

「王様！お願いします」

蒼空が後ろから言った。

「じゃが・・・」

「私からもお願いします」

「ふむ・・・グランはどう思う？」

「私は・・・大丈夫だと思われます」

「して・・・理由は？」

「勇者もこの蒼空も正義に溢れています。この二人が選んだ人に間違いはないでしょう。だがもし裏切ったとしてもこの二人なら適切に対処できるでしょう」

「それもそうだな・・・よし光牙。そなたの好きにせよ」

「ありがとうございます」

光牙も蒼空も頭を下げた。

そこでグランが言った。

「王様。私達は王都に戻ります」

「分かった。気を付けてな」

「はい」

「光牙。主らはどうする？」

「私たちは旅を続け、魔王を倒すための力を手に入れ倒しに行きます」

「そうか・・・よしこの鏡は主らが持って行け」

「分かりました。では行きます」

「でわな・・・」

そして王の顔が消えた。

「ではグラン元帥。私たちは行きます」

「また会おう」

「行こうか。蒼空、忍」

「分かったわ。それよりよかった。認めてもらって」

「そうだな・・・よかった」

「それより光牙。これからどうすんの？」

「死霊の森って知ってるか？」

「知ってるわけねえじゃん魔界出身じゃねえんだし」

「私は知ってるわ。何でも幽霊が出るって所だったような」

「そう。そこに住んでいる物好きな人が居るらしいんだよ」

「そこに行くのか？そもそも何のために？」

「その人は『魔法の達人』、『魔界最強の魔術師』とか異名を持っている人だ。さっきルークとかと戦っている時思ったんだけど、魔法が使えたら戦い方が広がるし、魔王を封印するためには魔法が必要だ。その人に弟子入りして魔法を教えて貰おうと思っているんだ」

「そうか。魔法が使えないと、封印という手段が使えなくなるもんな。正直、人間界に魔法なんてないからそれ見てびっくりしたぜ」

「蒼空、忍いいよな？」

「俺はいいぜ」

「・・・・・・・・・・」

「どうした？忍」

汗をダラダラと流す忍を見て蒼空が声をかけた。

「う・・・・ん。幽霊とかちょっと苦手なんだよね・・・」

「ならやめるか？」

「いや行くよ。苦手と言ってもそこまでじゃないと思うし・・・」

「じゃあ決まりだな」

光牙が言った。

「おう。じゃあ行こうか・・・」

そう言い死霊の森がある方に向かって歩き出した。

次の目的（後書き）

蒼空、光牙、忍がこれから魔法を覚えに行きます。

さあこれからも頑張って書くぞおお。

感想や意見などお待ちしております。

死霊の森（前書き）

こんばんは。もうちょっと早く更新するつもりが・・・
名前考えるのに手こずってちょっと遅くなりました。

死霊の森

「キャアアアア」

忍が叫び、ビクツとした。

「何だ？」

「あ・・・あれ・・・」

そう言い前を指差した。

「ん・・・？」

そして忍が指差した方を目を凝らして見る。

「あのちよつとでかい葉っぱがどうかしたか？」

「え？葉っぱ？」

「葉っぱだよ」

「ふう。幽霊だと思った」

そう三人は歩き、ついに死霊の森に来ていた。

ここに来てからというものの・・・忍が叫び声を上げ抱きついて来たり、忍が叫び声を上げ殴られたりとまあ大変だった。

「忍、ビビりすぎだろ・・・」

光牙はあきれた様な声音で言った。

「そうだな・・・ってかそれほどじゃないって嘘じゃん」

「大丈夫だと思ったんだもーん」

「「はぁ・・・」」

二人そろって溜息を吐く。

「まあ幽霊なんてさっきみたいに葉っぱとかの見間違いで、怖い怖いって思ってるからそう見えるだk・・・」

「キャアアアアア」

途中まで言ったところでまたしても忍が叫び声を上げた。

だがさっきより声がでかい。

それに顔が真っ青で指をさしてワナワナ震えている。

「だからどうしたって・・・」

そう言って蒼空と光牙は忍が指差す方を見る。

そこで二人は声を失う。

「・・・・・・・・あ、あれって・・・・・・・・」

「うん。見間違っているところだけど・・・・・・・・」

そこで蒼空の言葉を引き継ぐ。

「幽霊っぽいね」

「キャアアアアアア」

そこでまた悲鳴が聞こえる。

「・・・・・・・・とにかく走れ!!」

そして三人は走り出した。

「どうすんだよ・・・・・・・・」

「幽霊って剣とか物理攻撃は聞かないだろうし・・・・・・・・」

そして追ってきた幽霊を見る。

その姿は半透明でなんか剣みたいなのを持っている。

「ああどうする？光牙、忍」

「なんか好戦的っぽいし、攻撃も効かない・・・・・・・・逃げるしかないな・・・・・・・・」

「（コクコク）」

忍も首を縦に振りまくっている。

よっぽど嫌なんだろう。

「どっちに行く？」

「とりあえず真っ直ぐだ。俺達が会いに行く人もこの方向に居るはずだ」

「オツケー。……って言いたいところだけどそれは無理そうだ」

前には別の幽霊が来ていた。

そして周りを見渡しても幽霊ばかりだ。

「囲まれたな……」

「どうするの。私なんか気絶しそうなんだけど」

「なんとかして逃げるしかないでしょ」

ブワッ

なにか凄い殺気がすぐ前から出てきた。

その殺気で髪がなびくぐらいの風が出来て蒼空たちの方へ来た。

幽霊たちは全員一瞬ビクツとして踵を返し逃げて行った。

「ヤバいぞ・・・あんな幽霊よりはるかにヤバいものが居る」

「どうする?」

「そいつも幽霊じゃなかったら対処できるけど・・・」

すると殺気は消えた。

「殺気が消えたな・・・戦う気はないのか?」

殺気は消えたが気配はこっちに近づいてくる。

蒼空たちは剣を抜きいつ攻撃が来ても対処できるようにする。

そして前の茂みがガサガサという音を立て人が姿を現した。

「お主等危ないところじゃったの」

その人は白い髭を触りながら言ってきた。

「ありがとうございます。助けてくれて・・・もしやあなたが『魔界最強の魔術師』キルアⅡローブさんでは?」

「なんじゃ? 儂に用かの?」

「はい・・・」

「そうか、そうか。家はすぐそこじゃ。そこで話を聞こう。ついて来なさい」

「分かりました」

三人はキルアさんについて行き、そして家に着いた。

死霊の森（後書き）

今回はこんな感じでしたが次回は魔法を覚えるために頑張る的な話になると思います。

二日以内に次も更新します。

感想くださいみなさん。

修行開始（前書き）

タイトル通りです。

修行開始

「ふうむ。儂の弟子になりたいとな?」

「はい。魔王を倒すため私たちは旅をしています。そのためには魔法が必要になると思うんです」

「そうじゃろうな・・・ところで主等の名前は?」

「神城光牙しんじょうこうがです」

「望月忍もちづきしのぶです」

「氷堂蒼空ひょうどうそうくうです」

「!! 氷堂とな?」

「はい。ですがそれが何か?」

「いや。久しく聞かなかった名前じゃったからな・・・」

「どこで聞いたんですか?」

「儂が取った最初の弟子の名じゃ。八十年・・・いやそれ以上前だったか・・・昔の事は忘れたわい」

「氷堂真地という名前でしたか?」

そこで光牙が体を前に乗り出して聞いた。

「そうじゃ。主等も知っておるのか？」

「はい。私の相棒でした」

「そうかそうか。あやつの魔力や魔法に対してのセンスなんてハンパなかったのお」

「いったい何歳なんだ？このじいさん・・・」

そんな事を思っていたら、キルアが

「じいさんとは何じゃ」

「!!」

蒼空が驚きを隠せずにいると、

「驚いておるようじゃの・・・儂ぐらいになると読心術なぞお手の物じゃ」

「す・・・すごいですね」

「そうじゃ。さつき主が考えていた年齢の事じゃが教えてやろう。儂は竜族じゃ。魔界の動物、人型は長生きなんじゃよ」

「そういや・・・王様も光牙とかの言動から同じ人だしな・・・」

「そうじゃ。それより教えて欲しいのじゃが・・・氷堂、お主は何者じゃ？」

「何者と言っても・・・氷堂真地の曾孫です」

「ははは。最初に儂をじいさん呼ばわりしたりとか、奴にそっくりじゃ・・・（それに魔力がでかい所とかもな・・・）」

「？どうかしましたか？」

「いや。何でもない。勇者、神城光牙」

「はい！」

「魔法には向き不向きがある。儂が見た所お主には向かんじやろう。習得できるかも分からん。それでも儂の弟子になるか？」

「はい。この後の道のりで必要になる力です。この三人の内一人でも習得できたらそれでいい。だからお願いします」

「分かった。儂の事は師匠。もしくは師と呼びなさい」

「。「分かりました。師匠」」

見事にハモった。

それに師匠は豪快にわははと笑い、こう言った。

「まずは簡単な魔法を見せてやろう」

そう言って横にある暖炉に手を向け・・・

「ファイア」

そう言った。

すると手から炎が生み出され暖炉に向かって飛びそしてポォッと音を立て火が付いた。

「これが魔法じゃ・・・そしてこれは下級魔法。手をかざし魔法を唱えるだけという至極簡単な魔法じゃ。と言っても最初は感覚が掴めないからこの下級魔法でもできるようになるまでに少し時間はかかるじゃろう」

「それってどのくらいですか？ 師匠」

忍が丁寧に聞いた。

「それは人による。言ったじゃろう？ 向き不向きがあると・・・まあ通常は二週間くらいじゃろうか」

「そんなにですか・・・」

「とりあえずやって見せた魔法を暖炉に向けて撃ってみてくれ。やり方はこう。まずしっかり集中してイメージする。そして呪文を唱え放つだけじゃ」

そして言われた通り三人は立ち、暖炉の前まで移動し暖炉に向けて手をかざした。

まず忍がやってみる事にした。

「フアイア」

そうすると忍の手の前に小さな火の玉が出来たがすぐに消滅した。

光牙もやってみたが小さな火の玉さえでなかった。

「ははは。そう落ち込むな・・・最初は皆そんなものじゃ」

そこで蒼空も挑戦してみる事にした。

「フアイア」

するとさっきの師匠のより大きな火の玉が出来てそれが暖炉の方に飛び、暖炉とその後ろの壁を吹っ飛ばした。

「!!!!!!!!!!」

師匠も光牙も忍も驚いていた。

だが一番驚いていたのは蒼空自身だった。

「すみません・・・師匠」

「そんなこといいよ。多少、予想していたし・・・」

「?」

蒼空が?マークを浮かべているのを気にもせず師匠はなにか呟いた。

すると壁も暖炉もだんだん直っていった。

「さすが師匠」

「蒼空よ・・・お主はすぐに次の段階に行く必要があるな・・・加減したり操る事を覚えねばの・・・」

「はい」

「やるなあ。蒼空」

「ありがとうございます。それにこれから頑張りますか」

「そうだな」

そう言い魔法習得への修行生活が始まったのであった。

修行開始（後書き）

いきなり蒼空は魔法を使ってしまった・・・
まあいつかWW

お母さんにパソコンやりすぎだから明日禁止といわれ今更新しました。

明日どうしょ・・・

二目 その1 (前書き)

題名通りです。はい。

二日目 その1

〽修行生活二日目〽

「みんな起きなさい」

師匠の声で三人とも目を覚ました。

「わぁゝぁ」

忍が大きなあくびをしてその後師匠にあいさつした。

「おはようございます」

「うむ。おはよう。よく眠れたかの？」

「はい」

「よしみんな顔を洗って着替えなさい。朝ごはんを食べた後修行を開始するぞ」

「はい」

そう言って三人は顔を洗いに行った。

「なあ光牙。俺たちはできるだけ早く魔法を習得しないといけないよな」

「ああ。そして早く魔王を倒して平和をもたらさないと・・・」

「けど魔法を習得するよりそっちの方が重要だよな？」

「あたりまえだ。俺達の双肩には人の命が乗っているんだ」

「じゃあ魔法を何ヶ月も習得できなかったら？」

「うーん。それは・・・やめて行くべきか、それとも続けるか・・・」

「俺も昨日の夜、それを考えていたんだ。魔法がなかったら倒す手段も減る。もしかしたら負けるかも知れない。俺たちが死んだらそれこそ終わりになる。けど魔王のしている事しようとしている事は早く止めないといけない。だから・・・」

「そうだな・・・忍はどう思う？」

「私は蒼空みたいなこと考えてない。だって頑張って早く覚えたらそれが一番いいじゃん。だから信じて頑張ってやるだけ」

「ははは。それもそうだな」

「ああ」

「じゃあ戻ろ♪」

？
？
？
？

「次は着替えだな」

「おう。もう腹減った。早く着替えて飯食いに行こう」

「そうそう。私もおなか減った」

そう言って忍は服に手をかけ脱ごうとし始めた。

「ちょ、ちょっとストップ。忍。お前何しようとした？」

蒼空があせった様子で聞く。

「何って・・・着替えだけど？」

「俺たちのいるここですか？」

こんどは光牙が聞く。

するとみるみる内に忍の顔が赤くなって、

「ストップ。悲鳴もだめ」

蒼空が忍の口を塞いだ。

「むぐむぐむむ・・・（離してよ）」

「おっとすまん」

「私もごめん。いつも一人だったからその感じでやっちゃってた」

「まあいい。じゃあこの部屋で忍は着替えろよ。俺と光牙は外で着替えるから」

そう言って部屋を後にした。

? ? ? ?

「よし。満腹、満腹」

食事が終わってそう言った後、蒼空は聞いた。

「今日は何をするんです? 師匠」

「今日はこの死霊の森のどこか好きな場所を各々見つけそこで精神統一して集中する訓練だ。魔法を使うに当たって集中することや精神を安定させることは非常に重要じゃからな」

「分かりました」

「何も聞こえなくなるまでやるんじゃ。だが何が起こっても対応できるように自分の周囲に意識を払っておくように」

「分かりました。いつまでやればいいんでしょうか?」

「昼時までじゃ。その後昼食を取ってまた同じことをやってもらう」

「はい」

「分かったら行け！」

そして三人とも家を出て死霊の森へ入っていった。

そして各々場所を見つけそこにあぐらになって、集中を始めた。

しかし・・・

「勢いで飛び出しちゃったけど幽霊来たらどうしよう・・・」

とか不安に思っている者もいた。

二日目 その1（後書き）

章タイトルの変更と増加をしました。

魔王決着編から王領編に変えました。

王領編は王の領地で起こる話ということです。

そして死霊の森からの話は魔法習得編としました。

二日目 その2（前書き）

今、地震とかで大変みたいですネ・・・

その2です。

二日目 その2

SIDE 蒼空

俺は水辺の岩の上に座り、師匠に言われたように集中することを始めた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

聞こえる音は水が流れる音、風が吹き葉がカサカサと鳴る音だけだ。

しかし十分もするとその集中も切れて・・・

「だあっ！無理！これ以上だめ」

そして一人でわあーわあー騒いで、また集中をすることを開始した。

SIDE OUT

SIDE 光牙

ここは木に囲まれ静かな所だ。

俺はここを集中する所にしてそれを開始した。

「集中したり精神統一することは昔からやっていたから簡単にできそうだな・・・」

光牙は勇者だ。

昔、自分から王の役に立ちたいと言い、それをおもしろがった王が王軍の部隊長とかを師にして修行させていた。そのときに集中すること、精神統一の重要さを教えられ、教えられていたのだ。

「教わったとおりにやればいいな・・・」

そう言って光牙は座って目を瞑った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

静かな時が過ぎた。

それでも光牙は集中力を切らさずやり続けた。

S I D E O U T

S I D E キルア

「ふむ。そろそろ昼時じゃの・・・」

そう言って外に出て空を見上げる。

「勇者の光牙は出来ているじゃろう・・・」

「蒼空は・・・・・・・・無理かの・・・」

「忍は・・・やろうと思えばできるじゃろうが・・・幽霊にビビッてできないじゃろう・・・」

そう予想を立てた。

「じゃあみんなを戻すとするかの……」

そう言っって空中に光の魔方陣を描き始めた。

それはほんの数秒で完成した。

そして何やら呪文を唱えた。

すると魔方陣から白い光を放つ鳥が三匹現れた。

「三人を呼んできておくれ……」

優しい声で言うと、鳥は飛び立った。

S I D E O U T

二日目 その2（後書き）

なんかすみません。

こんな感じでそれぞれどんなことをしているのか修行風景を書こう
と思ったんですが・・・なんか変ですよね？

今度はちゃんとやりたいと思います。

感想お持ちしております。

二日目 その3 (前書き)

その3です。

どれぐらいまで続くだろう・・・

それより30話だぁ~~~~~!!

30話にやっと到達です。

二日目 その3

「みんな、どうじゃったかの？」

昼ご飯を食べながら師匠がみんなに午前中の成果を聞いた。

「俺は幼い時からそういう訓練を受けてきたから余裕だった」

光牙はそう答えた。

「俺は無理でした」

蒼空はそう答えた。

「私は………ちょっと」

「ちょっと？」

「だって幽霊が怖くてそんなのに集中できなかったんだもん」

忍はそう答えた。

「忍よ……いつでもそういう事ができるようにならねばならぬ」

「はい……」

そこで光牙と忍がお腹に手を当て、呻いた。

「どうした？二人共？」

蒼空はそう言いながら光牙の方を見る。

すると血が出てきているのが見える。

「そうか・・・氷で止血してただけだったから氷が溶けたんだ」

「蒼空。退いておれ」

師匠が言った。

それに蒼空は素直にしたがって後ろに避けた。

すると師匠は傷に向かって手を向け呪文を唱えた。

「ヴァンダー」

すると手から傷に向かって白い光が伸びた。

その白い光は傷を覆い、その光が消えた時、光牙の傷は塞がった。

「あと数日もすれば傷跡も消えるじやろう」

そして忍にも同じことをした。

「ありがとうございます」

「よし。食事に戻ろう」

「師匠。あれは何魔法ですか？」

「あれは下級魔法の中の白魔法じゃ」

「あの傷を下級魔法で治すんですか？」

「いや。たぶん傷を負ったすぐ後なら下級魔法で大丈夫だが主らがここに来てから一日は過ぎたじやろう？この時間まで放っておいたら下級魔法で大丈夫じゃ」

「じゃあなんで？」

「それは蒼空。主が雪景の氷で止血したからじゃ」

「氷で止血したら大丈夫なんだ・・・」

「いや。雪景の氷というのが重要じゃな」

「へ？」

「それはじゃな・・・雪景で出す氷というのは純粹。そして主は無意識かも知れぬが、細胞が一瞬で凍るほどの氷で凍らされていたのじゃ」

「え？でも俺らはそんなに冷たく感じなかったよな？」

光牙はそう言って忍を見る。

そうすると忍はコクコクと頷いている。

「それは不思議じゃの・・・まあそれで細胞が保存されていたから

下級魔法で治せたっていうわけじゃ」

「へえ」

「ふむ。午後も集中したりできるように午前と同じことをするつもりじゃったが魔法の説明会と行こうかの」

「魔法の？」

「そうじゃ。魔法は奥が深い・・・儂でさえ分かっていない事があるぐらいじゃ。早く知っておいて損はない」

「「はい」」

「分かったら早く食事を終わらせようかの・・・」

二日目 その3（後書き）

という訳でいつ書こう・・・と思っていた魔法の説明を次回やりたいと思います。

いきなり説明から入る予定ですので（変わるかも知れませんが・・・）
（）よろしくお願いします。

明日は卒業式・・・僕は卒業生じゃないですが、まあ早く帰ってこれるので明日更新できたらと思います。

しかし魔法の説明なので長くなるので無理かも知れませんが・・・
けど最悪明後日には出します。

感想待ってます。

魔法説明会（前書き）

魔法の説明会です。

今、決まっている設定は入れました。

読みにくいかもしれませんがよろしく願います。

魔法説明会

「魔法とは何種類かに分かれる。
例を挙げよう。」

- ・ 下級魔法
- ・ 中級魔法
- ・ 上級魔法
- ・ 精霊魔法
- ・ 禁呪詛

この五つだ。強い順に下級魔法・中級魔法・精霊魔法・上級魔法・禁呪詛の順で強くなる。

そして下級魔法と中級魔法これらは魔方阵を描かずとも魔法が使える。

魔方阵を描くのは時間がかかるので戦闘にはこの二つがよく使われる。

魔方阵を早く描ける人もいたので注意。

呪文は『ファイア』など簡単に一言で言えるようなが多い。

精霊魔法、これは精霊の力を借りて発動する技。精霊の意思を無視して発動することはできるが威力は落ちるだろう。

これは魔方阵を描く必要があり下級魔法などに比べれば時間はかかるが威力は変わる。

呪文の形は『○の精霊の力を借り、我それを放つ>>>○○』という感じじゃ。

上級魔法、これは魔方阵を必要とし、下級魔法・中級魔法などより殺傷力、攻撃力などすべてにおいて上回る魔法である。それゆえ魔力もかなり必要とする。

禁呪詛は名の通り使う事自体を禁止されている魔法だ。

そうは言っても使い方を知らない人が多い。もし知っていても時間がかかりかかるのが多く実戦向きではない。

魔王を封印する魔法。真地が使った魔法じゃ。これは禁呪詛に分類される。

この五つに大きく分類される。何か質問はあるかの？」

師匠は長々といっきに説明しこう言った。

「「「ありません」」」

三人は声を揃えて言った。

すると師匠は驚いたような顔になり、

「ふむ。今回の弟子、真地もそうじゃったがこの説明で理解すると優秀じゃの・・・」

そう言った後、一呼吸置いた後またこう言った。

「続きを説明する。」

これは五つともに当てはまるのじゃが白魔法・黒魔法・召喚魔法・時魔法・青魔法などに細かく分かれる。

白魔法でも下級魔法より中級魔法の方が威力は高い。これは言わずともじゃが。

青魔法は使える者がほとんどおらん。魔法を使うのとは別に才能がいるからの・・・」

そこで師匠が一呼吸置いたので蒼空は疑問に思った事を聞いた。

「では分類はそれだけですな？」

「いや違う。他にも無属性魔法というのもあり封印したりするのは無属性魔法に分類される。

これも使うのは難しいじゃろう・・・

次に魔方陣の説明に行きたいのじゃが質問はないかの？」

「大丈夫です」

「では魔方陣の描き方じゃがまず指先に少しだけでいいが魔力を集め、そして空中に描きたい魔方陣を描くだけじゃ。

魔方陣にも様々な形がある。精霊魔法以上の魔法すべてに一つずつある。これは後で教えて行こう」

そして師匠は質問があるか聞き、それに蒼空達がないと答えると・・・

「儂も老いてきた・・・だから忘れている事もあるかも知れんがそれは思い出したら言おう」

「ははは。それでこれから何をするんです？」

「修行じゃ。のんびりしておる時間はないぞ!!」

「はい」

魔法説明会（後書き）

分からない事があつたら感想のところで聞いて下さい。
しっかり答えるので・・・

次の更新は明後日までです。

では次回予告を・・・

次回は少し時間が飛びます。

1週間～2週間・・・もつとかも・・・

二週間後（前書き）

ちよつと時間が飛びました。

・ ・ ・ だって修行風景とかどうしたらいいの？ っ
ってなっ たんですよ
W W

二週間後

『ファイア』

すると手から炎が飛び出し的に当たった。

「よし忍。合格じゃ」

そして壊れた的を修復する。

そして蒼空、光牙、忍を集めて言った。

「蒼空は精霊魔法までは完璧にできるようになったの・・・

光牙も下級魔法はなんとかできるようになった・・・

忍は下級魔法は完璧。中級魔法は少し・・・というところかの」

そう評価した。

実際、蒼空は精霊魔法までをたった二週間でマスターし、忍も下級魔法はマスターした。忍法とかを使っていたから魔法とかのセンスはあったみたいで、魔法には向かないと言われていた光牙も下級魔法を少しだけ使えるようになった。まあ勇者はそういうのに頼らない勇気いる戦闘をがんばれという神の御達しだろう。

「お主等ができるだけ早く行かなくてはならんのだったな・・・」

「はい。魔王を倒すために」

光牙は言った。

「ではこうするか・・・光牙は下級魔法の訓練、忍は精霊魔法の練習だ」

「え？私精霊魔法ですか？だって中級魔法は完璧じゃないし・・・」

「基本は大丈夫じゃ・・・ということは旅の間にも訓練できる。ということは多少ダメでも次のステップに行った方が良い」

「じゃあ俺は？」

光牙は聞いた。

「言っただろう。お主に魔法は向かん。ということは魔法を使う機会も少なくなる。なら下級魔法を少しでも仕上げる事が大切じゃ」

「そうか・・・」

納得したようだ。

だがそこで蒼空が聞いた。

「俺は？」

「お主には禁呪詛を教える。魔王を封印する魔法はたくさん居た方が早くできるが・・・三人共にそれを教えるには時間が掛かりすぎる。だから主だけに教える。上級魔法の基本はマスターしているから旅の間にどうとでもできる」

「分かりました！！」

「光牙と忍はここで訓練。蒼空は着いてこい」

そして師匠について行った。

着いた場所は広く開けた場所だった。

「禁呪詛の封印魔法を主に教える。

封印魔法は封印される対象者、つまり魔王を中心とした魔方阵を地面に描く必要がある。

これは複雑で大きくて難しい。一人では大変かも知れぬが頑張ってやってくれ」

それから魔方阵の描き方、呪文など必要な事を教わった。

「うわっ！ 大変だなあ」

「けどやらねばならぬ」

「分かってます」

「では戻るかの・・・」

そして師匠の家に戻っていった。

二週間後（後書き）

もうすぐ魔法習得編が終わろうとしています・・・早っ！

こんなはずじゃなかった・・・

これからは魔法とかも使っていく感じになります。

それと報告です。

活動報告にも書いたんですが魔界大戦の一話を編集で変えました。
なんかあまりにもクソすぎて・・・

まあ文才無いんで書き直しても一緒かも・・・ww

はつきり言ってあんまり内容に関わってこない所なんで見なくていいです。

家の描写を消して、じいちゃんの家に行く途中の車の中の蒼空って
感じに直ただけです。

ではさようならです。

次の旅へ——（前書き）

うゝん。展開早いかな？

まあいつかWW

次の旅へ――

「蒼空、忍。俺達は魔法を完璧にとは言いが習得できた。・・・
よって俺達は明日出発する。いいな」

「分かった。けど師匠には言っているのか？」

「昼に言った。だから今から王に連絡をするぞ」

「OK。けどどうやってするの？」

「忍忘れたのか？王に貰っただろ？鏡を・・・」

「ああ。あれか」

「そう。だから静かにしてろよ？」

そう言うと光牙は王を呼び出した。

「王様？」

「おお光牙か・・・お主等今どこにおる？」

「魔界最強の魔術師、キルアⅡローブ師匠の下で魔法を学んでおります。そして習得できたのでこれから旅立とうと思っています」

「なぬ？キルアの所にいるのか・・・」

「はい？」

「ならちようどよかった。もうすぐ主等に連絡しようと思ってるな。」

「何でしょう・・・？」

「頼みたいことがある。魔界には竜族というのがおるのを知ってるな？」

「はい。師匠もそうですし・・・なんと言っても魔界は王と魔王、竜王が治めていると言えるでしょうし・・・はっ！まさか・・・？」

「理解が早く助かる。魔界の第三勢力の竜族。しいては竜王の力を貸してもらおうと思ってるんじゃないが・・・協力してあの魔王を倒そうと言ってるんじゃないが・・・中々返事を言ってるのじゃ・・・だから主たちに行き来してもらおうと思ってる・・・」

「あそこにですか？竜族は勇敢で強く、おまけに魔力まで高く気性の荒い竜族に？危なすぎでしょ」

「だからこそお主たちなのじゃ。あやつらは強い者しか認めん。キルアとは全然違うから気を付けての」

「はあ。分かりました」

そこで王の顔が消えた。

「なあなあ光牙。竜族ってヤバイ？」

「ヤバいかも・・・師匠とは全然違う。師匠は気性は荒くもない賢

い人だけど・・・ほとんどの竜族は・・・」

「まあ行くことにはなった訳だ・・・」

「じゃあちよつとだけ竜族の説明をしておくか・・・竜族は竜王が治める一族だ。そして四竜と呼ばれる幹部がいる。四竜は竜族でも最も強いと言われる実力者だ」

「四竜？」

「そうだ。蒼竜、白竜、赤竜、黒竜（そうりゅう はくりゅう せきりゅう こくりゅう）からなる者だ。それの上に立つのが竜王だ」

「へえ」

「分かったら明日に備え寝るぞ」

「「分かった」」

そして三人は寝た。

そして出発の朝――――

「師匠。お世話になりました」

蒼空が頭を下げると光牙、忍も頭を下げた。

「「お世話になりました」」

「久しぶりにおもしろかったわい。また来るのじゃぞ」

「はい」

「そうじゃ。蒼空にこれを渡そうと思つての・・・」

そう言つて師匠は懷から本を取り出した。

「これは・・・？」

「魔導書じゃ。いろんな魔法のことが載つておる。それとこれじゃ」

そう言つて師匠が渡してきたのは指輪だった。

「うわぁゝなんかキレイかも・・・」

そう横から忍が言っていた。

その指輪には別に大きなダイヤが付いているわけでもない。

だがそれには目を引き付ける何かがあった。

「これは魔界のあるところでしか取る事のできない貴重な鉱石で作られた指輪じゃ。これは壊れる事は絶対にない。これに儂の魔力を少し封じた。必要になったときに使いなさい」

「はい」

そう言つて蒼空は指輪を受け取った。

「どうしようか・・・」

「首から鎖とかで下げたら？」

忍だ。

「それがいいかな・・・鎖持ってたかな・・・」

「儂が創ってやろう」

師匠が呪文を唱えると鎖ができた。

「ありがとうございます」

「これぐらい朝飯前じゃ」

蒼空は鎖に指輪を通し首から下げた。

「蒼空。儂がやったように刀など物体になら魔力をためる事ができる。もしもという時のためためるのは大切じゃぞ」

「はい」

「それでこれからどこに行くのじゃ？」

「竜族の王の所へ」

「ストルドの所へかの？」

「ストルド？」

「現竜王の名じゃ。儂とあいつは幼馴染の関係にある」

「へ？人型ってことですか？」

蒼空が聞いた。

「そうじゃ。竜王って名じゃから竜の姿を想像したんじやろうが奴は人型じゃよ・・・竜族の人型に生まれたものはいつでも竜の姿になることができる。永遠に人型には戻れぬが・・・」

「そうなんですか・・・」

「まあ気を付けるんじやの。奴は強いし政治に向いておるが・・・強い者しか認めぬ」

「まあ行ってきます」

「頑張るんじやぞ。そして必ず魔王に勝ち、魔界に平和をもたらすのじゃ！」

「」「はい」「」

そして師匠と別れた。

三人の次の旅が始まった――――

次の旅へ——（後書き）

魔法習得編——完——ってところですね。

次話からは『第三勢力編』へと入って行きます。

まあそれより魔法習得編早かったなあ・・・

感想等よろしくお願いします。

死霊の森を出て（前書き）

サブタイトルが思いつきませんでした……

死霊の森を出て

「死霊の森……もうここにも当分来ねえな」

死霊の森を歩きながら蒼空は呟いた。

蒼空が後ろを見ると二人も感慨深い感じで見ていた。

「うん。そうだね……ここは修行でよく来たからもう幽霊が怖くなかった」

「そういや最初は叫んでたしな」

「ははは。ここでまた出てきたら面白いかもな…」

「そういうこと言うに出てくるよお」

突然何かが光牙の横の空を斬った。

「な—————っ！」

そう言っただけで後ろを向き戦闘態勢に入る。

「あ——出て来ちゃった？」

今噂していた幽霊が群れを成して襲ってきいてた。

「そういや師匠が言ってたな。『初めて見た奴と住処を荒らそうとした者、森を出ようとした奴は幽霊が容赦なく襲って来る』って」

「それを早く言うべきじゃない？」

「けど、どうせ出ないといけないんだからどっち道一緒だろ」

「まあそれもそうか」

光牙は頷いた。

「どうすんのよ。物理攻撃効かなさそうだし……」

「そうそう。これも師匠が言ってたんだけど光とか炎に弱いらしい」

「じゃあ俺の出番か」

光牙が剣を上突き出し叫んだ。

「みんな目を瞑ってろよ。『ダズリング・ライト』」

すると眩い光に辺りが包まれた。

目を開けると幽霊は一人としていなかった。

「結構簡単に倒せるな」

光牙が言った。

その後は何事もなく森を抜けた。

「竜族のいるのはどっちだ？」

蒼空が訪ねた。

するとそれに光牙が答えた。

「ここから北に何キロか行ったところだ」

「これ以上北に行くのか？」

そう死霊の森や師匠の家も魔界でも結構北の方に属している。

「そうだ。けどそこまで離れてないと思うから何日か歩けば着くぞ」

「けど寒そうじゃない？ここでも結構寒いし……」

忍が言った。

「そうだな……魔界の北はずっと冬らしいからここも寒いところらしい。暖かい服がないと……」

光牙が言った。

「え？ここ寒いかな？」

蒼空が言った。

「は？寒いだろ……」

「まじか…俺の感覚鈍ったかな」

「まあとりあえずここより寒くなることは分かっているからどつかの街に寄って服でも買って来るか」

「そうだね……」

「あ！ その必要ないぞ？ 自分の周りを暖める魔法あるから……寒かったら俺がかけてやろうか？」

「おお。じゃあやってくれ」

「おっけー。『ホット』」

すると光が出て光牙、忍を包み込む。

「うわっ。暖かくなってきた」

「蒼空？ 自分はやらなくていいの？」

「ああ。俺は大丈夫。寒くなってきたら自分でするから」

「じゃあ行くぞ！」

三人は魔界の最北端にある竜族がいる所を目指し、歩き出した。

死霊の森を出て（後書き）

今度は幽霊を倒しました。

一応今回から『第三勢力編』へ突入です。

次回予告をします。

多分ですが竜族の砦付近から始まるかなあ〜と思います。

白銀の世界（前書き）

竜族の所へ到し着！

白銀の世界

白銀の世界———

辺り一面、白一色で出来ているみたいだ。

今は快晴。青い空が見えている。

そこを歩く三人の影。

「後どれくらい？」

忍が訪ねる。

「かなりデカイ城があるみたいだから分かんと思うんだけど」

それに光牙が応えた。

「じゃあまだまだっばいね」

「ああ。それより蒼空の魔法すごいな。かなり寒そうなのにぽかぽかしてて気持ちいいぐらいだ」

「そうだね。けど蒼空はまだ魔法使っていないけど大丈夫？」

「ああ。魔法は使っていないけど寒くないし、なんか逆に頭も冴えてきた。なんでだろう？」

「もしかして！」

忍が声を上げた。

「何だ？」

「あれじゃない？ 蒼空って雪景、つまり氷の刀の使い手だから氷とかそういうのに耐性ができて寒さとかに強いんじゃない？」

「そんな事……あるかも」

「まあいいんじゃないね」

そして一つ丘を越えた所で馬鹿でかい城が見えた。

「城だ——」

かなり壮観だった。

その時声がかかった。

「お前ら何者だ！？」

見張りみたいだった。

その見張りは鎧を着ていて、槍をこっちに向けている。

「私は竜族の兵士だ。お前らここはどこか分かっているのか？」

「竜族の城だろ？」

「分かっていて来ているのか……もしや魔王軍のスパイ!? もしくは、魔王軍の暗殺者か?」

「なわけあるか!! 暗殺者がこんな堂々と来るか!」

蒼空が怒鳴った。

「それもそうか……じゃあ何者だ」

「勇者一行だ。竜王にお目にかかりたい」

「勇者!? 嘘だな……」

そう言うと呼んだ。

「敵襲! 敵襲!」

するとその声を聴いたであろう兵士がこっちに近づいてきた。

「何事だ!?!」

「敵襲だ。勇者とか名乗っている」

「敵か……総員臨戦態勢」

すると十人ぐらいの兵士に取り囲まれた。

「おいおい。待って。俺達は戦う気持ちないし、戦ったら絶対に勝つからやめてくれ」

光牙が言ったがその声は無視されてしまった。

そしてこの中では一番地位の高いだろうと思われる兵士の掛け声と共に襲いかかってきた。

しょうがないと思い剣を抜こうとしたところで今までより大きな声が後ろからかかった。

「やめろ！」

すると剣を抜いて襲いかかってきた奴もそうじゃないのも全員ピタッと動きを止め、敬礼し始めた。

すると声の主であろう男が後ろから馬に乗って現れた。

鎧を着て、槍を下げている。鎧の上からでも分かる屈強な体、そいつが馬から降りて言った。

「馬鹿者！ この方は勇者様だ。竜王様にお話があって来られたであろう客人だぞ！ 攻撃するとは…」

「すみません。赤竜様。^{せきりゅう}知らなくて……」

「御無礼をお許し下さい。勇者様」

「あなたが四竜の一人、赤竜様^{せきりゅう}ですか」

「はいそうでございます」

それを聞いて誰にも聞こえないくらいの声で呟いた。

「いきなり幹部登場っ」と

「なにか言ったか？ 蒼空」

「いやなんでもない光牙」

「お前たちは見張りを続けろ」

四竜の一人、赤竜は部下に命じた。
せきりゆう

「では勇者様。我が主、竜王様の城へご案内致します」

そして言われるがまま城へ案内された。

白銀の世界（後書き）

お気に入り登録、感想等待ってます。

次話は城内部の様子ですかね……

謁見の間にて（前書き）

36話です。

謁見の間にて

城の中は馬鹿でかいという印象を真っ先に受けた。

真紅の鎧、槍を着た男赤竜せきりゆうが蒼空達の前を歩いていた。

「今から竜王様の所へ行ってお伺いを立ててくるから待っていてください」

そう言いある部屋に通された。

赤竜せきりゆうが出て行くのを見て蒼空は言った。

「本当に大丈夫か？」

「さあ？ まあ大丈夫だと思うけど」

「もしかしたら戦わされるかもよ？ 強い奴しか認めないんだろ？」

「可能性はあるな……」

「そしたら勝てるか？」

「頑張るしかない」

そう駄弁りながら待つ事数十分。ドアが空き赤竜せきりゆうが入ってきた。

「竜王様がお会いになるようです。謁見の間にご案内致しますので私の後へと続いて下さい」

「来たな……」

三人は立ちあがり赤竜の後に続き、部屋を出た。

キレイに掃除され、装飾された廊下や階段を上り一際大きな扉の前で止まった。

「くれぐれも失礼のないように……」

そうくぎを刺され大きな扉が音を立て開いていく。

まず目に飛び込んでくるのは自分たちが通る道だけを開けて横にズラッと並ぶ兵士だ。

兵士の着ている鎧には色が四種類ある。

赤、蒼、白、黒の鎧だ。

だが共通点が一つ両肩の所に竜族の紋章であるだろう竜の絵が付いている事だ。

その次にその奥を見た時に目に入る竜王だと思われる人物が玉座に座っている姿だ。

蒼空達は赤竜の後に続き奥へと進んでいく。

玉座に座る竜王の少し前で止まると三人の蒼、白、黒の鎧を着た兵士が目に入る。

自分たちの方から見て竜王の右に蒼、黒の鎧を着た兵士。
左に白の鎧を着た兵士がたっている。

赤竜は蒼空達の前を離れ、竜王の左の方へ行きそこに立った。

おそらく竜王の横にいるのは全員四竜だろう。

蒼空達に緊張した雰囲気立ち込めっていると竜王が口を開いた。

「ようこそ。竜族の城へ」

そこで三人はお辞儀をする。

「まずは我が竜族の戦士が君達に働いた無礼を誤っておこう」

全くそう思っていないような口ぶりで言ってきた。

「で話があるようだが何かかな？」

そこで威厳のある口調になる。

「我が主、王からの伝言です」

「それは王軍の下に付け…という話かな？」

「それは少し違います。共に魔王と戦ってほしいという事です」

「同じような物だ……返事は『NO』だ」

「…!!
なぜでしょうか」

「我らは人の下には付かない。それに弱い者の頼みも聞かぬ。それ

に理由もない、魔王は我らの領土を攻めて来ていない。我等の力にビビッての」

「だから下に着くのではない、共に戦いましょうと言っています。それに確かにあなた達の力は強大で簡単に攻めるなんて事はできません。だが我らがもし倒され魔王の力が強大になれば…時間の問題です」

「ふむ……一理あるな」

そこで光牙はさっきまでとは違う、強い声で言った。

「それに…王は弱くない!!」

「それはどうかな…それに王軍には我等竜族のように強い兵士がいるのか？」

光牙が次の言葉を言う前に竜王はあざ笑うように言った。

「我は強い者は好きだ。君達が竜族最強の戦士『四竜』に勝てば竜族は王軍に力を貸し魔王を倒すと誓おう」

そこで竜王の横にいる四竜の一人、白い鎧を着ているから多分白竜だと思われる人物が竜王に言った。

「竜王様。何を考えていらっしゃるのですか」

「勇者殿が言った、力を付けられてからでは竜族であろうと負けるかもしれぬ。それに魔王を倒しに行く、勇者一行が魔王を倒せる力を持っているなら一緒に戦った方が我等にも犠牲が少なくて済む。」

もし魔王を倒すだけの力がなければ王軍との戦いに弱った魔王軍を
竜族の全精力を持って叩き潰せばいい。つまりここで勇者一行の力
を見るのが最重要だ」

「そうですが……」

「異論は認めぬ。竜族の戦士たちよ。戦う場所を開けておくれ」

すると兵士が全員一気に横に掃けた。

「勇者殿、やるかの？」

「…はい。他に選択肢はないようですし」

「よろしい。四竜よ前に出よ」

赤、蒼、白、黒の鎧を着た戦士が前に出る。

そのうちの一人、黒竜が言った。

「我らが戦っている時、竜王様の護衛を誰かしてくれ」

すると何人かの兵士が走って竜王の所へ行った。

「四竜よ。手加減は許さぬ。勇者殿たちもじゃ」

『分かりました』

四竜、光牙が口を揃え返事をした。

「おい忍。俺達も戦うのか…?」

「そういう感じだね」

「これで負けたらどうなる？」

「王軍が苦しくなってももしかしたら負けるかも……」

「って事は負けられない？」

「そうだね」

「まあしょうがないか……」

小声で話し合った後二人も声を揃え返事をした。

『分かりました』

「よろしい。では始めなさい」

そして魔界の運命を背負った戦いが始まった。

謁見の間にて（後書き）

蒼空、光牙、忍VS四竜の戦いを次話で書きます。

魔法を覚えてからのちゃんとした初戦闘なのでそれをふんだんに使った勝負が書ければいいなと思ってますがどうなるかは分かりません。

感想等お待ちしております。

四竜との戦い（前書き）

タイトル通りですが本格的にはまだです。

四竜との戦い

「おい光牙。相手は四人だぞどうする？」

「とりあえず自分に攻撃してきたのと戦おう」

「分かった」

「ああ」

そして三人は剣を構え四竜を見る。

隙など全くない。

それにパツと見ですごい実力を持っていることも分かる。

そんな中で四竜もそれぞれ武器を構える。

赤竜せきりゅうは槍。

蒼竜そうりゅうは片手に一振りずつ刀を持っている。いわゆる双剣って奴だ。

黒竜こくりゅうは黒いバトルアックス。

白竜はくりゅうは細身の長い剣だ。

「誰が一番強えんだあ？」

黒竜こくりゅうがこっちに聞いてくる。

すると蒼竜そうりゅうが答える。

「勇者に決まっているでしょう」

「がはは。それもそうか。じゃあ奴は俺が戦う」

「ご勝手に」

今度は白竜はくりゆうが答える。

すると黒竜こくりゅうが重そうなバトルアックスを持ちながらも決して遅くないスピードで光牙の方に近づき攻撃する。

それを光牙は受け止める。

「がはは。少しはやるようだ。そうじゃなきゃ勇者なんて呼ばれないだろうが…自己紹介が遅れたな。俺は黒竜こくりゅう。四竜の一角だ」

体の大きな黒竜こくりゅうが豪快に笑いながら言う。

「俺は光牙だ」

そして一回距離を置きもう一度戦闘が始まる。

「私たちはどうします?」

色白で目を閉じているような感じの白竜はくりゅうが聞く。

「あなたは休んでいてもいいですよ白竜はくりゅう。数はあつちが少ないですし私達だけで十分勝てます」

「そうですね……ではお言葉に甘えて……」

そう言い剣を鞘に戻す。

「では赤竜^{せきりゅう}。どっちにしますか？」

「俺は蒼空殿の方にする」

「男の方ですか……私も女性と戦うのは控えたかったですがまあいいでしょう」

蒼竜^{そうりゅう}が言うのと二人共、黒竜より早いスピードで襲いかかってくる。

忍は風の力で軽く受け流していた。

「弱い……という訳でもありませんね。では本気で行きましょう」

そう言い戦闘が開始した。

蒼空^{せきりゅう}は赤竜の槍を弾いた。

「蒼空殿。手加減はしません」

「望むところ……」

蒼空^{せきりゅう}と赤竜は向きあい、その後戦闘を開始した。

「さあどういう結果になるでしょうね……」

白竜^{はくりゅう}はその様子をほとんど閉じているような目で見つめていた。

四竜との戦い（後書き）

蒼空と蒼竜。名前が似てるんで気を付けてください。

次回は忍VS蒼竜から始まるかなあと思われます。

忍VS蒼竜（前書き）

タイトル通りです。

忍VS蒼竜

迫りくる二本の刃を忍は風を纏い躲していた。

「中々当たりませんね……」

「その程度の攻撃じゃね」

「ですが攻撃しないと勝てませんよ？」

そう言い蒼竜は口を開け、青い炎を放ってきた。

「な——！？」

忍は青い炎を風で吹き飛ばそうとした。

だがその瞬間青い炎の中から何かが飛び出した。

「これは目くらましですよ」

そう言いながら蒼竜は二本の刃を忍の胴に叩き込もうとしていた。
だが忍は手を蒼竜にかざしながら言った。

「『行動停止』」

そう魔法を唱えると蒼竜の動きが一瞬止まった。

「魔法か…だがこの程度の威力の魔法では……」

蒼竜はすぐに行動を開始した。

「一瞬の事でしたね……」

そう言い忍に攻撃しようとするが——

「一瞬で十分」

忍は一瞬の間に蒼竜せつりゅうとの距離を取っていた。

「魔法…面倒ですね。本気を出してさっさと終わらせますか」

蒼竜は殺気を今までの数十倍出し、忍の前へ一瞬で移動した。

「へ？」

「奥義『桜舞い』」

すると蒼竜は回転しながら忍へ攻撃した。

「くっ——色んな所から攻撃が来るから避けるのが……」

それでも蒼竜は止まることなく、攻撃し続けた。

二本の刀をうまく利用し色んな所から攻撃を繰り返し出し、しかも回転することにより速さも増し、遠心力を利用し一撃一撃を重くしている。

そんな攻撃に刀で弾いたり躲したりしていたが忍は耐えられなくなってきた。

「くそ……この攻撃じゃ疾風を使う暇もない……」

そうすると一撃が忍の肩に当たった。
すると蒼竜が攻撃の手を緩めた。

「分かっただろう？ お前じゃ私には勝てない。あきらめたらどうだ」

「嫌だね」

忍は片膝を尽きながらも蒼竜そうりゅうを睨めつけてそう言った。

忍VS蒼竜（後書き）

決着はまた今度です。

次話は蒼空VS赤竜を書きたいなあと思っています。

忍たちの決着を付けさせず次に行くのはちょっと理由があるんですね。

お知らせです。

二日に一回の更新を目指してましたがとりあえず難しくなってきました。

だから少し伸ばして四日に一更新にしたいと思います。

一応頑張ってやっているのが二作品あってその二作品とも二日に一回はきついです。

やる気のない勇者の物語↓魔界大戦↓……とやっていく予定で四日に一更新は難しいです。

ですがより一層力を籠めやるんで応援よろしくです。

お気に入り登録、感想等待ってます。

蒼空VS赤竜（前書き）

活動報告でも書きましたが自分のミスで一回書いていたのが消えてしまいました。

だから遅れました。すみません。

蒼空VS赤竜

「ふう…やりますね」

四竜の一人赤竜が蒼空と少しだけ距離を取り言った。
そしてもう一回赤竜が足を踏み込み長い槍で蒼空を攻撃する。

「おっと」

そう言い蒼空は躲し、反撃しようとするが思うより遠い所に赤竜がいるため諦める。

「ああ…もうやりにくいな……」

蒼空は今苦戦していた。

攻撃しようとするが近くに行けないまま反撃を受ける。

蒼空は一方的にやられていた。

「喰らえ！」

蒼空はそう言い雪景を振る。

すると赤竜の下に氷の針が出現し、串刺しにしようと伸びる。

だがそれを後ろに飛び、躲した赤竜は蒼空の方に近づき攻撃した。
それを蒼空は刀で弾き、距離を取った。

「やりますね。このままでは倒せるかどうか……。仕方がないので
本気を出すことにします」

「じゃあ俺もそうしようかな」

「やはり…本気ではなかったか……。ふっおもしろい」

「じゃあ行くぜ」

そう言い蒼空は空中に手を躍らせる。

光の魔方阵を描き呪文を唱える。

「喰らえ。『汝。氷の……』」

「遅い！」

蒼空が呪文を唱えようとしている時、いつの間にか懐に入っていた赤竜が言い槍を突く。

「やべえっ！」

そう言い氷で防御壁を創り、自分を守った。

「魔法は効きませんよ……厳密には効きますがあなたの様な速さでは上級魔法を唱える前にそれを阻止できる。かと言って中級魔法では私には…いや四竜の誰にも少しも効きません。そうですね…キルア…ローブぐらいの速さではないと」

「師匠ぐらいか……ははは、俺には無理だな。師匠のように早く空中に書くことはできないからな……」

「へえ…キルアさんに習ったのですか……」

「そうだよ」

蒼空が言った瞬間、赤竜は槍を突き出してくる。

「奥儀…『百烈突き』」

その名の通り槍が残像が見えるくらいのとんでもないスピードで槍を繰り出す。

少し避けた所で蒼空が声を上げた。

「これ以上はやばい……」

「降参しますか？ 今なら死にませんよ」

こんなスピードで攻撃を繰り出しているのに余裕があるのか赤竜は言った。

「なんてな……捉えた!!」

「は……!?!」

そう言う赤竜。

だが蒼空の狙いに気づいたのか赤竜の顔が蒼白になる。

「もしや……」

蒼空はニヤツと笑いそれに答える。

「そのまさか……。どうやってお前の動きを止めようと思っていたのに自分から近づいてくれるとはな」

そう、赤竜はこの攻撃をしている時、移動しない、と言うよりでない。

だから赤竜は蒼空の前で攻撃してるものの止まっている。
次の瞬間、赤竜は攻撃をやめ、逃げようと足を蒼空と反対の方へ向けるが、

「今からでも……」

「もう遅い！　喰らえ！」

そう言い蒼空は雪景を振るう。

すると赤竜や蒼空の下に氷で描かれた馬鹿でかい魔方陣が出来た。

「『汝。氷の裁きを受けん。氷神』」

下から目も眩むような青白い光が漏れ次の瞬間、赤竜の居た所にはでかい一本の氷の針が出来ていた。

その氷の中、赤竜が居た所に赤竜は凍っていた。

「殺してもよかったけど……」

そう言い雪景で氷を斬って赤竜を解放した。

「くそ……俺の負けだ。しかし迂闊だった。魔方陣は光で描かなくても氷でも血でも形どっていれば良かったんだった」

「そういう事。俺は普通にやったんじゃ師匠に速さでは勝てないが雪景を使えばコントロールは難しいが一瞬のうちに氷で魔方陣が描ける。とりあえず捕縛させてもらう」

そう言い蒼空は何か呟いて光の縄を出現させ赤竜を縛った。

「これは俺が命じないと解けない。もがけばもがくほど絡み付くから逃げだそうとしない方がいい。締め付けられた時の命の保証はない」

そう言い蒼空は赤竜に背を向けた。

蒼空VS赤竜（後書き）

もう少し伸ばそうかと思ったんですが終わらせました。
次はVS蒼竜に戻ります。

V S 蒼竜（前書き）

色々あって更新遅れました。

パソコンができなかったのですよ。

すみませんでした。

ってよく見たら40話だった。もうすぐ50話到達です。

VS 蒼竜

「はぁはぁ……」

「もう息が上がったのですか？ あきらめたらどうです？」

蒼竜が二本の剣を両手に忍に話しかける。

「遠慮しとく……」

途中まで言った所で二人の視線は一つの物にくぎ付けになる。

「なっ！？ 赤竜？」

それは氷が聳え立っている様子だ。

「蒼空は勝ったみたいね……」

「赤竜がやられるとはあの少年……ただ者ではありませんね」

そこで蒼竜は深呼吸し、こう続けた。

「早く終わらせることにします。赤竜を倒す腕前の少年とあなたの二人の相手はさすがの私でもきつそうなので……」

「ふう。これで蒼空が来るまで持てば私は勝てるかな……？」

「持ちませんよ……」

そう言い二本の剣で続けざまに攻撃する。

「はあああああああ！！！」

それに忍は風で応戦する。

「ぐっ。風に押される……」

「行くよ！」

忍は風を纏い、速さを増して攻撃する。

だがそれはことごとく躲かれる。

蒼竜も負けじと応戦する。

「うっ！」

忍は肩を押えて呻く。

「先程の傷のようですね……これで終わりにしましょう」

蒼竜の二本の刃が忍に向かう。

だがそれに忍はニヤツと笑った。

「ええ。終わりにしましょうか。あなたの負けで……」

忍の視線は蒼竜の後ろに向いていた。

そこには蒼空が居て、雪景を振り、尖った氷が蒼竜に当たろうとしている光景を忍は見た。

「うっ……」

それは蒼竜の下の腹に当たり、血が滲み出していた。

「くそ……」

蒼竜は呻き、後ろによろけた。

「助かったわ、蒼空」

「危なかったな……」

「ま…まだだ！」

蒼竜はこつちをすごい形相で睨んでいる。

「あきらめろ。お前の負けだ」

蒼空が冷たく言う。

「そうよ。その怪我では私と蒼空の二人を相手取るのは無理だわ」

「そうでもないよ……うおおおおお」

「行くぞ！ 忍」

そう言い蒼空は空中に尖った氷の塊を五個創る。

「借りるわよ」

忍が言うと蒼空は無言で頷いた。

すると忍は蒼竜に向けて手をかざした。

「三倍速!!」

そう言うのと蒼空が放つ時の三倍ぐらいのスピードで五個の尖った氷が蒼竜目がけ飛ぶ。

忍が風を送ったり調整して狙いも完璧に殺さない所に命中させた。

「があああっ!」

蒼竜は地面にひれ伏した。

「お前の負けだな……捕縛させてもらう」

蒼空は赤竜にした事と同じことをして蒼竜を縛った。

「赤竜、蒼竜もやられるとは誤算でした。私も出る必要がありますね」

「……!？」

後ろから声がしてびっくりして二人は後ろを振り向いた。

そこには白竜が静かな顔で立っていた。

「さあ剣を取りなさい。始めましょう」

その言葉に従い蒼空と忍が剣を取り構えた。

「忍、連戦だが本気で行けるか？」

「ええ。本気を出さないとヤバい相手でしょうしね」

「ああ。間違いなく一番強いだろうな」

すると白竜が細身の長剣を抜き言った。

「行きます……」

V S 蒼竜（後書き）

次は無視され続けた光牙にライトをあてて行きたいと思います。

感想等待ってます。

光牙VS黒竜（前書き）

やっと勇者光牙の戦闘です。

光牙VS黒竜

「ふはははは。ここまでやる奴は久しぶりだ。もっと楽しませてくれよ」

バトルアックスを肩に黒竜は言った。

それに光牙は黒龍を軽く見据えて言う。

「じゃあ行くぞ」

「ああ来い」

そう言いバトルアックスを構える。

そこに光牙は突っ込み一閃する。

それを黒竜はバトルアックスで受け止め弾いた後、すぐさま攻撃に転じる。

「力では勝てないな……なら」

そう言いエクスカリバーの力を使い、一瞬で黒竜の背後に移動する。

その背中に向けて剣を振り下ろした。

「なっ————」

確かに直撃している。

見る限り確かに背中に剣が当たっているのに黒竜の背中に傷はない。

なぜか分からない以上離れるしかない。

そして光牙は黒竜から離れ、先程まで居た所に移動する。

「何だあ？ さっきのへなちよこ攻撃は？ そんなんじゃ俺に傷を付ける事はできねえぞ」

そう言い黒竜は笑う。

それに光牙は疑問をぶつける。

「さっきのは何だ？ 能力か？」

「能力う？ そんな物とは違えよ。正真正銘俺の肉体だよ。ただお前の攻撃がへばいだけ。能力に頼らない普通の力だ」

「それはすげえな……」

「今度はこちらから行かせてもらおうかな？」

そう言いその巨体ではありえないスピードで突進してくる。

「スピードは俺の方が断然上だ。能力など使わずとも……」

そう言い光牙は避ける。

そしてすぐさま攻撃を開始する。

「連続で攻撃すれば……」

そう言い目にも留まらぬスピードで黒竜を滅多切りにする。

「これなら……」

そう言い黒竜を見る。
しかし傷一つついていない。

「まじかよ……」

光牙は呻く。

連続で攻撃しても傷一つ付けられないのだ。
ということは攻撃は意味を成さない。

だが速さは自分の方が上、だからこっちも攻撃は喰らわない。
つまり消耗戦になる。

その時は自分に勝ち目はない。

相手は体を鍛えているのだ。

自分も鍛えてはいるが、剣が刃も立たないなんて鍛え方尋常じゃない。
ない。

多分竜族のスキルのなのも手伝っているのだろうか……
とにかく自分は躲せなくなったら終わり。

相手が疲れても攻撃は効かないのだから意味がない。

勝率は絶望的だった。

そんな様子を察したのか黒竜が声をかけてきた。

「諦める気になったか？」

「全然」

攻撃が効かないという事が分かっているがそれでも光牙は黒竜に向かっていく。

そして攻撃を続けた。

光牙VS黒竜（後書き）

さあ次はどうなりますかね……？

VS黒竜は後二話ぐらい書く予定です。多分……
やっぱ次で終わるかも……

まあ4日以内に出せるよう頑張ります。

勝機（前書き）

光牙の話ですね。

勝機

「おらあ！」

大きなバトルアックスが振り下ろされる。
それに少し反応は遅れたが躲す。

「ちいっ。あたねえな……。だが……。反応は鈍ってきてる。どうしたあ？　もうばてたか？」

黒竜の挑発するような問いに光牙はこう答える。

「全然大丈夫だよ。硬さだけが取り柄の奴を倒すぐらいは……」

「言うねえ」

そう言いバトルアックスを振り回す。
それをまた光牙は躲す。

しかしあの重そうな物を軽々と振り回す様子から力もあるようだ。
という事は一発でももろに当たると危ない。
やばいなあ……

光牙は本格的に危ないと感じてきた。
自分の体力や能力にも限りがある。

それに一発でもヤバイとなると自分の取れる選択肢も狭められる。
光牙は黒竜と距離を取り、睨めつけた。
すると黒竜はバトルアックスを地面に突き立てこっちを見ている。
ん——？

その様子はあきらかにおかしく感じた。
普通に余裕ぶっこいてこっちの様子を伺っている、そういう風に

も見える。

だが光牙は違和感を感じていた。
なぜなら黒竜はバトルアックスを話す時やこっちを見ているだけの時もずっと肩に置いていた。

だがそれを今は杖のように地面に置いてこっちを見ている。
そこで光牙は薄く笑った。

「なに笑ってやがる」

「なあに……他愛もない事だよ。確信がないのでね」

次の瞬間、光牙は黒竜の懷に移動していた。

「では確認しようかな」

「なっ———!？」

あまりの早い動きに黒竜はついて行けなく、間拔けな声を上げる。
何の準備もしていない黒竜の胸の所をエクスカリバーで斬りつける。

ザシュッ

そんな音がして血が飛ぶ。
すぐに光牙は離れる。

「やっぱりか……」

「く……しくじったか」

「ああ。まあこれが全部あってるかは知らねえが攻撃が当たること

がはつきりした」

そう攻撃が当たった。

今まではすべて弾かれていた攻撃が。

推測だが黒竜は斬られる部分、もしくは体全体に気みたいのを流し込んでその部分を硬化させていたのだろう。

いやそれだけでは完全には防げていなかっただろう。普段から鍛え上げた肉体や竜族の特性みたいなのもあって攻撃が防がれていたのだ。

それにあの不自然に思った様子。あれは休憩していたようにも見えた。

まああの重そうなバトルアックスを振り回したりしているのだ、自分より体力の消耗は早いだろう。

とにかく休憩している時や油断していて気を送り込むタイミングがずれたならそこに攻撃が当たる。

「けどなあ……」

そう声を上げる。

これは本当に持久戦になりそうだなあと思う。

体力が先に無くなった方が負ける。

だが光牙は嬉しそうに少し笑う。

自分に勝機が出てきた。

それに分かったこともある。

完全な力なんてないということだ。

それは自分たちが倒さないといけない敵、魔王にも当てはまるだろう。

前に戦った時もありえないくらい強かったがその上をいけばいい。そこで光牙は黒竜に向かって剣を構え呟いた。

「とりあえず先に倒さないといけないな。こいつぐらい簡単に倒さないと……」

そして黒竜に向かって行った。

勝機（後書き）

最後の所で魔王の話を入れたのは不適切でしたかね……

まあいいと思ったんだけど……

他の人との戦闘中に考えてますからね。まあ変だと思われた方、

寛大な心で見逃してください。

では感想等待ってます。

覚醒（前書き）

お久しぶりです。

全然筆が進まずこうなってしまった限りです。
すみませんでした。

覚醒

ザシュツ

そう音を立てて血が飛び散る。

光牙は攻撃して離れてまた攻撃と繰り返していた。

「くそがア！」

黒竜が豪快にバトルアックスを振るう。

しかし光牙に当たることはなく、バトルアックスは空を斬る。

そして光牙は黒竜を見る。

黒竜の体は傷だらけだった。

しかしどれも傷が浅い。それで勝負が決まるような大きな傷は見受けられない。

「それでもっ！」

光牙は黒竜に攻撃する。

だがそれは弾かれる。

「ずっとやられっぱなしと思うなよ小僧」

「しまっ————！！！」

黒い大きなバトルアックスが光牙に向かって振り下ろされる。

その様子を目の端で捉え、声を上げる。

避けるのが間に合わない。

それは十分ほど前から弾かれることが無かった剣が先程弾かれ対

応が遅れたから。

光牙は出来るだけ体を逸らした。

その瞬間、体が割れるような痛みが全身を駆け巡った。

右肩から左の横腹まで一直線に傷ができ、血が飛び散る。

「ぐああっ」

光牙は悲痛な声を上げ距離をとった。

そしてエクスカリバーを地面に突き刺し体を支える。

「くはははははははは」

黒竜はさも愉快そうに笑う。

すると少し離れた所から『光牙!』と叫ぶ声が聞こえた。

蒼空だ。

蒼空が声をかけてきた。そして一緒に戦っている忍に何か言いこ
うちに近づいて来ようとした。

しかしそれを白竜に阻止される。

だがそれでも蒼空はこっちに来ようとする。

光牙は必死に声を振り絞り叫んだ。

「蒼空! 俺はいい。そっちの戦いに集中しろ!」

蒼空は心配そうな顔になったがすぐに頷き、自分の戦いに集中し
始めた。

「これで俺の勝利だな」

「それは……どう……かな……」

「強がるな。お前の敗北は今決まった。立っているのもやっとだろう？」

しかしその問いに光牙は答えられない。

痛みが激しい。意識も朦朧とする。

だがエクスカリバーを支えに立ち上がる。

そして叫ぶ。

「俺はこんなところで負けられない！」

その瞬間、エクスカリバーが眩い光を放つ。

目もくらむような光の中で光牙は声を聞いた。

『おもしろい——我はそなたをまだ主として認めぬがその強い心、気に入った。少しの間、我の力を……貸そう』

瞬間、光牙は光に包まれている感覚を覚えた。

体がいつもより軽く、力が漲り、どこか温かい。

どうなっているのか分からないが光牙は笑った。

「これでもう少し戦えそうだ」

その言葉と共に足を一步踏み出す。

そして加速、黒竜の懷に潜り込み胴を一閃する。

「があああああ」

今まで以上に深く剣が入り、傷を与えた。

「く……どうなっている。先程致命傷に繋がる傷を与えたはず……」

くそがつ！」

そう言いバトルアックスを振るう。
それを軽くかわし攻撃する。

インフイニテオラッシュ
「無限の閃光」

目にも留まらぬ速さで敵を切り裂く。

光が残像として残り黒竜が光に包まれるような感じになる。

そして光が消えた瞬間、黒竜はあらゆるところから血を流し膝を
尽き、

「くそがつ」

そう眩き倒れ、気を失った。

その黒竜を見下ろしてから蒼空達が戦っている方に視線を移し、
光牙は言った。

「蒼空達の加勢をしよう」

なぜだろう。今なら負ける気がしない。

そんな感じを覚えながらも蒼空達の戦う方へ足を向けた。

覚醒（後書き）

本文に出てきた声は結構重要ですね。たぶん……
覚醒は一時的な物と思ってくだされば結構なんで。

感想待ってます。

未熟（前書き）

こんにちは。

ここで書くことはあまりないので本編へ。

未熟

「忍、そっちだ！」

蒼空が横を振り向きざまに言う。

忍はその声を聞いてすぐ反応し白竜に攻撃する。

しかしそれはうまく流され攻撃はそこで止まる。

「はあはあ……」

さすがに息も切れてきた。

連戦だったのだから仕方のない気もするが、こんなんじゃないやられるか分からない。

白竜は間違いなく自分より強い。

それにおそらく四竜の中でも一番強い。

剣の使い方がとてもうまく、体も舞うように動く。

だから攻撃はすぐ力をうまく流され、攻撃はいちいち的確に攻撃してくる。

一撃一撃は重くないが急所を狙ってくるので当たればまずい。

神経をフル活用しての戦闘だった。

しかしこちらに優勢だ。

二対一。その状況を利用しての攻撃、それが白竜に勝てるかも知れない唯一の戦法だった。

その事に気づき、すぐにこの戦法を取っているのだが、白竜は二対一と言う不利な状況なのにそれを感じさせない戦いをしている。

それには蒼空も感心していた。

「しかし、勝たないといけない」

「そう言い剣を構え突っ込む。」

勝たないといけない。それも早く。

光牙がピンチだ。チラチラと見ているかぎり光牙の攻撃があまり効いていない。それにさっき傷を負った。

さっき忍に任せようとも思ったが白竜相手に忍だけでは分が悪い。それに気づいたのか光牙は首を横に振った。

なら、早く勝つしかない！

「うおおおおお！」

剣と剣がぶつかり高い音が響く。

白竜は相変わらず閉じているような目でこっちを見て、微笑する。

「何を焦っているのですか？ さっきからあなたの攻撃は単調だ。」

そんな事では私には勝てませんよ」

「そう言い剣で蒼空を斬りつける。」

光牙や忍のようにスピードがそれほど速くない蒼空は簡単に傷を付けられる。

しかしギリギリで躲し、浅い切り傷を負うだけで済んでいる。

そして蒼空は後ろに跳ね、距離を取る。

「くそ……」

そしてすぐに負った傷を氷で塞ぐ。

自分の体を見るとあちこち自分の氷で凍っている。

そして白竜を見る。すると今度は忍が相手をしていた。

しかし、忍はいつもより攻撃のスピードが遅い。それに見ただけで分かる、忍は疲弊しきっていた。

あのままじゃ忍がやられる……。そう思った蒼空は叫ぶ。

「忍！一回下がって休め。肩も痛むんだろう？」

そう言い牽制の意味を込めて白竜に氷を放つ。

それを白竜は一步大きく飛んで躲す。

すると忍との間に距離が生まれる。

そこに蒼空は割り込み白竜に向けて剣を構える。

「ごめん蒼空……助かった」

「いやいいよ、少し休んでいてくれ。だが少し休んだら戻ってきてくれ。さすがにあいつの相手は俺には荷が重すぎる」

そう言い白竜の相手を再開する。

だが攻撃はあたららない、それなのに白竜の攻撃は浅いとはいえ当たっていた。

「弱いですね……」

少しがっかりしたように白竜は言う。

「んあ？」

蒼空は白竜が何を言ったのか一瞬理解できなくて変な声をあげてしまう。

それを気にした様子もなく白竜は攻防を繰り返しながら言う。

「弱い……赤竜を倒したもので私を楽しませることができると期待していたのですが、期待はずれですね」

そう言い白竜は蒼空を斬りつける。
それをギリギリで躲しながら蒼空は問う。

「何が言いたい？」

「残念だということですよ。そんな実力で魔王を倒しに行こうだなんて、とんだお笑い種ですね」

白竜はそこで剣を降ろし、話をし始める。
蒼空も剣を降ろしはしないものの攻撃は止め、話を聞くことにした。

「あなた、本当にそんなので魔王に勝てるんですか？」

「さあな。だが精一杯戦うさ」

「はははは。そんなので行けば魔王と戦う前に腹心の一人にでもやられてしまいますよ」

「けど俺はルークを一回追っ払ったぜ？」

「一人で？ いや違うでしょう。あなたが一人でやっていたらすぐに死んでますね。まああなたと戦ってるときは一人でやってたかもしれないませんがその前に勇者さんかそのお嬢さんがルークさんと戦っていたでしょう？ あなたは一人ではなにもできない」

「う……」

そこで蒼空は言葉に詰まる。
蒼空のそんな様子も気にせず白竜は続ける。

「凶星でしょう。あなたは弱すぎる。今まで勝っていたのは運とその刀の力によるところが大きいでしょう。あなたはその二つに頼り切っている。だから弱い。戦闘の仕方、戦術の立て方など、どれもこれも未熟すぎる」

「……………」

それに蒼空は何もいう事ができない。

それがすべて事実だったから。俺は確かにそれに頼ってしまっている。

だから生身の自分が弱すぎる。戦闘の時に必要な力が全然足りていない。

俺は無力だ……

そこへ追い打ちをかけるように白竜は言う。

「あなたの為にも思い言いますがあなた邪魔になりますよ。勇者の足を引っ張ることになるでしょうね」

そこで忍が我慢の限界だったのか口を開いた。

「か、勝手なこと」「勝手なこと言ってんじゃねえ！」　へ？」

忍が言いかけた所で横から怒鳴り声が聞こえた。

言ったのは光牙。どこか輝いて見える彼は怒っているようだ。

「しかし勇者さん。こいつは今のうちに切っておいた方がいい。後々邪魔になるし蒼空さんが死んでからでは遅い」

「黙れよ。蒼空は死ぬ覚悟はできているだろうし、蒼空は絶対に邪魔になったりしねえよ」

それに蒼空は……

自分はそのような事言ってもらえる立場にいない。

そう思う。だが嬉しかった。そして役に立ちたいと思えた。

そして光牙を見る。光牙は輝いて見えるが深い傷をあちこちに負っていた。

「光牙……ありがとう。それと大丈夫か？」

「大丈夫だ。それよりこいつ倒すぞ」

「私も手伝うわ」

蒼空は雪景を構える。

それに続き光牙、忍も構えた。

「後悔しても遅いですよ……」

白竜も剣を構えなおした。

蒼空は光牙に話しかける。

「ああ。倒すぞ！」

そう言った。

未熟（後書き）

今、テスト期間なんですよ……だるいかぎりです。

なんか昨日休みになりました月曜日にテストがあることになりました。またもうすぐ勉強に戻ります。

ではまた。

感想待ってます。

できること

「蒼空、忍行くぞ！」

光牙が足を一步踏み出す。

一步踏み出したただけだと思ったのに白竜との距離が一気に縮まる。

「——っ——！」

白竜は光牙の速さに少し驚いたような顔になったが、すぐに反応して躲した。

一撃目は躲されたが光牙は攻撃の手を緩めることなく剣を振り下ろし続ける。

「は、速い……だが」

白竜は光牙の攻撃を躲しつつ、剣を振り下ろした。

高い音が響き、光牙の剣が弾かれた。

「四竜最強……さすがだな……」

「お褒め頂き光栄です」

白竜は一旦光牙から距離を取る。

しかし光牙の速さでは距離はあまり意味を成さない。

それを知っている白竜は気を緩めることなく剣を構える。

そのすぐ後、光牙の姿がぶれ、白竜との攻防が始まった。

光牙はとんでもない速さで攻撃を繰り返し、それを白竜はぎりぎりで躲し、光牙の攻撃をいなす。

そんなことが何分か続いた。

それを蒼空と忍は啞然とした表情で見つめていた。

「あの戦闘に入って行く隙が全くねえ……」

蒼空は雪景を持ったまま立ちつくし言う。

それに忍も、

「ええ。下手に入って行ったら光牙の邪魔しそうだしね」

と言いながら頷いていた。

「どうするか……」

そう言いながら蒼空は宙に手を躍らせる。蒼空の目の前に魔方陣が描かれていく。

そしてすぐに発動できるようにして待機する。

すると光牙と白竜が一度距離を取り態勢を立て直そうとしていた。そこを蒼空は逃さず、魔法を唱える。

「光牙！ 少し離れてろ……。炎の精霊の力を借り、我それを放つ！
！>>>炎獄えんごく」

炎の精霊魔法、炎獄を蒼空は呪文を唱え発動させる。

魔法陣の中央から炎の塊が七つ現れ、白竜の上に降り注いだ。

白竜の居た所は白い煙で包まれていた。

「あれを喰らえば無事では……」

蒼空は呟く。

だんだん煙が晴れ、視界が良くなった。
そこには白竜が悠々と立っていた。

「やはり詰めが甘いですね。私や魔王やその幹部の様な強い者が相手の時はあそこに追い打ちをかけるように何らかの方法で攻撃を加えてちょうどいい物ですよ」

そう言い白竜は蒼空の方へ向かって来る。

蒼空よりも大分早い速さで……

だがそれに反応し雪景で弾き、攻撃を加えるが掠りもしなかった。

「遅い……その程度の速さ、一般の兵の速さです」

白竜は蒼空に攻撃を加える。

今度は今までと違い、蒼空の右肩に攻撃が深く刺さった。

蒼空はとっさに後ろに大きくのけぞり雪景を構えようとするが右手に力が入らず、左手だけで構えていた。

右肩から流れてきた血が伝わってきて、力が入らずブランと垂れ下がっている蒼空の右手からポタポタと垂れた。

蒼空はとっさに氷で血を止めようと試みるが違うところを凍らしてしまった。

「くそ……痛みでいまいちコントロールできねえ……」

「蒼空！」

横から忍が叫んだ。

蒼空は周囲に目を向けると白竜が蒼空の目の前まで迫っていた。

そして白竜が攻撃を繰り返した。

それを蒼空は片手一本で攻撃を受け流す。

だが、白竜が弱っている所を見逃すわけがなく連続して攻撃を繰り出す。

もちろんその状態で長く続くわけがなく蒼空は雪景を落としてしまった。

それを拾えば確実にやられるので蒼空は後ろに下がった。

すぐに白竜が雪景を拾って床に深く深く指し、簡単には取れないようにした。

「これであなたは武器が使えなくなった。完全に役立たずに成り下がりました」

そう言った後、すぐに後ろを向き、目の前に迫る光牙と戦闘を始めた。

蒼空は一瞬ボーっとなっていたがすぐに取り直し、左手を右肩に手を当て魔法を唱えた。

「ヴァンダー」

そう言う白い光が蒼空の肩に当たり、傷を治していく。

「下級魔法じゃこんなもんか……」

蒼空はそう呟き完全には治りきっていない肩を見る。

だがそれ以上、治そうとはしない。

そのまま立ち上がり、床に刺さっている雪景の方へ近づいていく。前で白竜と戦っている光牙と忍を目の端に入れ、試しに引っ張ってみる。

「だめか……」

まあそれもそうだろう。

人間では到底敵わないような力を持っている竜族の中でもかなり強い奴が地面に抜けないように刺したのをただの人間が抜ける訳もない。

「だが魔法なら……ファイア」

雪景に当たらないように地面に魔法を放つ。

煙が晴れそこを見ると、

「なっ。傷一つ付いていない。まさか魔導コーティング!？」

魔導コーティングはその名の通り魔法を受け付けないようにコーティングされた物の事だ。

それはよく、鎧などに使われる。

魔導コーティングをしていても防げるのはせいぜい中級魔法ぐらいだが今ここで上級魔法ぐらいの強い威力を持った魔法を使えば城をかなり壊してしまう事になるだろう。

「くそ……これでは俺は何もできない」

自分の無力を嘆いた。

結局俺は雪景に頼っている。

今俺にできる事は……

「魔法で援護することだけか……」

そう言い蒼空は動く。

できること（後書き）

K I N U K A Z Uです。

なんか蒼空って最初の方から無敵だったのに今になって弱く見えま
すね。

それと作品とは関係ありませんが、土曜日から修学旅行に行っ
てき
ます。

場所は沖縄です。一回行った事があるので二回目ですけど楽しんで
きます。

更新はこのせいで少し遅れる予定です。

魔界大戦の方がやる気のない勇者の物語より早く書けるのはなぜだ
ろう……

少しずつ書いてはいるんですが少し遅れてますね。

なので魔界大戦はやる気のない（以下省略）を更新してからなので
遅れそうです。

沖縄楽しむぞ

戦闘終了（前書き）

お久しぶりです。
かなり遅れました。
では46話です。

戦闘終了

今の戦闘状況は若干、光牙と忍の方が有利だった。

徐々に押し始め、白龍はじりじりと後ろに下がって行っている。

だが、白竜は二人がかりでもすぐには倒せず、かなり光牙と忍も苦戦を強いられていた。

「ファイア」

蒼空は魔法を唱える。

その魔法は三人が戦っている方へと飛んでいく。
だが、

「やはりあなたは役立たずなようだ。どこを狙っているのですか？」

白竜は一步も動いていないが、魔法は白竜から逸れ、白竜の後ろへ向かう。

だが、蒼空は少し笑みを浮かべる。

「狙いはそれじゃねえ……。『灼熱の炎よ。我に仇名す者の背で、壁となれ！』」

蒼空が唱えると白竜の背後で先程撃った『ファイア』が止まり、上下左右に分かれ、壁になる。

それで白竜は後ろへと下がれないようになる。

「なっ！？ これはなんだ！？ 魔法では……」

そこで光牙が、ニヤツと笑い、

「そんな事はいい。誰が役に立たないって？」

そう言い、剣を縦に振るう。

白竜はそれを受け損ない、切り裂かれる。

血が飛ぶ。

だが、白竜はそれを気にすることなく、光牙に蹴りを入れた。

「私は負けられない。竜王様のために、竜族の為に、すべての民のために、ここであなた達を止める必要がある」

そう言う。

光牙はそれに、クエスチョンマークを浮かべながら訪ねる。

「俺達はそのために魔王を倒しに行くんだ」

それに、白竜は斬られたところを手で触れながら、言う。

「勇者、お前たちはここで死んではいけない存在だ。私が役立たずと言った少年も後ろの彼女も。だがお前たちは力が足りていない。魔王を倒す前に死んでしまう。魔王を倒すにはあなた達が生きていなければならぬ。だから……ここで止め、強くなるまでは前へ進ませるわけには……いかないんだ」

そこで、白竜は倒れる。

それに光牙は、

「まあ確かに力は足りていないかもしれない。俺もお前と戦う前にこの剣が光り、力を貰っていなければ黒竜に負けてお前と戦ってもいなかっただろう。だが、俺達もここで止まるわけにはいかない」

だ。ここで俺達が止まると魔王に領地を広げられる。そうすれば手を出せなくなってしまう。だから止まるわけにはいかない。だから頼む……。俺達に力を貸してくれ！　俺達が魔王の所まで行くための道を作ってくれ。俺達が魔王を倒すために力を貸してくれ！」

そう、倒れた白竜に手を差し伸べながら言う。

白竜は少し驚いたような顔でまじまじと光牙を見てから少し笑みを浮かべ、光牙の手を取る。

「ふっ……。私の負けのようですね……。ですが決めるのは竜王様です」

「そうだな……」

光牙は白竜の手を取り、立ち上がらせながら言う。

「蒼空！　みんなの手当てを……頼……む……」

光牙を包んでいた光が消える。

そして、蒼空にそう言った後、倒れた。

それに蒼空は『光牙！』と叫びながら走る。

忍や白竜が驚いたような顔で光牙を見ている。

そこに蒼空はたどり着き、光牙の横に座る。

「ひどい傷だ……。やっぱり無理してたんだ……」

そう言い、光牙を仰向けにする。

傷を良く見えるようにした後、手をかざし、

「ヴァンダー」

と呟く。

白い光が漏れ、光牙の傷を癒していく。

だが、すこし傷を塞いだだけでまだ傷は残っていて、血も流れている。

「蒼空！ まだ傷が……」

忍が蒼空に言う。

それに蒼空は、

「大丈夫。これは応急処置。上級魔法は唱えるのに時間が掛かるから……」

そして指を光牙の傷に手を入れる。

光牙は気絶しているが苦痛に顔をしかめる。

そして蒼空は傷から指を抜き、その血で光牙を中心として魔方陣を描く。

「魔方陣の外へ行ってくれ」

蒼空は魔方陣を描きながら忍たちに言う。

忍は白竜に肩を貸しながら言われた通りにする。

魔法陣を書き終わった蒼空は少し溜息を吐き、魔法を唱える。

「汝、神の癒しを受けん。完全なる治癒」
リカパー

すると、魔方陣が光る。

その光に包まれ、光牙の傷が塞がって行く。

その後、光が消えると傷が塞がった光牙が寝ていた。

血は止まり、傷は完全に塞がっている。

「成功だな……」

ホッとしたように蒼空は呟く。

そして指をくると回転させる。

すると、赤竜、蒼竜を縛っていた縄が解かれる。

「皆の治療をしないと……」

蒼空はそう呟き、治療を始めた。

治療を始めた蒼空の心は強敵との戦闘に勝ったという実感ともう一つ、

——俺は弱い。だから強くなってやる。この世界を救えるだけの力を……手に入れる！

この決意に埋め尽くされていた。

戦闘終了（後書き）

やっとVS4竜編が終わりました。

もう少し早く終わらせる予定でしたがこんなにかかってしまいました。

更新はもう少し早くやって行きたいと思います。

お気に入り登録、感想待ってます。

約束（前書き）

更新がめっちゃくちや遅れてすみませんでした。
遅れたにもかかわらず今回はかなり短めです。
すみません。

約束

「——ん。そなたらの願い、聞き入れた。そなたらの王に伝えよ。
『共に魔王を倒そう』とな」

四竜との戦いから数刻も立たないうちに蒼空達は竜王と話をしていた。

竜王は約束は守る男のようで、四竜の治療を済ませた後、すぐに返答をしてくれた。

「竜王様。魔界に住む、魔王の支配から逃れようとする民を代表し、お礼を申し上げます」

光牙がそう言い、片膝を立てる。

それに蒼空と忍が続くように、同じ行為をする。

「よい。これは約束じゃ。四竜を倒せば力を貸すというな。儂は約束を破るようなつまらぬ男になった覚えはないしなる気もない。それにこれは好機でもある。四竜を倒す実力がある者など、これから数十年現れぬだろう。その力を借り、共闘すれば魔界の民を救う事ができる」

「そうですね。我が王と、竜王様の力があれば魔王を倒すことも可能でしょう」

そう光牙が言うと、竜王も頷き答える。

「我等、竜族の猛者達は三月後に魔王軍へ侵攻を開始する。王にもそう伝えよ。戦略等は後で、話し合おうとも伝えておいてもらいた

い」

「分かりました」

そう言うと、光牙は立ち上がり、礼をする。
蒼空も忍も立ち、礼をした。

「では、我等はまた旅へ出ます」

「ああ。勇者、魔界の為に共に戦おう」

そして竜王に背を向け歩きだした。
だがそのすぐ後、呼びとめられる。

「蒼空！」

蒼空は振り返ると、自分呼びとめたのが白竜だと気づき、尋ねる。

「どうした？」

「まず君には詫びを入りたい。すまなかった」

そして白竜は深々と頭を下げた。

「気にしなくてもいいよ。俺の力が足りないのも確かだし、君が魔界を思う気持ちも本物。君が謝る必要はない」

「それでもだな。俺は君を侮辱した」

「だから気にしなくてもいいって。お前のおかげで力が足りないのに気づけた。お礼を言いたいぐらいだ。それでも気に病むって言うなら……そう遠くない時に起こる魔王との戦いするとき王と竜王様の為に精一杯戦ってもらいたい。それは魔界の為にもなるしね。それでチャラだ」

「……分かった。ありがとう」

「じゃあまた」

そう言うと、前を向き、蒼空を待っていた光牙利信に合図し、また歩き出した。

約束（後書き）

言い訳になってしまおうのですが、更新が遅れた訳をお話します。

ぶっちゃけ軽いスランプでした。

スランプと言うのか、あまり書く気になれませんでした。

それでも書こうとしたのですが……データが一回消えまして……やる気消失しました。

それでも頑張って行きますのでよろしくお願いします。

夏休みに入ったので更新を頑張ります。

居週間以内の更新を目指します。

ヴァルガ（前書き）

なんか悪乗りしてやりました。

ヴァルガ

竜王の所から出てから数日が立った。

三人は旅を開始した。もちろん、竜王の協力が得られたという事などは報告済みだ。

今日指しているのは魔王領。竜王領から魔王領に入るのだ。

蒼空は歩きながらふと、思った疑問を忍に聞いてみる。

「なあ忍。魔王領に人間は居るのか？」

「ええ、居るわよ。けどほとんどいない。人間は魔界では希少種だし、何より数十年前に王領に逃げた人が多いわ。魔王領にはほとんど魔族しかない」

「思ったんだけど……魔王軍って魔族の一個種族からできてるんだろ？ 数は王軍の方が多いと思うんだけど」

そこで光牙が話に入ってくる。

「魔界で一番強い種族は、天使族、竜族、魔族なんだ。エルフなんかも魔法が強いけど、戦争嫌いで森で静かに暮らしてるんだけど……。とにかくその強い種族で最も数が多いのは魔族。まあ王軍は多民族軍だから魔族より多いけど、強さは魔族が上だから実力は拮抗している。天使族は王を初め、数十人しかいないし老人が多く戦争には参加していない。これで分かったか？」

「まあ分かった。後、知りたいのは魔王の側近って何人居るんだ？」

「えーっと。私が抜けたから、ルークとジーク、フィシャナにヴァ

ルガの四人ね。全員魔王軍の中でも屈指の実力者だから本気でやらないと負けるわね」

忍がそう答えた、次の瞬間。

どこからか、太く、低い声が響き渡った。

「ふはははは。これはこれは勇者一行ですな？ やっと見つけた」

「っ！？ 誰だ」

三人は背中合わせになって辺りを見渡すが誰もいない。

それにここは少し拓けた平原。

敵がいたら分かるはずなのに、誰の姿も見えない。しかし声だけがする。

「その声、ヴァルガね？」

忍がそう言うと、またまた笑い声が聞こえた。

「裏切り者か……その通りだ。お前らの首、貫うぞ……。と言いたいところだが勘弁してやろう。剣をよこせ」

「なぜだ」

「決まってるだろ？ 魔王様がエクスカリバー、雪景、疾風をご所望だ」

蒼空がキョロキョロ辺りを見渡しながら大声で叫んだ。

「魔王の側近ヴァルグ。姿を現せ」

「上だよ。上」

そう言われて上を見上げると数十メートル上になんか変な鳥に乗った男がいた。

悦の手に持つ獲物は3～4メートルぐらいの長さのハルバード。白兵戦になるのは確かだった。だがそうなった場合武器のリーチが長いあっちが有利か……。

しかも、ルークと同じように圧倒的な力の差を感じる。一人ではまず勝てないだろう。

蒼空はどう戦うか考えながらも上を見上げて叫ぶ。

「なぜ、魔王が欲しがる？ これは選ばれた物しか使えないはずだ」

「そんな事知らねえ。魔王様が知ってればいいんだよ。さあ寄越せ。抵抗せずに渡せば今は見逃してやろう」

「見逃してくれるのか？」

「ああ。話が分かるじゃ……「だが断る」……はあ？」

「こちらは三人。お前は一人。勝てると思っているのか」

「余裕だねえ。それが。封印で鈍ったか知らねえが、昔よりはるかに遅くキレが悪い勇者と、ド素人。それに裏切り者。こっちが話になんねえよ。俺はお前らの剣に気を付ければいいだけだ」

そう言い、変な鳥から飛び降りた。

ヴァルガが地面に降りたとき、ものすごい音と衝撃でよろけそう

になる。

そこを逃さずヴァルガは、蒼空に先制攻撃を仕掛ける。
それに蒼空は後ろに退いて避けようとする。

が――――

思っていたより武器のリーチが長く、避けれないと判断し雪景で弾く。

「そこそこやるようだな。あの不意を突いた攻撃は普通の奴なら死んでるからな」

そう言うと、ヴァルガは一人で笑い始める。

それを見て忍は『うわぁ……』とかなり引いていた。

「中々楽しめそうだ。行くぜエ」

そしてハルバードを振り回しながら蒼空へ襲い掛かる。

それを蒼空は受け止めたり受け流したりしていたが、一撃一撃が重く、手がしびれてくる。

そこに後ろから光牙、横から忍が乱入してきて三対一になった。

それでもヴァルガは笑いながら三人を相手していた。

「なんなんだ、あいつ」

光牙が少し距離を取りながら呟いた。

同じく距離を取った忍がその問いに答える。

「私、あいつ嫌いなよ。たぶんあなたが魔王と封印されてから頭

角を現した奴なんだけど……。戦になったら前線で暴れまわるし、強い奴を見たらケンカを吹っ掛けるし、なにより自分が不利な状況から勝つのが面白いとか言う、根っからの戦闘バトルマニア愛好者なのよ」

「めんどくさそうな奴……」

蒼空も顔をひきつらせながらヴァルガを見ていた。

「だが強いのは確かだ、三人で殺るぞ」

「応！」

そして蒼空が、牽制に魔法を使い、戦闘が始まった。

ヴァルガ（後書き）

.....。

……次回はヴァルガとの戦闘です。

戦闘が終わってまた戦闘ですがまあ頑張ってください。
いつ終わるのかな……。

ヴァルガの力（前書き）

49話です。

次はやっと50話です。

ここまで長かった。

ヴァルガの力

「弱っ」

ヴァルガは余裕の表情でそう言う。

しかし、そう言われても仕方のない状況にはなっていたのだが。三人がかりでも、一方的にやられてしまったのだ。

敗因はそう、連戦の疲労と、相性。

とにかく、ヴァルガとは相性が、悪すぎるのだ。

「くそ……」

蒼空はそう苦虫を潰したような顔で言う。

息もかなり荒い。三人とも肩で息をしていた。

「あーあ。なんか期待外れだな。ルークのアニキが負けたって聞いたからわざわざ魔王様の命令に志願してやってきたってのに……。ザコ過ぎだな。」

まあこれは命令だから悪いがもう………死んでくれ」

バチバチ。

ヴァルガから音がする。

これだ。ヴァルガとの相性が絶望的に悪い理由。

ヴァルガは電気を操る。

あいつは電気を自分と、そして武器に纏い戦闘をする。

たまに雷みたいなのも放ってくるがそれをあまりしないのが唯一の救いだ。

おそらくその理由は、あいつが戦闘愛好者だからだろう。

自分の体で戦闘をする、これが奴の信条みたいなものだろうか？

とにかく、電気を纏っている。

そして自分たちの獲物は、刀や剣だ。

つまり鉄。どういう事か分かるだろうか？

迂闊に攻撃すれば感電してしまう。三人とも一回や二回喰らった所で死にはしないが、一瞬隙ができる。

それが命取りになってしまう。だから自分の武器で直接攻撃ができない。

つまり、遠距離からの攻撃をするしかない。

だが、三人の力。

それは、光牙は光。蒼空が氷。忍が風。

お分かりだろうか？ 遠距離から攻撃するにしても物理的殺傷能力を持つのは蒼空の氷だけ。

光牙や忍の戦闘方法は遠距離からスピードに物を言わせ、一瞬で近づき命を絶つというもの。

もちろんその戦い方しかできないという訳でもない。

光牙は勇者だし、忍も元魔王軍幹部。

ルークなど、敵が自分に近い力、もしくは上回る力を持った奴にしか能力は使わない。

だが、二人とも近接戦闘向きの戦い方をする。

しかし、近接戦闘ができない。

ぶっちゃけ戦力にはあまりならないという事だ。

なら、頼みの綱は蒼空。

しかし蒼空は少し前までは高校生だ。

少し運動神経がよく、体を鍛えていたぐらいの高校生。

それがここ最近の連戦で蒼空の体はかなり疲労がたまり、悲鳴をあげつつある。

そんな者の攻撃がプロにあたるだろうか？ いや、否だ。

「光牙……。ここは撤退しよう」

蒼空は小さな声で、しかも気づかれないようにヴァルガを睨みつけ唇を動かさないように言った。

「なっ！？ そんなことできる訳ないだろう」

光牙もまた小さな声で言う。

「だが、このままでは負ける。戦略的撤退だ。そうしないと負ける」

「そうね。私も蒼空の意見に賛成。」

忍も遠くから風で音を送り、話しかけてくる。

便利だな。風の力。

「しかし敵が、魔王の幹部が居るんだ。簡単には退けない」

勇者としてのプライドか、使命感か光牙は意見を変えようとしな
い。

だけど、このまま戦っても勝てる訳がない。

蒼空も譲る気はなかった。

「それでも退くんか。ここでは、このままでは勝てない。ここで俺
らが負けたらどうなる？ すべてが終わる。退くんか」

「だが……。だが……。くそ、退くしかないのか……」

「よし行くぞ。まあ光牙と忍の速さなら問題ないだろうけど、問題
は俺だな」

「どうする？ 奴は電気を操っている。もしかすると雷みたいに早く動けるかも知れないぞ」

「いや、その可能性は低いと思う。あいつの力はいくらでも”電気”光レベルで早いんだろうがそれを持続する力はないと思う」

「だが、持続する間に追いつかれれば負けか……」

「そう。だから、俺はできるだけ厚い氷の壁を創る。それを魔法で硬くしてそれから逃げれば……」

「それしかないな……」

「じゃあ3つ数えた後、やるぞ」

そして、光牙も忍も頷いた。

「3……2……1……。行け？」

言った瞬間には二人とも行動していた。

忍は風の力で飛び、光牙は光で辺りを照らし、ヴァルガの目くらましをする。

蒼空はできるかぎりの集中をしてヴァルガの下に魔方陣を敷き、それから雪景を振ってヴァルガを分厚い氷の壁で包む。

そして、その上にまた魔方陣を描き、呪文を唱えた。

ヴァルガの真下の魔方陣と真上の魔方陣が輝く。

しかし、それは攻撃用ではなく、氷の強度を高めるための物。

「なんだ？ あの魔法」

「あの魔方陣がある間は挟まれているものの強度が増す」

「ヴァルガの武器の強度はどうなる？」

「それも問題はない。ヴァルガにはヴァルガで別の魔法をかけた。
一定時間魔法の効力が聞かなくなるはずだ」

「そうか……なら急ぐぞ」

「ああ……」

蒼空は氷の翼を創り、飛んだ。

そして少し飛び、離れた後、小さく映る壁を見て
必ず倒す……。
そう誓った。

ヴァルガの力（後書き）

戦闘シーンは特にありませんでした。

戦闘を待ってくださっていた方、申し訳ありません。

次は出来るだけ早く更新したいです。

50話? (前書き)

忍って思えばずっと空気だったような気がしないでもないです。

ということを突然思い出しまして……。

50話ですが今回は 忍のターン？

50話？

ヴァルガの襲撃から早くも数日。

三人はあまり進まず、魔王領に入らないまま数日を過ごしていた。それは蒼空が頼んだからだ。

強くなりたい……。そして今までも修行は続けながら来ていたが、少し足を止め、修行に専念することにしたのだ。

「そうだなあ……。蒼空はやっぱり経験が足りないんだと思う」

忍が蒼空と光牙の修行を見ていった。

「そうだな。蒼空は少し独特の型だけど、それが悪いという事はないし問題があるとすればやはり経験だな」

「けどこればかりはどうしようもないし、ゆっくりしてる時間はないわね」

忍がそう言うのと蒼空は考えるように俯き、少ししたら顔をあげ笑顔で、

「そうか。経験か……。ははっ。……。じゃあ入るか。魔王領に」

「……そうね」

「あと数キロ歩けば魔王領に入る。けどその後は心しておけよ。魔王領ではいつ誰が襲って来るか分からねえぞ。あっちのモンスターは凶暴だからなあ」

「少し休憩したら行きましようか」

忍がそう言うと、蒼空と光牙は頷く。

蒼空は素早く寝転がって刀を右手で握り、空を仰ぐ。

光牙も、適当に座れる場所を探して座る。

忍は蒼空の様子を気にしているように、見つめ光牙の方へ歩み寄る。

そして小さな声で呟いた。

「（ねえ光牙。蒼空ってやっぱり無理してない？）」

「（そうか？）」

「（ええ。なんか無理してるようにしか見えない物）」

「（そう言われればそうかもな……）」

「（ええ。色々気にしてるのかも。だって白竜にもなんか言われてたし、ヴァルガとの戦いでも力の差を感じていたみたいだもの）」

「（蒼空の様子には目を掛けるべきだな）」

「（そうね）」

そう言い、二人は蒼空の様子を見る。

蒼空は寝転がったままの体勢で、空を凝視していた。

ヴァルガの追跡を恐れ、ここは森の中なのだが少し拓けた場所で訓練をしていたため上には木がない。

周りを木に囲まれ、その間から見ている空は日が落ち始める時間と会って少し暗い。

だが、雲は一つもなく、もう一番星が見え始めていた。

「ねえ蒼空。蒼空って時々空を見上げる時があるけどやっぱり好きなの？」

「それって駄洒落？ 寒いよ」

「違うわよ」

「ははっ。まあ空は好きだぜ？ まあこの名前だからな。興味を持ったのもこの名前が原因だが空は良い。どこまでも続いて終わりが無いし、いろんな表情を持ってるし、なにより綺麗だ。なんか見ると落ち着くし。すべての人が家族が友人がお前らが同じ空の下に居るのが分かるし」

そう言う蒼空の顔は穏やかで、何か惹きつけるものがあつた。

その顔を忍はボーっと見つめてしまう。

なにか自分の中の感情が変わっているような気がして顔を振る。

「（うわ……。なんかちょっとカッコいいかも……）」

そんな様子の忍をよそに、蒼空はずっと上を見続ける。

その眼には、魔王との戦いへのためか、決意の色が見えていた。

50話？（後書き）

無理やりだな……おい。

自分の文才のなさに絶望してますorz

というわけで50話でした。

次話から魔王領編です。

感想待ってます！

魔王領（前書き）

魔王領編に突入。

この編はかなり短いと思います。

もうすぐ魔界大戦も大詰めですね。

例によって短え……………

魔王領

「じゃあ行くぞ」

「……………ん」

忍は相槌を打つ。

蒼空は少し考えるようにしてから頷く。

そして三人は歩く。

魔王領のすぐ近くまで来ていたのもあって少しの間歩くだけで魔王領に入る事ができた。

「魔王領に入った」

光牙が呟く。

そしてその変化は蒼空も感じ取っていた。

まず空気が違う。味とかの問題じゃなく、どこか張りつめた様な感じがする。

そして魔力。人間も少なからず魔力を持っているがそれに気づいていないと魔法は使えない。

魔力に気づくことが出来て初めて魔力が流れる。

少し意味が分からないが、魔力があることを知ると自分の体内にあった魔力が外に出るのだ。

それを使って魔法を行使する。だから今まで王領では魔力があまり感じれなかった。

確かに軍に居る人は使える人が多いみたいだが、普通の一般人はあまり使えないからだ。

熟練者は魔力を隠せるみたいだが……。

その魔力を明らかにたくさん感じれるのだ。この刺すような魔力。

おそらく獣の類のものだろう。

獣まで魔法のような力を使って来るとなると少なからず苦戦することになるだろう。

そこで蒼空は決めて、光牙に話しかける。

「光牙……。俺、少しの間抜けるは」

「は？」

「ここからは単独行動をさせてくれ」

「危険だ。魔王領は魔界の四分の一の大きさだが、魔界の二分の一を占める魔界唯一の国を率いる王が魔王たちに苦戦しているのは、竜王に助力を願うのは魔界の魔族の力がそれだけ強いという事なんだ。蒼空なら簡単に負けるようなことはないと思うが三人でいた方がいい」

「それでもだ。俺は強くないとダメだ。三人なら死ぬことも怪我も負う事もまずないだろう。だけど強くなれない。お前らに頼ってばかりじゃだめだと思うんだ。そもそもこれは俺がまいた種だし……。だから頼む！」

蒼空は深く頭を下げる。

忘れていた方もいるかもしれないが、魔王の封印を解いたのは蒼空。

蒼空はそれにかなり負い目を感じている。

魔界の人の命を危険にさらしたこと、人間界の人にも危険を与えられる可能性がある事。人間界が危ういというのは蒼空の家族も危ない。大切な人を守りたいのに少し光牙に頼りすぎていたかもしれないと

蒼空は思っていた。

「光牙……。頼みを聞いてもいいんじゃないかしら」

「……………分かった。だが、絶対に遅れるなよ。魔王の城に行くんだ。あまり長い間は待つ事ができないだろうから」

「ああ。大丈夫だ」

そして蒼空は光牙と忍に向き直り、強い光をたたえた目で二人を見ながら少し笑った。

「次会う時まで壮健で」

蒼空はそう言う森の中に消えた。

王（前書き）

今日は休みなんだよね。
やったぜ。

王

「今回の戦の損害はいくらほどじゃ？」

王の間。

魔界を統べる王の玉座がある場所。

そこで王は王軍元帥であるグランから報告を聞いていた。

「はっ。私が率いた軍の内、2割が戦死。3割が負傷しました。魔王軍の損害は3割が戦死。1割が負傷です」

「そうか……」

この結果は決して良くはない。

なぜか。それはまず、魔王軍は戦士一人一人の質が良い。それは魔族としての力があるからだ。

だがその数が王軍よりは多くない。

王軍は質のいい兵士は一部だ。いや、みんな質は良いが魔族と比べれば言うまでもない。

元帥であるグランをはじめ、一部の兵士はかなり強い。それも魔王軍の将レベルと戦えるほどに。

だが全体を通して見た時、王軍は魔王軍に劣る。

次に数。王軍の数は魔王軍の二倍居た。つまり魔王軍の三割と、王軍の二割では戦死者の割合が王軍の方が多い。

そして負傷者。王軍は三割。それに比べ魔王軍は1割。次の戦で戦えるものは王軍は先の戦の6割ほどだろう。

魔王軍は7割ほどが戦える。つまり戦を続ければ続けるほど王軍は追い詰められて行くことになる。

「どうしたものか……」

王は呟く。

この状況を打破するにはどうすればいいか。

それには二つの選択肢がある。

一つ目の選択肢。

それは王軍の全勢力を持って戦へ望むこと。

この選択肢でのメリット。

これは言うまでもない。先も言ったように戦を続ければ続けるほど王軍に不利な状況に陥る。

それを回避できるという事だ。

次にデメリット。

これは負けたら次どうしようもないという事だ。

負けたらそこで終わり、魔界は魔王の手に堕ちる。人間界もまた然り。

二つ目の選択肢。

それは現状維持ということだ。

戦を今まで通り続ける。これは戦力をどんどん削られるという事だ。

そのメリット。

それは……時間を稼げるということだ。

それによって勇者が魔王を討ち果たす確率を上げる、というものだ。

デメリット。

これは勇者が魔王を討ち果たさないといけないというもの。

つまり勇者がすべての命運を握るということだ。

先の大戦。そこで勇者光牙と雪景の使い手真地のタッグで魔王へ挑み敗れた。

つまりデメリットの方が大きいと言えるだろう。

「勇者一人では分が悪いか……」

王は呟く。

するとグランが口をはさんだ。

「王様。一人ではありません。彼には仲間がいますゆえ。あの二人、中々の強者でした」

「あの雪景の使い手と忍びの女か？」

「ええ」

「だが、雪景の使い手は今まで戦闘などした事のないように見えるが」

「しかし、あのものは天性のものを持っていますよ。しかし前の雪景の使い手に劣るのは確か。三人でも分は悪いかも知れませんが、ただど期待は出来ますよ」

「お主がそこまで言うか……」

王は少し考え込むように黙る。

そして何か思いついたかのように顔をあげた。

「グラン。私は年を取った」

「は？」

グランが呆けた顔になっているのも構わず王は玉座を立った。
そして玉座の前の床に刺さる、五本の名刀のひとつ、炎を司る大
剣『アグニース』を引き抜いた。

「ま、まさか!？」

そういうのも気にせず王は王の間を出ようと歩く。

「お、お待ちください?」

「なんだ?」

「王、それはダメです」

「いや、行く。我自ら決着を……つける」

王の意志の固さに折れたのか、グランは、

「私も行きます」

「ならん。お前は今後の事を託す。合図を出したら王軍の7割を出
して魔王軍への進攻を命ずる。お前は王軍を勝利へ導け」

「ですがっ!」

「お前しかおらん。我は行く」

王はそう言々と王の間を出た。
その後ろ姿を見て、グランは呟く。

「分かりました、王。必ず王軍を勝利へ導きましょう」

王（後書き）

なんか最後グダグダかな……。
修正するかも。

感想待ってます。

魔王（前書き）

かなり間が空きました。すみません。

忘れていた方がいたらあれなんで、軽く今までのあらすじを。

蒼空が魔王と勇者を復活させる↓雪景を手にも勇者と魔界へ↓ルークと交戦（ルーク一時撤退）↓またまたルークと交戦。忍とも交戦↓忍に勝利、ルーク逃亡↓忍が仲間に↓魔法の修行↓ヴァルガと戦闘↓ヴァルガ一時撤退↓魔界領へ（蒼空は光牙、忍と別行動）↓王の話↓魔王の話（今話）

といった感じで進んでいます。かなり端折りましたが、ではどうぞ。

魔王

「魔王様。王軍はどうかやら全勢力を持って、わが軍との徹底抗戦に臨む様子です」

魔王の腹心の一人。魔王軍の四天王と呼ばれる男の一人、ルークは魔王を前に、報告をしていた。

魔王はルークをじっと見たまま、何も言わない。しかしそこから圧倒的な威圧感と、恐ろしい十回せるようなそんな雰囲気を出していた。

この部屋には全部で六人の人が集まっていた。

ルークをはじめとした四天王。そして四天王の次に実力があると言われ、四天王が出れない、もしくはでない場合、線上で指揮を執るオスク。

この五人が魔王という圧倒的権力者。圧倒的支配者を前に立っていた。

ルークが言ってから数秒後、ゆっくりと魔王は口を開いた。

「それは真の情報か？」

「はい。王軍のグランをはじめとした元帥や高官たちが戦力を王都に集め、調練をしているとの情報です」

「都合がいいな。オスク。そなたに命ずる。魔王軍の8割を投じ、王軍への交戦準備を行え。有事の際にはそなたが軍を率いよ」

「はっ」

魔王の言葉に、オスクは跪き、返事をする。そして立ち、一礼す

ると部屋から出ていった。

「いいので？ 四天王が出ずとも」

ルークが聞く。

「ふむ。ヴァルガからの情報だが、もう勇者たちが魔王領に入ってきている。……そうだな？」

「はい。魔王領との境界で交戦いたしました」

戦闘愛好者であり、礼儀なんてないようなヴァルガも魔王の前ではしっかりと返事をする。少しぎこちない気もするが。

「それは、私たちが出るのはまずいですね」

四天王の一角、フィシャナが聞く。

四天王は魔王が封印されたあの時には一人を残して全員勇者と雪景の使い手の前に敗れ、死んでいる。

ただ一人、ルークは王軍との戦争に出ていたため、死んでいない。つまり、四天王は一回崩れ去った。ヴァルガもフィシャナもジークもルークが魔王への忠誠心、魔族への愛、そして実力を兼ね備えたものを選んだ。魔王が復活してから魔王自ら四天王の忠誠心が本物か確かめたいらしいが生き残っているのが本物。しかし、魔王が封印される前から、封印された後も必死で領地を守り、復活を願い、待ち望み、なおかつ実力があるルークが一番魔王から信じられている存在である。

「いや、あの時と違い一人や二人出ても問題はないはずでは？」

ルークは魔王に言う。

実際、勇者の腕は確かだが、前回と違い雪景の使い手が未熟だ。
あの成長の速さと、とっさのときの機転などは厄介だが。

魔王はそれに、

「問題はない。そうだ。だが我は勇者と戦うのは少し楽しみだ。しっかりと決着を付けなければならん。だが、あいつが弱くなっているのなら話は別だ。そんな奴と闘うのなどおもしろくもないし時間の無駄だ。お前らは勇者と全力で闘え。そしてお前ら精鋭が勝ったならそこで話は終わりだ。ここまで勇者がやってくるか、運では来れないここへやってこれるのか試すのだ」

魔王は実際、勇者との戦いを楽しみにしている。二対一とはいえ、魔王と戦い、封印することまで出来た。そんな相手はいない。自分が本気で戦える相手が欲しい。

バトルマニア
戦好きなら、自分が常に優位にあった者ならだれでも抱く感情だ。

「こんなことを思っている時点で少しアレだが……。我は奴を打ち果たし、完璧に近づくのだ。そして世界を手にな？」

魔王が声を張り上げる。その様子を四天王は見つめ、ひれ伏した後、部屋を出た。

魔王（後書き）

『魔界の扉を叩くとき』

この話をよろしく願います。これは魔界大戦のリメイクとなっています。新しいキャラとか出てくるし魔法の設定とかが違うのですが……。

気が向いたら見てやってください。

リメイクをやっているからと言って魔界大戦を止める訳でもないの
でそこはご理解をよろしく願います。

完結はさせます。

魔界の扉を叩くとき←

<http://ncode.syosetu.com/n9520w/>

両作品をよろしく願います。

お気に入り登録、感想等待着ってます

魔界大戦（前書き）

魔界大戦一周年☆

魔界大戦

グランの闘志に満ちた眼に魔王軍が映る。

王軍も魔王軍も戦闘準備を整え、今にも戦争が始まろうとしている。

両軍に緊張が走っているのが分かる。

グランが進軍の指示を出せばすぐに戦争が始まるだろう。

両軍の間は数キロあるため、すぐにぶつかることはないが、先行して放たれる魔法でいくらか数が減るのも分かる。

グランは自分の一言でたくさんの人が死ぬのを知っているから迂闊に声を出すことはできないが、ここで止まるわけにはいかない。だからグランは叫ぶ。

「王軍、全軍に告ぐ。これが最後の戦争になるだろう。負けた方が駆逐される。そして我等の勝利条件は魔王の死だ？ 我らの敗北はここで負ける事。分かるな？ 我々はここで負ける訳にはいかない。愛する者の為、我々は勝たねばならない。魔王軍は強大だ。だが恐れる事はない。王軍の精鋭が負ける訳ないと私は確信している？ それだけではない。我らが主、王も自ら魔王との決着を付けるため、旅立たれた。勇者もまた、戦っている。彼等が魔王を討伐するのを信じ、我等はここで奴らを食い止めるのだ。」

さあ、行くぞ。王軍の精鋭たちよ。魔王軍を蹴散らせ？」

そうグランが叫ぶと、大地が割れるような叫び声上がり、王軍の進軍が始まった。

?
?
?

時を同じくして、魔王軍でも同様の事が行われていた。

魔王軍の指揮を任されるオスクもまた、魔王軍を進軍させようとしていた。

「全軍、聞け。ここが最後の戦争になる。奴らは魔王様の命を奪わんとしている。奴らはここで戦闘をして城にいる勢力をここに集結させ、勇者が魔王様の元へたどり着きやすくしている。

しかし、我々はそれが分かっている。ここに居る。なぜなら魔王様と四天王の皆様が勇者ごときに負ける訳がないのだ。

そして我々が王軍に負ける事もない。魔王様に勇者たちが殺され、絶望に染まった奴らを我々は皆殺しにするのだ。さあ見る王軍を。まるでごみのようではないか。王軍のごみ共を駆除するのだ。さあ進軍せよ」

そうオスクが叫び、魔王軍の進軍が始まる。

? ? ?

二人の指揮官が進軍を宣言し、この戦争の火ぶたは斬って落とされた。

二つの軍が同時に動き、大地が揺れるような叫び声と足音が戦場に響いていた。

そして魔王軍の一部がきらめき、そこから魔法が放たれ、王軍の一部が死に絶える。

それでも進軍が止まることなく、進みつづけ、今度は王軍がきらめきそこから魔法が放たれ魔王軍の一部が死ぬ。

それが何回か続いた後、ついに両軍が激突した。

両軍が入り乱れ、命が散る。

王軍は魔王の侵略から魔界を護るために、魔王軍は魔王の野望を、悲願を叶えるため。

両軍とも譲れぬ思いを持ちながら戦う。

両軍で一番奮闘している二人。

王軍は言うまでもなく、グラン。魔王軍はオスク。

一度彼らが戦うと何人もの命が一瞬で飛ぶ。

その力を持った相手どうし、ぶつかるのが必然だろう。そいつを殺せば明らかに士気は下がるのだから。

グランとオスクは相対し、睨みあっていた。

「オスク……といったか。悪いがお前の命、貰うぞ」

「こちらのセリフだよ。王軍元帥、グラン・エルガー。お前の命、刈り取る」

魔界で最後の大きな戦争。

先の魔界大戦よりも大きい戦争だったとされる、第二次魔界大戦最大の戦闘、グランVSオスク。

彼らの戦闘の火ぶたもまた切って落とされた。

魔界大戦（後書き）

一周年です。ひゃっほう？

長かったねえ。もっと早く終わるはずだったんだけど……。

一周年にしては主人公たちに触れてない事実。触れないでやってくだせえ……。

ここは書いておかないと次行けないのでね。

次回は勇者あたりの話になります。

出来れば今日更新したいなあ……。

感想待ってます。

蒼空の修行（前書き）

遅れました。

それに短いです……。

かなり。

それと作者名を変えました。

（まあどうでもいいけど）

蒼空の修行

木々の隙間から城が見える。

蒼空はその城を森の中から眺めていた。

「あれが、魔王の城だな……」

蒼空は呟く。

光牙や忍から聞いた話によると、魔王の城から半径二十キロくらいはなにもない荒地らしい。

なにもかもが周りで死滅して、すべてが終わりを迎える大地。周りには蒼空のいる場所のように森が残っているがいつかは無くなるらしい。

動物たちはそういう大地で生きていけるように進化し続け、森に集まり、弱肉強食の世界で生き、そこでまた弱い者は捕食され、強い者しか残っていないらしい。

「修行には打ってつけて訳だ」

そこで蒼空は殺気にもよく似たものを感じ、雪景を抜いてそちらを見た。

そこには狼より一回りぐらい大きい獣の群れがいる。

それを見て少し蒼空は口の端を持ち上げる。

「修行つぽくなってきたかな……。雪景の力に頼って駆逐するのは簡単だけど、それじゃあ意味がない。今から本当の意味で危なくなるまでは、能力と魔法の使用を禁止。それでいいかな」

蒼空はそう呟くと木から飛び降りた。

「今からお前らを殺す。悪いな」

蒼空はそう言い、少し頭を下げる。

獣たちはその隙を逃すはずなく、蒼空の首筋へ噛みつこうとする。

「本当に……悪いな」

蒼空に噛みつこうとした狼の首と体が分かれる。

「だけど、俺達は負ける訳にはいかないんだ。負けなかったためには強くなるしかない。動物の命だろうが差別したらダメなんだけど……。俺は進む」

蒼空は狼の群れへ飛び込む。

狼たちの血しぶきが上がった所で蒼空の修行が始まる。

—————光牙達が魔王の城までたどり着くまでにあまり時間は残されていない。

蒼空の修行（後書き）

これでとりあえず書かないといけない所は終わりました。
次ぐらいから四天王との戦いが始まります。

ここからが勝負です（作者の）。
完結まで突っ走ろうと思います。

目標は冬休み中には完結？

……無理かもしれませんが。

明日かあさつてには次話を更新しますので。

では。感想等お持ちしております（本当に待ってるよ）。

四天王戦（前書き）

56話です。

四天王戦

蒼空は暗い森を駆ける。

その体は返り血で汚れ、蒼空自身も怪我をしていた。

しかし、蒼空は止まらず戦い続ける。

大事な仲間が待っているから。最大の敵を倒すために自分の力が必要とされているから、蒼空は自分を磨きながら、走り続ける。

もう、どれだけの動物を殺しただろうか。

蒼空はそう思考しながら、剣を振るう。

すると木の影から蒼空の5倍はありそうな巨体を持つ、虎が現れる。

「デケエ……」

それを見ても蒼空はそれしか言わない。

虎ではなかったが同じようにデカイ敵と戦った事があるからだ。

だから蒼空は落ち着いて対処する。

虎の鋭い、そして巨体から放たれる重い一撃。あたれば命の保証はない。

それを蒼空は無駄のない動きで躲し、虎の胴へ一撃入れる。

その動作だけで、蒼空がこの数時間に経験し、力を付けたことが分かる。

「む……」

しかしその攻撃は肉を少し切り裂いただけであとは厚い毛に阻まれる。

そこへまた飛んでくる攻撃。

蒼空はその手を切り裂く。

そこは毛があまりないので斬れ、血が飛び散る。
だが攻撃は止まらない。

「グウ……」

攻撃が当たり少し蒼空は苦悶の声をあげる。

斬った所で攻撃してきたので蒼空は血まみれになっているが、目
立った外傷は見られない。

蒼空は走り、跳ぶ。

そのまま虎の顔目がけて剣を振り下ろした。

ドスン。という重く響く音が響き渡り、鳥が飛ぶ。

虎は地面にひれ伏していた。

それを蒼空は見下ろす。

パチパチ。

そう手を叩く音が聞こえる。

蒼空は警戒をずっと解いていない。

初めから居る事は分かっていたからだ。

蒼空は体をそちらに向け問う。

「誰だ？」

そう聞くと二人の男女が出てくる。

どちらも美男美女だ。しかし、油断ができない気配を漂わせてい
た。

「私はフィシャナ。魔王軍の將軍。四天王の一角」

「私はジーク。同じだ」

フィシャナと名乗る女とジークと名乗る男。二人とも四天王らしい。

四天王がなぜここに居るのか、という疑問を持つ。それを感じたのか、フィシャナが言う。

「私たちはあなたを殺しに来たの」

「わざわざ勇者の戦力を整えさせるなどありえないからな」

「だからバカなのか、一人でいるあなたを殺しに来たって訳」

「そう。だから」

「「死ねよ」」

そう二人は順番に言う。

そして殺気を噴き出してきた。

四天王二人を同時に相手するのは難しいだろう。しかし、蒼空は笑みを浮かべた。

「これは……死ぬかもな」

「そりゃそうでしょ。四天王二人がかりで勝てると思っているの？」

「さあな。けどやってやるさ」

雪景が光り、あたりに冷気が漂う。

「勝負だ」

蒼空が言った瞬間、四天王二人と、蒼空の戦いが始まった。

四天王戦（後書き）

相変わらず短くてすみません。

しかし、頑張って行こうと思います。

出来るだけ早く更新します。明日か明後日には。

お気に入り登録感想等待ってます。

戦闘（前書き）

蒼空VSフィシャナ&ジークです。

戦闘

フィシャナが蒼空に向かって剣を振り下ろす。

それを蒼空は後ろに移動することで躲す。

そこへ飛んでくる炎の下級魔法『ファイア』

蒼空はそれを凍らせて相殺する。

「ちっ。やっかいだな」

蒼空はそれに翻弄されつつあった。

フィシャナとジークは相性がいい。フィシャナが前衛、ジークが後衛。

フィシャナが攻撃している内に魔法を完成させジークが放ち、決める。

それが二人の戦闘スタイルのようだった。

つけ入る隙がない……。蒼空はそう思う。

だが蒼空も負けてはいない。二対一という不利な状況下、焦ったようなそぶりを見せず、攻撃を捌く。

そして、雪景の能力を巧みに使い、相手を攻撃する。

そんな攻防がもう、数十分続いていた。

両者とも一步も譲らない。

「中々やるわね……」

「ああ、中々やるな」

フィシャナが言い、ジークが同意する。

中々勝負が決められない事にイラついているのだろう、フィシャナからはとてつもなく大きい殺気がずっと漏れている。

そのおかげで蒼空も相手がどこにいるかすぐに分かるから助かっているのだが。

「そんなに簡単に倒せる相手ではなかったようね。あなた、名前は？」

「氷堂 蒼空」

フィシャナが聞き、蒼空は隠すこともなく平然と言う。

しかし、話しかけられても警戒は解かない。

なぜなら、フィシャナとジークの体に強い魔力がまわりついているのを感じているから。そしてそれがどんどん大きくなっていくから。

だから蒼空は警戒を解かない。

「では氷堂蒼空。四天王二人相手にここまで戦えたことを称えてあげましょう」

「いや、いいよ。どうせ、今、称えてくれたところでどうせ忘れるんだろうし」

「中々聡明だな。我々魔族はお前らの事を覚えておくことはしない」

「あら、ジーク。あっさり言っちゃうのね。けどここは乗っておくのが定石じゃないかしら？ この子、私たちに殺されるんだから。」

「わぁーい。四天王のフィシャナ様とジークに褒めてもらった」
「的な感じで、幸せを感じさせてあげてもいいんじゃないかしら？」

「そんなことで喜ぶような輩には見えないが？」

「あら、ジーク。この子のこと中々買っているのね？」

「お前こそ、いつもと違うようなこと言ってるじゃないか」

「まあ、私たち相手にここまで戦っている訳だし」

蒼空は自分が中々買われているという事実に対し驚いていた。

魔族の連中は自分のことを興味ないと思われていると蒼空は考えていたからだ。

特に四天王の様な奴らはその強さゆえに、その考えが強いだろうと思っていた。

蒼空は自分が強くなっている事を感じる。あの、闇雲に戦うという事だけで、こう強くなれた。戦闘の経験というのは大事なんだと蒼空は思った。

しかし、強くなっている事に多少の嬉しさは覚えるが、そこまで蒼空は喜んではない。

蒼空が求めていたのはこの程度でもないからだ。

蒼空が求めるのは、みんなを護れる強さ。魔王を倒せるだけの力だ。

この程度、四天王ぐらいに戸惑っているくらいでは魔王を倒せないだろう、蒼空は思う。

「ここまで戦えたことを称して、私たち最強の技で決めてあげましょう。時間もない事だし」

「時間がない……？」

「時間はない。だけどそれは今から死に行く、お前が関与することではない。故に知らなくてもいい」

「まあ、私たちに勝てたら教えてあげてもいいけど」

フィシャナはそう言ってカラカラ笑う。

その時には二人に溜まっている魔力の量は、凄いことになっていた。

木々は震え、地面が啼く。

「共鳴」

すると魔力が弾ける。

集めた魔力をどうして手放すのか、蒼空は疑問に思っていたが、すぐに知ることになる。

ジークが動く。

今まで、魔法しか使わなかったジーク。近接戦闘もできるのかと蒼空は思いながら、攻撃をいなす。

そこに飛んでくる、魔法。それはフィシャナが放ったものだった。それに驚き、蒼空は身をねじってかろうじて躲す。

そこにフィシャナが飛び込んできて攻撃。蒼空は躲す。躲したところにはジーク。

そして攻撃がくる。

誘い込まれるかのように移動していた蒼空はその攻撃を躲すこともいなすこともできない。できることは身をねじって急所を外すことだけ。

ジークの放った槍が蒼空のわき腹へ当たり、血が出る。

しかしそれにひるむことなく蒼空はジークの顔へ拳を叩きこんだ。ジークが顔をしかめ、距離を取る。

フィシャナも少しだけ距離を取った。

「ちっ……。お前近接戦闘もできたのかよ」

それを聞いたジークは言う。

「それは違う」

「じゃあなんだよ」

「私はそこまで戦闘スキルは高くない。魔族に生まれたからには身体能力はあるが、だがそこまでだ。強くない。

だがここで生きるのが『共鳴』」

「そう。私たちは共鳴することにより、感覚が共有できるの。分かる？ ジーク身体能力はあるが、戦闘経験がなく、技術や戦闘中の駆け引きなどが得意ではない。

だけど、それを『共鳴』により私の感覚がジークの中でも働く。

そしてそれは私も同じ、私は魔法が得意ではにけれど、ジークのおかげで共鳴中は魔法が上手く使えるの。

それぞれの良い所を共有する。それが『共鳴』

今の私たちに死角はないわ」

「そうか……。それぞれのステータスをあげる事ができるって事か。自分が戦闘が得意でなくとももう片方が得意なら同じだけになる。

厄介だな。

しかしジーク。戦闘スキルが高くないのによく四天王に入れたな？」

蒼空は相手を怒らせるという作戦を取るために挑発する。

怒って、攻撃が単調な奴ほど勝ちやすいから。

しかし、ジークは静かに蒼空を見たまま。

「その作戦には乗らんよ。私は参謀や軍師といった方面に特化して

いるからな。それで選ばれたんだよ。

それにフィシャナと組むことにより、『共鳴』によって戦闘スキルは高くなるからな」

「そゆこと。今の私にはジークと同じくらいの頭になってるから、挑発とかには乗らないわよ？」

「そうですか」

「ここまで教えたからにはなおさら殺さないかね。死ねよ」

フィシャナがそう言い、フィシャナとジークは一斉に動きだし、蒼空の前まで移動する。

そしてジークの槍が蒼空の頭に、フィシャナの剣が蒼空の頭めがけて振り下ろされた。

……そして次の瞬間には、赤い血が飛び散った。

戦闘（後書き）

次も更新速くなるように頑張ります。
明日か明後日です。

お気に入り登録、感想等待ってます。

終了（前書き）

どーもー。

終了

血しぶきが飛ぶ。

そして赤い血が地面を伝って地面を赤く染める。

斬られた男は血を大量に流しながらも、後ろへ距離を取った。

「な、なぜだ……」

斬られた男……ジークは、斬られた胴の傷を押さえながら言う。

その顔は苦悶の表情を浮かべている。

フィシャナの顔も苦しそうに歪み、フィシャナ自身も蒼空から離れていた。

「簡単だろ。感覚を共有してるって事は……苦しみや痛みもだろ？
なら斬られる前にどちらかを斬ってしまえばいい。だからお前が
来るところに氷の刃のトラップを仕掛け、攻撃した。すると俺の読
みはビンゴ。痛みも共有してた。……俺の勝ちだ」

「まだだよ……。確かに痛い私に傷はない。感覚を斬れば私の勝ちだ。ジーク」

「ああ」

「「共鳴断鎖」」

そう言う。それが共鳴を切る魔法なのだろう。

「これで、私たちの……」

「負けだよ」

蒼空は冷たく言う。

氷の剣がジークの両腕に両足にに刺さった。

「ぐあああああああ」

二人が一斉にうめき声をあげた。フィシャナは傷はないが地面に倒れている。ジークもじめんにひれ伏し、息も絶え絶えだ。

「俺はさっき、お前らが共鳴……だったか？　を切るのを邪魔する抗魔法を使った」

「そんな馬鹿な……。それは共鳴の魔法を知らなければ、原理を理解しないとそんなことは……まさか!？」

「知らねえよ。そんなの。ただ……師匠が凄エってことだな。師匠が創った抗魔法は大抵の魔法を邪魔できるし」

「そんな……」

「そして共鳴は最上級魔法、もしくは最低でも上級魔法くらいの魔力を使ってた。それと俺と戦ってる間の魔力消費。共鳴中も魔力はずっと消費され続けた。だからジークが回復魔法を構築するまで、ある程度時間があった。だから抗魔法を練るのにかかる時間も稼げたよ」

「くっ……」

「これで最後だよ。四天王。俺がお前らを殺す。そして魔王も必ず。」

まあ感謝しておくぞ。普通に相手されてたら勝てたか分からないからな。共鳴を使ってくれたおかげでなんとかなった」

「くそが……」

フィシャナは立ち上がろうとする。傷はないが魔力消費と体力の消費、今も続く、痛みの共有。

そのせいで立ち上がれない。

「無理だな。終わりって言っただろう？」

「卑怯者め？ 屑が、魔王様に負けるんだ。無駄なあがきはやめておけ！」

「何とでもいえよ。四天王。俺は勇者じゃないんだよ。守りたいものがあるから戦う。勇者一行の一人。俺は勝つためなら、守りたいものが守れるなら卑怯だってなんだっていい。

メテオブリザード
これで終わりにしてやる。『氷剣の雨』」

蒼空が前使っていたアイスシャワー、氷柱を上から落とす技の強化版。

かなり精巧につくられた氷の剣が降り注ぐ。

躲す場所などない、壊すとかするしか回避方法のない技。

しかし動くことのできない二人は直撃してしまう。

体中に穴が開き、二人は絶命した。

「四天王フィシャナ、ジーク。俺の勝ちだ。悪いな」

蒼空はそういう死体を一瞥すると、雪景を鞘に戻し、立ち去った。

終了（後書き）

ちょっと短かったですかね？ 四天王二人をこれだけの話で終わらせてしまいました。

まあ……。うん、やめところ。

次話は光牙と忍かな？

お気に入り登録、感想待ってます。

ヴァルガとの戦闘開始

「前に来た時も思ったがあ城デカいな……」

光牙がぼつりと言う。

それに忍が

「そうね。ここからでもはっきりと形が分かって、さらにでかいとわかるくらいにはデカいわね」

と返す。

二人がいるのは荒れ果てた土地。

すべてが死滅して無に帰った土地。

魔王城ははっきりと見える。さらにでかいと思える位置。だがそれほど近いという訳でもない微妙な位置に二人は居た。

「敵が……四天王が俺達を迎え撃つために打って出るならこの位置だ。分かってるよな」

「ええ。城に被害をいかせるわけにいかないからね。このあたりか、もう少し先か……。どっちにせよ。戦闘準備は必要ね」

「ああ……。四天王が来るとしたら、まず誰だと思う？」

「さあ？ まあルークはないわね。だからヴァルガか、フィシャナか、ジーク。」

ヴァルガはあの通り戦闘^{バトルマニア}狂だし、光牙は知らないと思うけど、フィシャナとジークはコンビを組んでるの。そして私たちは二人。フィシャナとジークじゃないかしら？」

「へえ〜……。けどその読みはハズレのようだな」

光牙は魔王の城のほうを見つめる。
空を何かが飛んでいるのが見える。そしてその影がどんどん近づいてくるのも分かる。

「……そうね」

そう言っている内に黒い影が二人の真上まで迫ってきていた。

「元気にしてたか、勇者ア？」

そう図太い声が響くと、上から人が振ってくる。

二メートルはありそうな巨大な、強靱な肉体。

そして担がれるバトルアックス。

ヴァルガだ。

ヴァルガは二人の数メートル先に落ちてきて、ドオオオンという、デカイ音を響かせ、地面にクレーターを創って落ちてきた。

「さア。やるぞ、勇者。楽しい戦闘だ」
パーティー

そう、声がしてヴァルガは光牙を睨みつけた。

? ? ?

「ヴァルガが戦闘に入りましたか……」

そう呟くのはルーク。
魔王城の一角の部屋で、影から送られてくる情報を聞きながら言う。

「フィシヤナとジークも交戦中……と。」

四天王二人がかりで挑むのです。負けはおそくないでしょうが……あの蒼空という少年は侮れませんね」

「そしてヴァルガは勇者と望月、二人と交戦。少し状況的には不利ですか……」

ルークはそれだけ言うと、目を閉じる。
そして溜息を少しつくと……。

「仕方ない。まだまだ試作段階で、実用には至っていませんが、アレを使う準備をしましょうか。」

戦争では使えませんが三人なら、体力を削るくらいはできるでしょうし」

そう言うと、ルークは影へ沈んだ。
残されたのは暗い部屋に満ちる静寂だけ。

ヴァルガとの戦闘開始（後書き）

これで59話。次で60話ですね。

そして物語もどんどん終わりに近づきます。

なんか、ルークが後で何かしようとしていますね。
まあそれほど深い事でもないですがWW

次話は明日か明後日の更新です。
でわわ。

お気に入り登録、感想等待ってます。

戦闘（前書き）

いええーい60話。

戦闘

光牙のエクスカリバーとヴァルガのハルバードがぶつかり合い、甲高い音を上げる。

光牙は目にも留まらないような猛攻を繰り出す。しかしヴァルガはそれを余裕の表情で受け止める。

忍は後ろから風の見えない鎌鼬を繰り出すがそれもことごとく防がれる。

「はははは。どうした、どうしたア。その程度かア」

ヴァルガは攻撃を受け止めながら豪快に笑う。

「流石は四天王と行った所か……」

忍が言う。

ヴァルガはハルバードを肩に担ぎ、

「そりゃ、そうだろうよ。俺は四天王で一番近接戦闘が強いんだぜ？ お前なら知ってんだろうよ」

「そりゃあ……ね」

忍がヴァルガを睨みつけながら言った。

光牙も剣を構えながら言う。

「本当に厄介だな。魔王と戦うために俺達は力を温存しておかなければマズイ。ここに蒼空が居れば状況は変わってくるんだが……」

「蒼空ア？ ああ、あの雪景の奴か……。ならあいつ、今頃死んでるぞ？」

ヴァルガが言ったその一言に二人は機敏に反応する。

「蒼空が死んでる？ 冗談も休み休みに言えよ」

光牙が低い声で言う。

「馬鹿言わないで。蒼空が死ぬわけじゃない！」

忍が少し興奮気味に言う。

その二人の様子にヴァルガはますます笑いを大きくした。

「死んでるって。なにしろ四天王が二人で殺しに行ったんだぞ。フイシャナとジークがなあ」

「……？ あの二人が出ているの？」

「そうだア。あいつらは二人そろっていれば全距離対応タイプになるからなあ。さすがに共鳴を使われたら俺だって無事でいられるかわかんねえ。そいつらが行ってんだ。死んでるさ。ああ」

「じゃあ死んでないな」

「ええ。死んでないわね。あの二人ごときで蒼空は倒せないわ」

「ああ。お前程度が無事でいられるか分からないくらいなら大丈夫だ」

「ハハハハ。信頼されたもんだなア。そして俺は馬鹿にされてる。うざいなア。殺したくなってくる」

ヴァルガは笑いを止める。

自分をバカにされたことに腹が立っているのか、殺気が一際鋭くなり、二人を襲う。

ヴァルガのハルバードが煌めき、ヴァルガの姿が消えた。

戦闘（後書き）

短い、かなり短い！

それと昨日更新できなくてすみません。

今日ももう一話更新できたらします。

最悪な状況（前書き）

一日に二話更新？
久しぶりだなあ……これ。

最悪な状況

ヴァルガのハルバードが突然、光牙の横に現れる。

そしてそれが光牙の首をはねようと近づくがそれを間一髪のところ避ける。

光の能力ですぐ接近できないところまで避難したところで、光牙はヴァルガを見る。

「なんだ？」

ヴァルガの体からは先程とは比べ物にならない魔力の放出が行われていた。

「ハハハハ。これがなにか教えてやろうかア。まア？ 聡明な勇者殿なら気づいているかもしれないが」

「さしずめ……身体能力の向上ってところか？」

「そうだア。主に魔力を身にまとわせると身体能力が上がるって聞いてなア。これは主直伝さア」

主……魔王の事だろう。

魔王から直伝された技。

しかし、どういう事だ……？

光牙は訳が分からずに首を傾げた。

「それは魔王に教えて貰ったのか？」

「そうだ。お前らが倒そうとしている……魔王様の事だ」

「……………」

そう言い、本格的に訳が分からずに光牙は黙り込んだ。

ヴァルガが動く。そしてハルバードで忍の首をはねようとするが忍は風の力でそれを押しのけようとした。

だが……

「力が強すぎて、風では……止めきれない!？」

そう言い、忍は風の力を使って光牙の所まで後退する。

そうして、ヴァルガが攻撃し、二人が避けるという状況が十数分間続いた。

「……はあ、はあ。これは中々きついな」

光牙と忍は少し息が切れ始めていた。

二人は移動の際、それぞれ光と風の能力を使って移動する。それは一見、体力は使わないように見えるが着地の時など、普通の着地とは比べ物にならない力を使っている。だから疲れるのだ。

まあそうは言っても、光牙は勇者として訓練をしてきているし、スパイとしてしか活動していなかった忍も風を少し足の下に地面向きの風を発生させるなど工夫をしているからまだましなのだ。

「忍、お前何でかわかるか？」

「何が？」

「魔王の狙いだよ。あんなの教えて何になるんだ？ 特に俺たち相手じゃ……」

そう言っているとヴァルガの勢いが突然止まった。
そして息を荒くし、地面に手を突く。

「あれ、なんだこれ」

「やっぱり……」

光牙は言う。

忍はそれに頭の上にはてなマークを付けて、聞く。

「……分からない？」

「ええ」

「じゃあ言う……身体能力の向上は確かに厄介だ。速さも力も倍じゃきかない」

「けど何がダメなの？」

「それは力がありすぎるからだ。まずヴァルガは強い。だからこれを使う事はあまりなかっただろう。

そして魔王が復活してからあまり時間がたっていない。つまり？」

「使い慣れてない？」

「そう。だから身体能力をあげた時の体にかかる負荷になれなさすぎて自滅した」

「そんなの使う前から分かってるじゃない」

「ああ。それでもこれは一撃で勝負が決まるためのものなんだろう」

「……？ それっておかしくない？ 私たちに一撃で攻撃が決まるはずないじゃない。光と風の能力だし」

「だから、なぜここでヴァルガを投入したのかが分からない。捨て駒に使ったのか？」

光牙はヴァルガを見る。

まだ体力は回復していない。

「悪いな。なんか勝った気もしないし、いい気がしないんだが。負ける訳にはいかないからな。殺させてもらう」

光牙はヴァルガの近くに移動した。

「糞が……」

ヴァルガは最後にそう言った。

そして光牙はヴァルガの首をはねた。

しかし、四天王を倒した、という余韻に浸ることも、一息つく間もなく、後ろから、ドドドドドド。と軍隊でも歩くような音がした。光牙と忍は急いでそちらを見る。

「おいおい。本当にヴァルガは捨て駒だったのかよ！？……最悪だな、魔王かルークか知らないけど。それに状況も最悪。蒼空が四天

王二人を倒してくれたと信じて、あとルークと魔王が居るのに、
そいつらと戦う力を温存しながらこいつらに勝てってかよ」

そう言う、二人の眼には魔王軍の旗が掲げられた軍隊が魔王城の
方から近づいてくる様子が映った。

最悪な状況（後書き）

ん、ヴァルガの自滅でした。

それと魔王軍の軍隊。ルークがやろうとしたのはコレでしたね。
どうなるんでしょうか？

次話は明日かな？

合流（前書き）

ちよつと変かな？

合流

かなりの数の魔王軍の兵士が、光牙と忍を殺そうと迫りくる。

兵士は足音をドンドンと響かせ歩いていくが、顔に生気がない。

「何よあれ……生きてる?」

「歩いてるんだから生きてんだろ……と言いたいところだが、分かねえな」

「で、どうするの?」

「倒すしかないだろ……。ここからもし戦場まで行かれたら厄介だし」

「けど、それじゃあ、力を使いきってしまう可能性があるのよ? これだけの数なら。蒼空が居てくれたら……」

忍がそう言った瞬間、後ろから声がする。

「呼んだ?」

「……? 蒼空?」

「ああ。別人に見えるか?」

「四天王二人が殺しに行ったと聞いたがどうしたんだ?」

「ああ、それなら倒したよ」

「強くなったな……。雰囲気とかがまるで違う」

「ええ。この数時間でなにがあったのかしら？」

「どうでもいいじゃねえか。そんなこと。それより……アレをどうするかだろ？」

「ああ」

三人は魔王軍を見る。

その数、ざっと一万。王軍と魔王軍の全面戦争中にどうかき集めたのかは知らないがそれぐらいいる。

そして顔には生気がなく、生きているかどうかさえ危うい。生きていないなら殺せるかどうか不明。

「厄介だな……。これでまた援軍とかが来られると本当に俺ら敗北しちまうな」

「ああ。……来るぞ」

もう数百メートルの位置まで来ていた。

うめき声の様な声を終始だしていて気持ち悪い。

それでも三人はそれぞれ武器を構えて、

「じゃあ一番槍は俺が貰……う？」

蒼空がそう言おうとした瞬間、蒼空の横を膨大な熱量を持った馬鹿でかい炎が通り過ぎて、軍隊に当たった。

敵は焼き尽くされていった。それでも数はまだまだ残っているが。

三人は後ろを振り返り、炎の出所を探す。

「王？」

光牙が叫んだ。

三人の視線の先には、馬鹿でかい、炎を纏った剣を持った、初老の老人が立っていた。

「王、なにをされているのですか!？」

「……決着を付けに来たのだ。魔王を殺すために必要な剣の内のひとつを持つ儂が出てこぬわけにはいくまい。総力戦じゃ。必ず倒すぞ」

「王……」

光牙がそう言い、頭を垂れる。

「よい、勇者よ。ここからは一人の軍人じゃ。魔王を倒すための……な」

「はい。お力をお貸し頂けますか？」

「無論じゃ」

「じゃあまず、あいつらを倒しましょうか」

光牙が戦場へと目を戻す。

そこには魔王軍の軍隊が居て、もうそこまで来ていた。

「その必要はない」

「は？」

「その必要はない。彼らに任せよう」

王は静かに歩いて来て、光牙達の所まで来る。

「危ないです」

光牙がそう言おうとした瞬間、咆哮が聞こえた。
竜の咆哮。

それは大気を震わせ、光牙達の所まで聞こえた。

「約束を果たしに来たぞ、勇者」

竜が四匹、空を舞っていた。

そこから四人の人が落ちてくる。

「四竜……」

そう竜族の幹部四人。

王を守る柱。

「お前ら……」

「君は言った『魔王との戦い』のとき王と竜王様の為に精一杯戦って
もらいたい』その時が来た。君の行く道は私たちが切り開いてやる」

四竜を代表して白竜が言った。

そして四竜がそれぞれの武器で、赤竜は槍、蒼竜は双剣、黒竜はバトルアックス、白竜は長剣でそれぞれ魔王軍へ剣を振るった。

その時に起こる衝撃で、魔王軍が分断され、道ができる。

「さあ、時間がない。行け」

「ああ、ありがとう。みんな行くぞ！」

そう言い、できた道を蒼空と光牙、忍、王は走り出した。

四人とも振り返ることはしないが、すでに四竜と魔王軍の戦闘が行われている音を聞いて、必ず勝って来る。そうみんな心に抱いた。

合流（後書き）

更新です。

さあ終わりへ近づいていきますよ。

12月はあと何話かしか更新できないと思います。

12月中の完結は望めそうにないです。

冬休み中も……どうかな？

お気に入り登録、感想等待ってます。

魔王城

魔王城。

そこは闇の剣を持つ一人の男の城。

そこは魔族の王を務める男の城。

そこは誰もが恐怖し、畏怖する城。

百人に聞けば百人がそこへ行くのをためらう。

百人居れば九十九人がそこへたどり着くことが叶わない城。

たどり着いたところで殺されるのが目に見える。

闇が渦巻き、黒が座る。

あれほど晴れ渡っていた空がこの城の前では曇り、光など一切受け付けない。

暗闇に世界を支配され、どこを歩いているのかさえ分からない世界へ蒼空達は足を踏み入れた。

光牙の能力で辺りを照らし、歩いていた。

もちろん門番などは居たが、四人はそれをあっさり倒し中へ入った。

「静かすぎるな……」

四人は圧倒的な静けさの前に疑問を抱いていた。

光牙や王がいるから光がある。

もし蒼空は一人だったら……と考えると、今頃暗闇と静寂に心が支配されて錯乱しているんじゃないか。と思う。

まっとうな人間だったらそうだろう。

そんなところで暮らしている奴は頭がおかしすぎる。そう思う。

「静かすぎるのは、みんな戦争に行ってるからじゃないか？　王様。今は王軍と魔王軍の全面戦争中なんですよ？」

蒼空がそこまで敬意の籠っていない声で言う。
それに光牙が、

「蒼空、王に失礼だぞ」

「よい、光牙。今は一人の軍人じゃと言っただろう。わたしの名前はアルス・アンギラス。公私の場合はマズイが、アルスでもアンギラスでもアルグでもアルグ爺さんともなんともでも呼べえ！」

ガッハッハと笑う王。

少し緊張感が足りない気もするが、問題ないだろう。

「じゃあアンギラスさんと呼ばせてもらいます」

「私は一応敵のスパイだったんですけど……？」

「よいよい、今は仲間だ。脅されていたとも聞くしの。儂たちはともにも命を預けあうのだ。このくらい普通じゃ」

「じゃあ私もアンギラスさん、と」

「うむ。どうした光牙。納得いかないという顔をして」

アンギラスが言うように、光牙はなとくいかないという顔をしていた。

光牙は「別に何でも……」と返事をして前を向いて歩きだした。

「それと氷堂。主は魔王を倒せなかったら死刑だ、という話を覚え
ておるか？」

「そりゃあ……ね」

「それはなかったことにする。ここまで戦った事でチャラじゃ。気にせずともよいぞ」

「……なんで今ここで？」

「そう言っておかぬと、自分の命が惜しいから戦っているという事になる。そうではないだろう？」

「いや……自分の身はかわいいですよ。……まあ今更逃げる事もしませんし、世界の為なら大事な人たちの為なら死んでもいいですけど」

「ん。それが聞けただけでも良い」

アンギラスがそう言った後は、みんな黙々と歩き、階段を上って行く。

階段を上る理由は、魔王城の上の方から更に濃い闇を感じると光牙が行ってからののだが。

「やっと来ましたね。待っていましたよ。皆様」

階段を上り、あるフロアに到着した瞬間、闇から聞こえてきたのは、魔王に最も忠実で、その忠臣ぶりには蒼空達でも感心してしまうくらい男。

四天王で最も年季が高く、強いであろう男、ルークの声だった。

魔王城（後書き）

今年の更新は一旦ここで置きます。すみません。

恐らく明日か明後日には更新できない状況になるので、そこまで書いてしまうと、中途半端なことになってしまうので。

ルーク戦の途中で、3，4日更新が止まる……。みたいな。

それは避けたいのでご了承願います。

次の更新は恐らく……1月3日、もしくは1月4日になるかと。
そこからは1日1更新ですので。

自分の中ではあと10話から12話くらいで終わると思います。
残りの期間もよろしく願います。

お気に入り登録、感想等待ってます。

ルーク（前書き）

今年の初投稿です。

ルーク

「待ちくたびれましたよ」

そう声がして、闇から姿を現すルーク。

四天王最強で魔王の片腕。

片腕でありながら城でドラドラとする、というような奴ではなく
自らが魔王の為に動いている。

忠誠心が最も高いであろう男。

その姿を見て、蒼空達は戦闘態勢を整える。

「さあ、誰が相手しますか？ なんならみなさんご一緒にどうぞ」

と、余裕の表情で言う。

蒼空はそれに、

「はっ、一回逃げ帰ったくせにいう事がでかいな」

「あの時私は本気を出していませんよ？ それにここは私の領域テリトリーだし」

「負けた奴はそう言うよな」

蒼空は言う。

もちろん本気で言っている訳ではない。

ルークは弱い男ではないと知っている。

しかし、弱音を見せる訳にもいかないから強がる。

それをわかっているのかどうかは知らないがルークは「気にすることはありませんよ」と言う。

そして続けて、

「あの時はあなた達の実力を測りかねていましたから。勇者と戦った事はないし、あなたとも戦った事がありませんから。だが四天王戦で、ある程度把握できました」

「それはあいつらを捨て駒にしたって事か？」

「そうではありませんよ。勝てると思ってました。しかしどういう状況になってもいいように注意をしていただけです」

「そうか。まあそれは戦闘に対する心構えとしては正しいな」

ここで光牙が話に割り込んできた。

光牙の持つ剣が光っている。攻撃を仕掛けるつもりだろう。しかしそこで王、アンギラスが前に出た。

「ここは儂がやろう。戦闘での勘を取り戻しておきたい」

「なっ——」

危険です。光牙はそう言おうとしたがアンギラスの決意の火を見て押しとどまる。

「分かりました。ですが私達も攻撃できる時はします」

「それでよい」

そう言い、アンギラスは炎の剣アグニースをルークの方むけて一振りする。

炎の斬撃が生まれ、ルークの方へ飛ぶがそれは防がれる。

「アグニース。久しぶりにの戦闘じゃ。だが行けるな？ 爆まぜろ」

そう言う、アルグリードが炎を纏った。

それを握る男の表情。

それは歴戦の戦士の顔だ。

時折見せる余裕でさえ、実力を知らない愚かな男、という風には全く見えない。

アングラスが動く。

そして剣が振るわれた。

それだけで、世界が燃える。

その圧倒的な炎の量と熱さに、三人は手を出すこともできず、戦闘を眺めていることしかできなかった。

ルーク（後書き）

あけましておめでとうございます。

今年もまた八雲蒼をよろしくお願いします。

お気に入り登録、感想等待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1764p/>

魔界大戦

2012年1月4日12時21分発行